

フェリーニに彼女を寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンブ
ラバトルに出場する男
の話

KEY (ドS)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガンダムビルドファイターズでフェリーニに彼女寝取られたうちのやたら強いモブ（ゲテモノエピオン）に憑依してしまった

そんな男の話

※8時に投稿

追記：日刊ランキング1位ってなに・・・？（困惑）

KEY (DS)

目次

【機体情報】☆☆☆随時更新 5/24

NEW!!!

1

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、
ガン普拉バトル出場する（別れ話編）

8

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、
ガン普拉バトル出場する（予選編）

17

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する（予選最終編）

26

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、
ガン普拉バトル出場する（つかの間の
休息編）

35

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、
ガン普拉バトル出場する（つかの間の
休息編 その2）

42

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、
ガン普拉バトル出場する（つかの間の

休息編 その3) ————— 50

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する(世界大会バ

トルロワイヤル編) ————— 57

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する(世界大会バ

トルロワイヤル編その2) ————— 65

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する(世界大会バ

トルロワイヤル編その3) ————— 74

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に

憑依したので、先に彼女と別れておいて、
ガン普拉バトル出場する(世界大会

番外乱闘編) ————— 83

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する(世界大会バ

トルロワイヤル編——1次予選編開始)

90

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する(世界大会バ

トルロワイヤル編——1次予選編——その

1)

98

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編 | 2次予選編 | 開始）

121

ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編 | 1次予選編 | その
2）

105

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編 | 2次予選編 | その1

129

ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編 | 2次予選前のお話）

113

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に

憑依したので、先に彼女と別れておいて、
ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編 | 2次予選編 | その2

憑依したので、先に彼女と別れておいて、

136

【幕間】く前世と、自分と、恋人とく
その1 144

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場するく（世界大会バ
トルロワイヤル編」2次予選編」その3

151

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場するく（世界大会バ
トルロワイヤル編」2次予選編」その4

160

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に

憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場するく（世界大会バ
トルロワイヤル編」2次予選編」その5

170

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場するく（世界大会バ
トルロワイヤル編」2次予選編」その6

181

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場するく（世界大会

大騒ぎ編）

190

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編「第三ピリオド前コ
ミュ編」セイ）

201

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編「第三ピリオド編」そ
の1）

213

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、
ガン普拉バトル出場する（世界大会バ

トルロワイヤル編「第三ピリオド編」そ
の2）

220

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編「第三ピリオド編」そ
の3）

228

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、

ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編「第三ピリオド編」そ
の4）

234

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に

憑依したので、先に彼女と別れておいて、
ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編―第三ピリオド編―そ
の5）
—————
241

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に
憑依したので、先に彼女と別れておいて、
ガン普拉バトル出場する（世界大会バ
トルロワイヤル編―番外乱闘 VS
チヨマー）
—————
250

【機体情報】☆☆☆随時更新 5/24 NEW!!!

【ドラグ・エピオン】

本編で、主人公が長らく使ってきた相棒。

エピオンとドラゴンガンダムを足して割る2したような機体。

カラーリングは金色に近い黄色と、緑で塗りたくられており、

ぱっと見はゲテモノに見える。

しかし、そうしたネタっぽい見た目から想像もできないほどに強く

モブの癖に終始、主人公のセイ、レイジペアに対して優位に立っており、

タイマンで互角以上に渡り合ってみせた。

エピオンはビームライフルを持たないため、遠距離戦はできないのだが、

ドラゴンガンダムのクローを付けたし、そこからビーム砲を出せるようになっていて、
ため、遠距離戦もできるようになっている。

チヨマーがやられたところをよそ見しているうちに、

セイ、レイジにビームライフル一撃でやられたため、

悲しい退場の仕方と言わざるを得ない。

ちなみに、この一撃以外は一度も攻撃を当てられておらず、本編出てきたどの機体よりも下手したら速いかもしくない。原作ではフェリーニに彼女を寝取られていたモブが操縦。他の同じく寝取られた者同士で連合を組み、フェリーニを強襲した。

【ドラグ・エピオン・イエフイム】

更に改造したエピオンの発展型。

ドラゴンクローの首二つに加えて、もう一つ首が背中に内蔵されており、三つ首の龍となっている。

名前の由来は、ロシア語で“三重奏”に関する人名から。

カラーリングはそれまでと違い、落ち着いた白がメインのカラーリング。伝説に出てくる“白竜”をイメージした機体となっている。

現在、詳細不明。

本編で判明次第、本資料に記載とする。

【ドム（ランバル専用機）】

ラルさんが作成している専用機のドム。

もし、ランバルにドムが届けていたらというif設定の機体。

グフR35よりは機体性能は高くはないが、

それでも世界大会に出れる程度の性能を誇る。

のちに、ビルド・ファイターズ・トライに出てくる彼の最強機、

”ドムR35”の試作型と言える。

左腕にはグフ・カスタムの五連装砲を。

右腕にはグフのヒート・ロッドを内蔵しており、近接く中距離戦闘において、

無駄のない攻撃をすぐさま行える兵装となっている。

【デザート・シユピーゲル】

国内予選にて出没した、やたら強いモブその1。

本名は、アル・マークス。

身長190cmのマッチョ面（マスク被っているから）

ガンダム・シユピーゲルをデザート仕様に換装し、

防砂処理を機体に施しているため、体をどれだけ回して竜巻を生じさせても、

機体の関節部分に異物が入り込み、動きが止まらないよう考え込まれている。

デザートとはあるが、砂漠地帯以外でも無論性能を十分に発揮させることができ、

多重残影分身（※F91のMEPEと同じような分身）、竜巻による疑似的なIファイ

ルドバリアー、残像付きクナイ掃射といった意味不明な技を“自身の技量だけ”で行えるバグ。

作者も意味がわからない。

<<<<??????>>>>

本編にて判明次第、本資料に記載する。

シユピーゲルの奥の手。

【ザク・スナイパーII】

ザクIIがザク・スナイパーのライフルを持った仕様。

ファイター名は、リリア・アルヴァンズ。

リリちゃんと呼ぶとぶちぎれて、アツパーをかましてくる。

身長150cmの金髪ギャル。

派手な見た目とは裏腹に、物静か。

アル・マークスとは従妹同士。

正確無比な狙撃により、どれだけ速かろうと偏差射撃でNTばりの直撃を狙ってくるバグ枠その2。なんだこいつ

本大会ではスナイパーライフルをさらに高性能なものにとりかえている。

ダブルオーのデユナメスガンダムの装備も流用されており、狙撃に長けた機体の兵装を片っ端から集めたような仕上がりになっている。

<<<<????>>>>

本編にて判明次第、本資料に記載する。

ザク・スナイパーIIの奥の手。

【E X — S ・ G ・ カスタム】

E X — S ガンダムを改造したガンプラ。

元々の基本性能が高いうえに、人口A I、”A L I C E”が搭載されていることにより、

更に機体の性能が向上している。

基本武装はグレネード・ランチャー、メガ粒子砲レベルの長距離ビーム砲のビーム・スマートガン、背部ビームキャノン、優先式オールレンジ武装インコム、ビームソードとてんこ盛りである。

また、ビームピストル程度のビームなら防御するか簡易的なIフィールドも備えつけられている。

【ターンエーガンダム・ウラノス】

元カノが持つ機体のうちの一つ。

主人公の手の内を見るために作った”前座

月光蝶を内蔵しており、

発動すればタダではすまない。

コンセプトは、月光蝶を発動し、

全てを無に帰すというシンプルなもの。

ターンエーは脚部の背面にスラストターが内蔵されているので、

背中にバックパックを背負う必要がないという利点がある。

なので、背中には大きなエネルギータンクを背負っており、

それを使うことで月光蝶の発動時間を長くしている。

だが、最初から一瞬しか使えない切り札を先に主人公に使われ、

痛み分けに。

ウラノス、の由来はギリシア語で”天上なる神”より。

?????
·
???????

(元カノの”最終兵器”)

詳細不明。

キララによると、巨大なMSらしいが・・・?

「?????
切の詳細不明。
? (元カノの”
本当の最終兵器
)」

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（別れ話編）

「ねえ．．．！待って．．．！！待ってよ．．．！！」

後ろから泣きそうな声で俺を追ってくる女性。

正直、足を立ち止まらせて、手を取って抱きしめてあげたいと体の動きが止まってしまいそうだった。

でも、俺にはそうすることはできない。

周りの目も気にせず、彼女から全力で背を向けて走り出し、

逃げる。

———
だって、君、フェリーニにそのうち寝取られちゃうん．．．。

人生で初めてできた彼女に心の中でグッバイを告げ、

◆ 俺は泣きそうな顔を左腕で隠しながら街を走り去った。

気が付いたのは20歳の時。

自分の中に”何か”がインストールされた。

その何かに気が付いたと思った矢先、強烈な頭痛と、体が燃えるように熱く発熱し、意識を失った。

気が付いた時には、ベッドの上で、

隣には付き合い始めたばかりの彼女が泣きそうな顔で、

俺に抱き着いてきた。

しかし、それどころではなかったので、

彼女を抱きしめながらも俺は辺りを見回す。

(・・・?・・・?・・・?.....?)

「よかった・・・!!本当によかった・・・!!」

そして、目の前には涙で紅くなった目を右手でこすりながら、屈託のない笑みを浮かべる女性。

あまりにも現実感がないので、彼女の黒く、長い髪を右手で触ると、くすぐったそうに身をよじった彼女が笑みを浮かべてくる。

「えへへ……。心配したんだからね……。」

「……あ。うん、ごめん……。」

そして、また抱き着いてくる。

ふにゆり、と胸元に柔らかな感触が当たる。

——俺は、頭の中が真っ白になりそうなほど、混乱していた。

自分の頭の中に浮かび上がるビジョン。

それは、どこかのドーム、いやアリーナで、

成長した自分らしき人物がゲテモノみたいな機体を使って、

涙を浮かべながら、怨恨の言葉をとある伊達男に吐き、

そして、敗れ去っていく悲哀の姿。

た。
どう考えても、戦っている相手は、”ガンダムビルドファイターズ”のリカルドだった。

右手で頭を押さえながらうずくまると、彼女が
大丈夫？と今度はこちらの頭をなでてきながら心配そうにのぞき込んでくる。

(いや、いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや!!?)

・・う、嘘ヤン??うせやん!!?)

「あ、そうだ。——はい、コレ!」

「・・」

彼女が笑顔でバッグから取り出してきたそれは

「——前の試合で付いちゃった傷、直しておいたから!!」

次はもつといけるよ!!応援するから、私!!」

——黄色と緑で塗色された、エピオンらしきゲテモノガンダムだった。



前世の記憶を取り戻してから一週間が経過した。

その間、ガン普拉バトルを繰り広げながら、この世界について調べていると、やはりというか、そうであってほしくはなかったがガンダム・ビルドファイターズの世界であった。

その根拠は、最近イタリアでリカルド・フェリーニという青年がガン普拉バトルで名をはせている、というガンプラ特集の雑誌を見たからである。

あの、世界大会で3位に入った化け物グフを操るラル大尉や、世界大会で優勝したらしき珍庵師匠もいることをネットで確認したので、間違いなくそうと認めるしかなかった。

アパートの自室にて、ベッドで寝転がりながらぐるぐると頭の中で浮かんでは消えるそれについて考えをめぐらす。

つまり、俺の彼女についてである。

詳しい描写はないので知らないが、確か俺という人間はリカルドに彼女を寝取られ、その恨みから他の寝取られ組と結託して、世界大会でリカルドを襲撃した男の一人だ。

モブなのだが、モブにしては異様に強く、主人公の二人組とタイマンして追い詰めたほどの実力である。

だが、味方のガウがサテライトキャノンでやられたのを見ている隙にやられてしま

い、完全にフェードアウトしたまごうことなきモブキャラである。

彼女を寝取られ、世界大会では一度見せ場もなく、本編では消えてしまう立ち位置のモブ of モブ。

それがこの俺である。

近いうちにリカルドに彼女は寝取られるのだろう。

なら……。

「……………」

スマホを取り出して、メールを送る。

大切な話があるから近々会いたい、とだけ。

俺がモブにしか過ぎない脇役だったとしても、

彼女は俺に優しくしてくれたいい子だ。

だったら、俺から別れ話を振って、すべてを終わらせてしまおう。

そう思っていることである。

——だが、俺は知らなかった。

バタフライ・エフェクトってやつが、この行動によって引き起こされ、その結果、寝取られた方がマシだと思っうなんてことになるなど、知るすべはなかった。



彼女に一方的に別れ話を告げてから1週間。

引越しの手配もあらかじめして住所も変えたので、

これで完全に縁は切れたはず。

スマホがメールの通知音でまた震える。

無視していたが、恐る恐るスマホを開いてメールを見ると、

ひえ、と身がすくみ、右手からスマホを取り落としそうになった。

『メール着信件数：1789』

何の見間違いかな、とぶるぶる震えていると、

また通知が来て、件数が1790を突破してしまった。
中を見るのが怖くてしようがないが、

試しにいくつか開いて中を見てみることにした。

『ねえ、なんで』

『私、何かしちやった？』

『待つて』

『置いてかないで』

『好き』

『大好き』

『なんでもしてあげるから』

『お願い』

『メール見てよ』

『いや』

『別れるなんていや』

『絶対別れないから』

自撮りのきわどい写真も添付されていたが、

怖くなったので片っ端から削除する。

無言でスマホをそっと上着のポケットに戻し、

エピオンをバッグにしまい、

ドアの外に出る。

——よし!!!全部リカルドのせいだな!!!絶対許さねえ!!!
とりあえず、リカルドのせいにして、国内予選の会場に向かうことにしたのだった。

フエリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する（予選編）

『さあ、ついに始まった国内決勝予選!!!』

100人による、超バトルロワイヤル!!!

刻一刻と原作のイベントが起きて、変化し続ける戦場!!!

生き残るのは誰だああああ!!!?』

「しえいしえいしえいせらあああああ!!!」

エピオンのMA形態で敵を片っ端から弾き飛ばし、

砂漠地帯を悠々と空を飛んで暴れまわる。

ビームが来ようと、実弾がばらまかれようと

アニメ本編では不意打ち以外で一度も攻撃が当たっていない敏捷性だ。

そんじやそこらの木っ端には負ける気はしない。

『ああーっつと!!ガンダムエピオンもとい、”ドラグ・エピオン”が無双をしているぞおとお!!』

「まずはやつをぶつ殺せえ!!」

「野郎!!」

トラウマでよく見た景色と同じバトルロイヤル形式の戦いだが、

俺の元ネタキャラがそうしたように、

徒党を組んで戦い始めるものが出始めた。

始まったばかりだが、予選登録者数100人のうち、すでに数機が脱落していた。

最終的に、残れるのはたった8名だけ。

砂漠地帯を飛行していると、突如、目の前に砂嵐が吹き荒れ、

機体が巻き込まれそうになる。

「うおっ!!?」

『突然砂漠フィールドに砂嵐が発生したぞおとお!!巻き込まれてはひとたまりもない

!!!』

「ちよっ・・・ぎやああああ!!」

「夕、タンクの機動力じゃ逃げられ・・・うわああああ!!」

後ろを見ると、動きの鈍いタンク系やキャノン系が次々と巻き込まれ、

他の機体は無理をして動かず、じつと屈んで最小限に傷を抑えようと冷静に対応していた。

竜巻から逃れようと上空に上昇すると、まるで意思があるかの如く、エピオンに追従してきた。

「——っ!!」

砂嵐にまみれて一瞬だが、竜巻の中心部に紅く光る二つの目が見えた。

「——そこおっ!!」

サブウエポンとして格納していたハンブラビのウミヘビを取り出して

そいつに向かって叩き込むと、竜巻、いや、竜巻をおこしていたそいつの動きは止まり、姿を現した。

「——はっはっはっはあ!!!!よくぞ見抜いた!!強者よ!!」
デザートカラーに迷彩された、ガンダムシユピーケルが、
ウミヘビに左腕をからめとられていた。

(……やっべ、Gガン勢かよ!?)

ガンダムシリーズの中でも、異端、ぶっ壊れの性能の機体が多い番組。

それは、”機動武闘伝Gガンダム”シリーズ

ラスボスのデビルガンダムのえげつなさはもとより、

ハイパーモードになった機体は攻撃を当てる事が不可能と思える挙動を取り、構えたと思ったら手からごんぶとのレーザーを発射するようなチート勢だ。

ガンダムビルドファイターズの最強キャラ、珍庵もそのシリーズの中で特に強い、マスターガンダムを使っていることから、その凶悪さがうかがえるだろう。

シユピーケルはまだハイパーモードがない機体だったはずなので、そこまで理不尽だと思っていなかったが、

左腕に絡みつき、電流を流していたウミヘビを右手に持っていたナイフで細切れにし、あっさりと拘束から抜け出し、

即座にまた回って竜巻を起こし始めたのを見て、考えを即座に改める。

「——くっそ!!これだから理不尽はよおお!!」

「甘い!!甘いぞドラゴンガンダム!!」

「どっちかつつーとエピオンベースなんだよなあ!!」

寝取りの未来も含めて、理不尽が多すぎる。

仮にも、世界大会常連の俺なら余裕で国内戦は戦えると思っていたが、正面からやりあうのは分が悪すぎる。

竜巻から逃げながら、ドラゴンクローからビームを発射して当てても、

Iフィールドバリアーのごとき鉄壁ではじかれ、

ノーダメージである。なんだこれ。ふざけんなマジでよお!!

「やっつけられっか!!俺は逃げる!!!」

「待ていつ!!・・・むっ!」

「うおっ!」

正面からエネルギー反応、もといアラートを探知して即座に左に機体を傾けると、

すぐ横をピンク色の光線が横切り、ふらつく。

シュピーケルは分身を発生させ、その狙撃を紙一重で躲していた。

「——あれはっ!?!」

ピラミッド地帯の頂上に、ザクIIがスナイパーライフルをこちらに構え、また引き金を引こうとしているのが見えた。

前門のザク・スナイパーIIに、後門のシュピーゲル。

どちらも地獄だ。

——万事休すだと思われた時、最高のタイミングでそれは降ってきた。

「・・・むう!!」

「・・・。。。」

「うおおおおおお!!全速離脱!!!」

空のはるか上空。つまり宇宙から飛来してきたそれ。

大きな筒状のあまりにも巨大な人口建造物。

——つまり、コロニーが。

『コロニーが落下してきたああああ!!』

実況がそういうやいなや、あまりにも大きな上から降ってきたコロニーをぼうつと見上げていた他の参加者たちは我に返ったかと思うと、すぐさま走り出し、

離れようと散っていく。

「やべえやべえやべえ!!!戦っている場合じゃねえええ!!」

「水に潜れる奴は潜れえええ!!!」

「くっそ・・・!!連続続きでエネルギーが・・・!!」

俺も、落ちてくるコロニーから逃れるため、

上昇し続け、宇宙フィールドを目指す。

「あつ、あの野郎!!」

それと同じくして、俺と同じ考えに至った機体が足を止めて上昇を試みるが、ドラゴンクローで上から狙撃し、撃ち落としていく。

(一機でも数を減らしてっ・・・!!)

「ほう。」

「!!!??」

ぞくりと背筋が凍りついた。

死の気配と言うべきか、いや、そんな生易しいものではない警鐘が、頭の中でたたたましく響いた。

宇宙フィールドにまで離脱してきて、安全だと思った矢先のことだった。

その青い機体に向けてエピオンのヒートロッドを放ち、

撃墜を試みると、同じく、いや、正確には違うタイプのヒートロッドで相殺され、弾き返された。

「つ!!!」

その機体を見て、俺はシュピーゲルに遭遇した時以上の絶望感に体中を包まれた。

「———— 出場した甲斐があつたかな。」

彼らのよきライバルになりそうだ……」

「……うそだろお……」

ピンク色の一つ目モノアイ。

磨き込まれ、丁寧に墨やニス塗って仕上げられたブルーのメタリックボディ。

まだ、あの機体でないだけマシなのか。

いや、それでもこれはひどすぎる。この世界は理不尽すぎだ。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（予選最終編）

「・・・ぬうんっ!!」

「うおおおっ!!?」

切り結ぼうと人型形態に戻ってビームサーベルを取り出すそのわずかな隙。

青のドムがヒートサーベルを構えたままタックルをしてきて、

態勢を崩され、吹き飛ばされる。

そのまま追撃せんと袈裟切りをかましてくるドムに左腕に内蔵しているヒートロッドをぶつけ、勢いを一瞬だが止める。

ガードされたが、これで連続して切りかかれるのは防いだ。

だが、油断するのもつかの間。

左腕の、見覚えのある嫌なその装備を目にした瞬間、

俺は左に大きくブーストして、弾幕を回避する。

「あつぶねえ!!」

確かあれば、グフカスタムが左腕に着けていた5連装砲だ。

盾の下に仕込めるタイプだったが、わざわざ銃を持ち変えなくても、こうしてすぐに撃てるメリットがあるのか。

合理的かつ、無駄のない装備に舌打ちをし、

こちらも負けじとドラゴンクローからビーム砲を発射する。

だが、相手は百戦錬磨の文字通り最強クラスの相手。

容易に当てられるわけもない。

(射出角度からどこに撃つのかを予測してやがる……)

化け物か!!?)

NT的な直感なのか、経験に裏打ちされたものなのかはわからない。

だが、こちらが構えた瞬間にはすでにそこにはおらず、

ビームを発射してもすべて空振りに終わってしまう。

「どおりやああ!!」

「ういっ!!?」

接近戦を再度挑もうとMA形態に戻って突撃するが、

スレ違いざまにヒートサーベルが頭をかすり、

角がばきり、と折れる。

——で、そのまま背中を見せたまま全速飛行。

「……………む？」

「……………ふ、ふふふふふ……………!!! はははははは!!!

……………あーばよ!!!」

俺がまた襲い掛かってくると思っていたのだろう。

トーナメント形式の対一ならそうしたが、バトルロイヤルでわざわざ最強の相手とタイマンする意味もない。

折れた角と、ところどころはがれてしまった塗装も気にせず、負け犬よろしく全速力で逃げた。

——この後、他のやつらを蹴散らし続けていたシユピーゲルや、やたら狙ってくるザク・スナイパーIIと再び遭遇し

疲弊するも、最後の8人に残ることができ、俺はその場にへたり込んで、

喜びの声をあげるのだった。



「うわあ……今年もすごいやあ……。」

少年、イオリ・セイは自室にて、その光景に目を奪われていた。

彼は、自分の父親が出ていたというガンブラの世界大会に出ることに憧れを持っていた。

とある国の予選大会決勝戦。

普段の彼であれば、そこまでは見ることもなかったが、

やたらネット上で騒がれていたので、その動画を見ることしたのだった。

動画に流れるコメント。

その数は例年の数倍は噴き出しており、

特に暴れまわった4機について、噂の的だった。

『シユピーゲルの分身多すぎて草。F91よりやばいやん。』

『なんとおおおー！！！！』

『しかも、ハイパーモードにもなれる！！』

『いや、なれないでしょ。』

『スナイパーライフル持ったザクⅡの狙撃がえぐい。』

コックピットだけを狙う狙撃かよお!!』

『嘘だと言つてよバーニイ!!』

『ミンチはやめろ．．．やめろ．．．。』

『青いドム強すぎて笑う。』

『ガンダム無双かな??』

『コメの勢いやべえな。』

『止まるんじゃねえぞ．．．!!』

『団長はそろそろ止まれ』

『エピオン逃げてばっかじゃん。戦えよ。』

『逃げる速度がまるでGみたいな．．．』

『おい、やめろ。』

「．．．僕も、いつか．．．。」

『．．．セイラー？そろそろご飯よ。降りてらっしやい。』

「あ、うん!!!わかった!!!待っててね!!!」

下の階からよく聞く声が聴こえた。

ちらり、と机の上に飾ってある、僕が仕上げた自信作を見て、明日のバトルでの活躍を思い浮かべ

——それと同時に、少し気分が沈んだ。

(・・・明日は、勝てるかなあ・・・。)

負けてばかりの少年が、とある少年と出会って世界大会に出ることになるのは、もう少し先の話。



「・・・・・・・・・・・・・・・・サインくださいっす!!!」

「構わんが・・・・・・・・。」

「あざっす!!!」

あの戦いの後、俺はすぐさまラルさんにコンタクトし、サインをねだった。

実際に戦ってみてわかったが、マジでこの人は強い。

まともにやりあっても勝てるわからないわ。

サイン色紙を渡してサインをねだると、

快くOKし、書いてくれる。

「へっへっへ……!!嬉しいです!!」

「そうか。……ところで君は、中々腕の立つファイターのようだね。」

「……私は棄権したから出ないが、世界大会、頑張ってくれ。」

「はいっ!!」

実は、ラルさんは最初から世界大会本戦には出ず、予選だけとりあえず戦う気だったらしい。

現に、最後の10人くらいになると、あっさりと棄権をして、離脱してしまった。

たまには、一ファイターとして身を投じるのが楽しいんだとか。

でも、野良でエンカウントは勘弁してください。

「あのエピオンは素晴らしいな。何よりも早い。MA形態に攻撃を当てるのはなかなか骨が折れたよ。」

「はははは……。」

貴方はそれに易々とヒートサーベルを合わせてきたんですがね……。

自信喪失しそうになるが、まあ、凄腕のシユピーケルやスナイパーとも互角に渡り合えてたし、俺は弱くない……はず。たぶん。

……もう、ラルさんクラスの人って出てこないよな？

原作の主人公とはそもそも戦うかわからないし、

アイラやニルスあたりのチート勢も接点はないだろうな。

そんな風に考え込んでいると、

ラルさんに声をまた掛けられる。

「ところで、気になってたんだが……。」

「？」

ラルさんが俺の後ろ、いや、すぐ後ろを右人差し指で指し示しながら
言ってきた。

「——ずつと君の後ろにいるそちらのお嬢さんは知りあいかな？」

「……え……？」

振り返らずに、そーつと前に一歩進むと、後ろから、

誰かの足音が一歩分聴こえた。

もう一度今度は二歩、横にステップしてみると、

同じ分だけ、すぐ真後ろから足音がした。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する（つかの間の休息編）

『——同志よ!!元気か!!』

かかってきた電話を取るや否や、

ドイツ代表のチョマーが電話口でそう叫び、

耳がキンキンと鳴る。

やはりというか、因果は収束してしまうというか、

原作通り、チョマーは彼女に振られてしまい

リカルドに寝取られてしまったっぼい。

それも今大会より前のことであるのだが、

それを思い出せば、こうして俺に連絡をして、

どうやってリカルドを倒そうか画策している。

「リカルド許さねえ……。」

『ああ!!許さん!!・・・ほかにも、俺たちと同じく、寝取られてしまった同志を集めてきたぞ!!』

俺が思わずそうこぼすと、チョマーが嬉しそうな声を弾ませ、

徒党を組もうと言ってきた。

なるほど。ここからあの原作につながるんだな、と納得し、

了承することにした。

原作ではなんだかんだ言っても、こいつらは世界大会に何度も出ている常連らしいし、下手をすれば俺より強いやつだっているだろう。

不意打ちで徒党のうち、半数以上が撃墜されてしまったとはいえ、

あれもまともに戦えていれば、リカルドや、セイ君たちを相手にしても容易に負けることはないはずだ。

確か、ガンダム・ヴァサゴ、ガンダム・アシユタロン、ビギナ・ギナ、ゲンガオゾ、バンデイツトを使うファイターたち。

そして、特定の機体はないが、多種多様なガンプラを操るチョマー。

敵にするとこの上なく恐ろしいが、味方となるこれほど頼もしい相手もない。

「じゃあ、決勝トーナメントに進むまでは協力してリカルドを狙う、でいいよな?」

『ああ!!もちろんだ!!同志よ!!』

チヨマーは原作では器の小さい男のような描写がされていたが、こうして話してみると、意外といいやつなんだな。

男友達からは好かれているだろうな、と感じるやつだった。

でも、同性にとつていいやつほどモテにくいよな・・・と、ちよい悪でモテているリカルドの顔を思い浮かべ、世の中理不尽だ、と吐き捨てる。

あ、そういうえば釘刺しとくか。

原作だと確かガウ攻撃空母なんてデカ物でバトルロワイヤル出て、

サテライトキャノンでやられてたし。

ちゆうーか、混戦する形式で、しかも仲間と組むっていうのにあんなでかいのチヨイスすんなよ、と思うわ。

いや、ガウの中に入れてもらって、

守ってもらっていたような気はするけど。

ウイングガンダムのバスターライフル効かないガウとか割と変態だと思うの。

で、チヨマーには普通にMSで出たほうがいいぞ。

いつも通り予選がバトルロワイヤル形式だったら的にされかねない、とそれっぽい理屈をつけて原作とは違う流れにしようと試み、電話を切った。

一つの問題があった。

ちらりと机の上に置かれて居る我が愛機、“ドラグ・エピオン”を見て、ため息をつく。

”青い巨星”との死闘。

そして、そのあとに続いたシュピーゲル、ザク・スナイパーIIとの連戦。

それらの戦いに耐えきったはいいものの、明らかにボロボロに傷ついてしまっていた。

ああああ・・・、と頭を抱えてうずくまる。

そういえば、俺はいつも彼女にガンプラを治してもらっていたんだ・・・と気づくのも後の祭り。

ファイターとしては一流でも、ビルダーとしては並である俺にとって、死活問題であった。

サブのガンプラはいくつか持っているが、

一番使い慣れている、かつ強い機体は言うまでもなくドラグ・エピオンである。

日本で行われる世界大会に向けて最終調整を皆が行っている中、

自分独りだけ足踏みしているようなもどかしさに、頭を悩ませる。

(・・・あー。こんな時に俺にもビルドが上手い相棒がいればなー。

レイジくんにはセイくんがいていいな・・・)。・・・ん?)

・・・あれ、そういえばここって日本だし、確かセイ君の家ってガンプラ売ってる
お店だから探せば場所はわかるよな??

日本側は最終戦どころか、地区予選をやっている途中だし・・・。

——それに気が付いた俺は、傷ついた“ドラグ・エピオン”をバッグにしまって
ホテルから飛び出すのだった。



「——しめて、3400円になります。」

「はい。」

ガンプラバトルの世界大会が後数か月に迫ると同時に、
うちの店の売上げが比例して伸びた。

その分、やっぱり買いに来るお客さんもどこか楽しそうで、僕も嬉しくなってくる。

一時的な熱狂だったとしても、

楽しそうにガンブラを買って、組み立てる人たちの顔を見ると、やっぱりいいな、と思うしね。

お昼時のピークを過ぎて、客足も落ち着いてきたとき、

ガラガラ、と入り口の引き戸を開けて、また一人お客さんが入ってきた。

母さんがいらっしやいませー、と応対の声をかける。

「・・・・・・・・・・。」

その人の顔を見て、僕は一瞬声を失った。

金髪の長身のお兄さん。瞳は碧く輝いており、

茶色のジャケツトを着こなす外国人らしき人。

（確かこの人は・・・・・・・・。）

何も知らない母さんが、

笑顔でそのお客さんに近づきながら尋ねる。

「何かお探ですかー？」

「……あ、スミマセン。実は、こちらに腕のいいビルダーがいらつしやると聞いてきたのですが……。」

そう言つて、彼が取り出したのは一目で見えてわかるほどにボロボロに酷使された、あの機体。

黄色と緑で塗色されており、ドラゴンガンダムに見えるけれども、

実は違う機体の、エピオン。

そして、そのお兄さんは頭を90度に下げて、叫んだ。

「———お願いします!!!お金なら払います!!!!!!どうか!!!!!!どうか俺の相棒を治してやっても
らえませんか!!!!」

———これが、のちに敵として立ちはだかる”彼”との出会いだった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガン普拉バトル出場する～（つかの間の休息編 その2）

「ふあーあ・・・。」

セイの家に居候することになって何日か経ち。

とりあえず寝床を確保した俺は、セイの勧めで一緒にガン普拉バトルをやっていくことになった。

昨日もラルのおっさんや、その取り巻きとバトルまくって、戦って疲れたぜ。

ゆつくりと部屋の中でまどろんでいると、

ドアがばたん、と急に開けられ、びくついちゃった。

「うおっ!? な、なんだよセイ!!?」

「レイジ!! ちよつと来て!!!」

「はあ!?! なんだよ急に・・・って痛い板痛い痛い!!」

引っ張るなよ!!!」

な、なんだ？



「——つてわけなんだつてき。」

「へえ……。あんたもラルのおっさんみたいに強いのか？」

「世界大会の常連者だから、リカルドさんと同レベルだよ!!」

「……面白れえ。」

セイ君に俺のドラグ・エピオンを治してもらおうように頼んだところ、

目を輝かせてどこかに走り去ったと思ったら、

レイジ君を連行して戻ってきた。

ええ……。

ちよつとレイジ君の目が怖いんですけど……。

あれは獲物を前にした肉食獣の目つきや……。

原作主人公のペアに会えて内心テンション上がっていたところにこれである。

「俺と戦えよ、おっさん。」

「おっ……。いや、そうしてもいいんだけど、

俺の相棒は今こんな状態で・・・。」

「あ、これくらいなら30分で治せますよ。」

「ふあ!？」

マジか!!?いくら何でも早すぎんだろ!!!

インチキ効果もいい加減にしろ!!（意味不明）

・・・まあ、あんなにうずうずしている二人を前に、断るのもあれだよなー。

ちゅーか、治してもらうんだつたらそのお礼として戦うべきだろうし・・・。

・・・よし、俺とドラグ・エピオンの力、見せてやる!!

で、30分後。

有限実行してなしとげたセイ君から、

修理されたドラグ・エピオンを受け取り、

ガンプラフィールドにセットする。

ルールは簡単であり、一対一の決闘。

制限時間は他のお客さんも使うかもしれないので15分として設定し、

リン子さんに許可をもらって戦うことになった。

・・・そういえば、このお店ってガンプラフィールドあつたっけ??

まあいいや。

「へっへっへ……。こいつを倒せば、リカルドの野郎だって……。」

「レイジ。いつも通り僕がサポートするから、様子見とかせずに一気に突っ込んで。」

「おうっ!!」

「……ドラグ・エピオン、行くぞ!!」

お互いにセットしたガンプラが射出され、フィールドに繰り出される。

フィールドは、どうやらテキサスコロニー内部らしい。

ガンダムで、ギャンとアムロが一騎打ちした場所である。

濁いた風を浴びながら正面の大きな岩山に向けて飛行していると、

正面に熱源反応を探知した。

反応を確認したとたん、熱源が見えた方角から、

緑色の粒子が直線状にこちらへ放たれる。

ビームだ。

「当たるかよお!!」

右に機体を傾け、最低限度の動きで回避する。

相手の機体を確認すると、ガンダムと同じトリコロルであしらわれ、

左腕に四角を接ぎ合わせたシールドを持つストライク系のガンダムだった。

——確かあれは

（・・・スター・ビルドストライク!!）

世界大会に出場し始めてから使い始めた彼らの機体だ。

当然、それまで使っていたビルドストライクよりも機体性能は高く、

全ての武装が脅威である。

中でも厄介なのが・・・。

（・・・つち。ビーム系はうかつに撃てねえな!!）

あの盾を前面に構えながらこちらに向かつて進んでくる。

エピオン系統なのは向こうも知っているはずだが、

ビーム砲を内部に仕込んでいるのがバレているらしい。

左腕の盾で吸収する気満々である。

そして、その態勢のまま向こうはビームライフルを撃ち続けてくるので、

ビーム砲が使えないこちらとしては近づくまで、まともな攻撃ができない状況である。

だが

「速ええっ?!」

—— たかだが一機体からのビーム連射くらい避けられぬわけもない。

M A形態を維持したまま回避に専念し、ビームライフルの雨を潜り抜けて、
躲し続ける。

「レイジ!!エピオンは近接戦闘が得意な機体だ!!近づいてきたら注意して!!」

「わかつ」

「——遅いっ!!」

「おお!?!」

セイ君がレイジ君にアドバイスをしているが、

そんなよそ見などさせはしない。

左腕と右腕に着けてあるクローでM A形態のまま突撃し

スタービルドストライクを弾き飛ばす。

だが、さすがというべきか、直撃はせずに盾でいなすように防御され、
背中を見せたドラグ・エピオンに向けてビームライフルが連射される。

こちらもM S形態に戻りなら姿勢制御で滞空し、

頭部バルカンから実弾でシールドの装甲を削りつつ、

回避しようとするが、バルカン掃射のタイミングで相打ち気味にビームを撃たれ、

左腕のヒートロッドに直撃して大破してしまう。

「ぐっ!!」

「つ、強い・・・!!」

（それはこちらのセリフだって!!なんなのこの子たち!!?）

こちらはこれでも10年以上ガンプラをやっているベテランである。

対して、向こうは二人で組んでいるとはいえ、そんな俺と同等以上に戦っているまだ子供の少年だ。

しかもレイジ君に至ってはまだ数か月しかバトル履歴がないはず。

つくづく、化け物である。

経験を積めば、あのラルさん以上に強くなるんじゃないだろうか。
だが、こちらにだって負けられない意地がある。

——俺のドラグ・エピオンは、最高の相棒だ!!!

「——おおおっ!!!」

「あああっ!!!」

「いつけええええええ!!!」

ビームサーベルをお互いに抜刀して斬りかかり、

剣戟が交差した。

——ザギユ、という鈍い音が聴こえると同時に『Battle End』という表示が、フィールド上に浮かび上がった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（つかの間の休息編 その3）

「くくくく!!だあああつ!!あともうちよいだつたのに!!」

「あ、危なかつたあ……。いや、でもあのままなら勝てたのかな……。？」

「十回。ビームサーベルで何度も切り結び、お互いの機体の四肢に傷が刻みつけられること数回。」

標準的なビームサーベルだけをスター・ビルドストライクが持っているのに対して、こちらは豊富な近接戦闘用の装備を備えている。

だが、お互いの左腕がもげ、決着の時と思われた瞬間きわどいところでフィールド上に『Battle End』の表示が出た時には内心、神様へ祈りが通じたんだな……と腰を落とすところだった。

たぶん、ビーム吸収用シールドが使えない状態のスター・ビルドストライク相手であ

れば、またMA形態に変形して、ところん遠距離からドラゴンクローからのビーム砲を浴びせて、時々突撃するのを繰り返せばいいけた可能性は高い。

しかし、スター・ビルドストライクにはレイジ君の格闘センスを活かした“アレ”がある。

変形する一瞬のスキを突いて、逆に蹴りで沈められていたかもしれない。

(いや……でも……うーん……)

色々考えられるが、結局時間切れで引き分けが今回の結果である。

ああだこうだ、二人で話しているレイジ君とセイ君の近くに行き、手を差し出す。

「ありがとう。……楽しかった。」

「……へへ。次は負けないからな!!」

「……ありがとうございました!」

ガン普拉バトルはこれだから辞められない。

……こんな楽しいものを、辞められるわけがない。

はっはっは、と笑いあい、そしてぴたりと体の動きを止めて、

また90度にお辞儀して頼む。

「……………俺のドラグ・エピオン傷ついちゃったので、また治すの手伝ってください……………」

さすがに二度目を頼むのは気が引けたので、

セイ君に色々教えてもらいつつ、自分でもうにか治すのだった。



「で、ご飯とか頂いちやって……………リン子さん、いい人ですね。」

『そうか。私も前、あそこにお邪魔したことがあるがね、いい奥方だよ。うむ。』

ホテルに戻って携帯で、今日あったことをラルさんに話していた。

お店の場所を教えてもらったので、そのお礼と、後次会った時に渡すお土産についてだ。

「大尉が好きそうなホバー系のMSをいくつか買ったんで、次会った時に渡しますね。」
『おお!!そうかそうか!!いやあ、すまん!!嬉しいよ!!……………じゃあ、私はそろそろ出

かけるのでこれで失礼するよ。・・・大会、頑張りたまえよ。』
「はっ。」

ぷつり、と電話が切れたので受話器に電話を置いて戻す。

ぼふん、とベッドに身を投げうつて、はふううう、と息を吐きだす。

今日はいろいろとあつたが、ドラグ・エピオンも治つたし、

パーツも色々買えたし、充実した一日となつた。

で、レイジ君、セイ君と連絡先を交換し合い、

彼らのスター・ビルドストライクと、俺のドラグ・エピオンについて、

改造案を出し合つた結果、なんとなくだが方向性が見えてきた。

それは、エピオンの射撃についてである。

ガンダムエピオンは言うまでもなく近接特化の機体であるが、

それだけでは世界大会を勝ち抜くのは厳しいため、ドラゴンクローを取り付け、

そこからビームを発射できるようにしてある。

しかし、逆に言うと、それぐらいしか射撃武器はなく、

あまり重い武装を積もうとすれば、動きが遅くなる可能性が高いのだ。

これ以上近接系武装を充実させる必要性も見当たらず、

射撃系でもう2つくらいは隠し玉が欲しいと考えているところである。

（……あるにはあるんだけどな……）

考えているのは、射撃系で一番厄介な兵装。

扱うのは難しいが、使いこなせれば最強の武器となる、”ファンネル”だ。

だが、そのファンネルを扱うにあたって二つの壁にぶち当たっていた。

一つ。ファンネルとドラグ・エピオンの速度差に差があること。

ファンネル自体もそんなに遅くはないが、速度に特化したエピオンよりはさすがに遅く、展開時はいいが、動きながらファンネルを回収する際、速度差でファンネルがエピオンのところまで追いつけない可能性が高いのだ。

つまり、使い捨てのようになってしまう。

もう少し軽量化できればいいけそうな気がするのだが……。

二つ。俺自身がファンネルをあまり使ったことがないため、今すぐ使いこなせないと。

キュベレイ・パピオンを扱うアイラであれば、自分の手足を動かすようにどんな風にもファンネルを操ることはできるだろう。

だが、俺はどちらかというと近接戦闘のほうが得意であり

オールレンジタイプのインコムや、ファンネルを扱った経験がなさすぎる。

似たようなドラグーンもあつかつてみたが、やはり使い勝手はファンネルと同じで、高い空間把握能力が求められていた。

習熟に時間がかかることを考えると、世界大会までに間に合う可能性は低いだろう。ファンネルを直接相手にぶつけるくらいならできるのだが、それではファンネルを使う意味もない。

(・・・と、なると、こっちの改良をすべきだよな。)

ドラグ・エピオンは俺にとって最高の相棒だ。

一撃離脱の戦法を取れるよう、速度に特化し、

MA形態とMS形態を頻繁にスイッチすることで、

相手の攻撃を躲し続ける戦闘スタイルだ。

だが、あまりにも早いスピードを得るため、

エネルギーも馬鹿喰いするのである。

同じ例としては、推進剤を大量に消費して動く、

ギャプランがわかりやすいだろう。

だが、もしそれを解消しつつ、機動性を確保することができたのであれば、

相棒は次のステージに行くことができるはずだ。

セイ君から提示してもらった、ドラグ・エピオンの改良案をもとに、俺は相棒を、今以上の最高のガンプラにしてみせる。

（……………うし!!やってみつか!!!）

———結局。ドラグ・エピオンの改良が完成したのは、世界大会当日の朝であった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガン普拉バトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編）

『———ただいまより、本大会が開始いたします。出場者の方は、所定の位置へ……』

ぞろぞろと人の波がドーム会場に吸い込まれるように押し寄せていく。

その中に、イオリ・セイの同級生であるコウサカ・チナと、青い巨星の名で知られるラルが知り合いの戦いを見にやってきていた。

「うわあ。すごい人の数ですね……こんなたくさん観客の前で、二人は戦うんだ……」

「まあ、世界大会だからね。文字通り、世界中のガン普拉ファイターたちが集まってきたいるんだ。それを考えればまだ少ない方だよ。」

「はあ……」

人の多さに圧倒されるチナに対して、ラルは世界大会に何度も出ている経験からか、落ち着いた様子で答えていく。

二人が人込みをかき分けていくと、探していた人物と巡り合う。

「……委員長!!」

「……おつ。ラルのおっさんも。」

「あつ。二人とも!!よかった!!あえたあゝ」

「……その顔を見るに、気力は十分そうだな。」

「へっへっへ。当たり前前だろ!!……今日のために、リカルドと特訓しまくってたんだからよ!!」

セイはチナのもとへ、レイジは激励の言葉を送るとしたが、

その必要はないと口をつぐんだラルと軽口をたたき合う。

4人が歓談をしながら歩くこと数分。

ドーム内ではエキシビジョンマッチらしき戦いが行われており、

ストライク・フリーダムと、デステイニーガンダムがすべての兵装を互いにつかいきり、最後は肉弾戦で戦うという激闘を繰り広げていた。

「うわっ……すごっ……あのストライク・フリーダム……素組みに見せかけて、スラストーとかいじってるし、ドラグーンに混ぜてフアングも隠し持っている。あっち

のデステイニーは……ゼロ・システム搭載してるの!!??
「腕が鳴るな。おい。」

ファイターたちは皆、自分の愛機を手に、闘いの場へ赴く。

——かくして、世界大会はついに始まるうとしていた。

(……ああああああ!!!
ねっ、寝坊したああああああああああ!!!
!!!)

——約一名を除いて。

時は遡る。

◆ 「ふあくあ……。」

セイ君、レイジ君と出会ってドラグ・エピオンをいじること2週間。

改良してはテストをし、また改良してはテストの繰り返しが続く、

さすがにちよつと疲れてきた。

こらえきれず出てしまうあくびを右手で抑えつつ、

ドラグ・エピオンの頭を柔らかい布で拭いてやり、
ぴかぴかに磨き上げる。

明日の戦いでまたボロボロになるだろうが、

せめて戦場に行くまでの姿は、まともな状態にしてやりたい。

そう思つてのことだった。

取り外した兵装を収納BOXの中にしまい、

代わりに取り付けた兵装の具合を確かめる。

・・・よし。これなら試合中にパーツが落ちてしまうこともないだろう。

しかし・・・まじで疲れたなあ・・・。

（携帯は元カノからのメールが怖いし・・・。テレビでも見るかな。）

そういうえばホテルで改造しては、街にある模型屋のガンプライターでテストする、の繰り返しだったため、ニュースとかを見れていなかった。

明日の世界大会について、なにか特集でもやってないかなー、とチャンネルを次々に回していると、見慣れた原作のキャラが出てきた。

（・・・お。きさらちゃんじゃん。）

ピンク色のツインテールのガンプラアイドル。

確か、ガーベラ・テトラの使い手だったか。

そこそこ強かったはず。

：：：んー。あれ。そういえばこの人、リカルドの恋人にそのうちなるんだったか……？

そんな気もするが、まあ今さらどうでもいいやと頭の中で切り捨て、ぼーっと彼女のコメントを見ることにした。

『———そういえば、先日飛び入りで参加したとある少女が、世界大会出場の枠を勝ち取ったようです。』

『へえ。すごいですね。……うわ、この子、外国の子ですね。』

日本人じゃないのに、わざわざなんで日本の地区予選に出てるんでしょう？』

『あら、ホント。』

……??誰のことだろう。

アイラ……じゃないよな？

確か、彼女は海外の予選で、前世界大会王者のカルロス・カイザーを倒して、大番狂わせを演じていたのだから。

『使用している機体は、MS……いや……MA……なんですかね……？』

『えーと。．．．あ、これ、すごい大きいですけど、MSですね。MS。』

『こんなおつきなMSがいるんですねー。』

．．．サイコガンダムのことかな？

あれはMSだけど、MAに変形することもできるし。

敵として出てきたら厄介だなあ．．．

バトル・ロワイヤルで鉢あわないことを祈りつつ、

リモコンの電源スイッチを押して、テレビを消した。

さて、そろそろ寝るか．．．。

あ、そうだ。

改造したドラグ・エピオンを手に取り、

顔をじつと見つめて考える。

（．．．名前、どうすつかなー．．．）

せつかく大きく改造したのだから、

名前もかっこよく付け直してやりたい。

ドラグ・エピオンでもイカすとは思うが、

更にもう一声欲しいところだ。

(うーん……。ドラグ・エピオン・トリテッド……。なんか違うな。

ドラグ・エピオン・ツヴァイ……。悪くないけどドムっぽい……。ドラグ・エピオン・トリオン……。くどい感じがする……。)

他のファイターたちの機体って、よく考えられた名前だったんだなー、と名前を振り返るとつくづく思う。

”3”に關係する名前を今のこいつにはつけてやりたい。

(トライオン。トリスアギオン。トーレ。トリプル……。)

……。はっ?!、今何時だ!!?)

黙々と、かっこいい名前を考え続けていたところ、

まだ寝ていないことに気が付き、慌てて時計を見る。

すでに時計の針は朝の3時を回っていた。

明日の大会は10時からであり、ホテルを9時には出る必要がある。

さっさと寝ないと寝坊してしまうかもしれない。

というか今の時点でもう、ちよつと起きられる自信がない。

布団を頭まで目をつむると、すぐに睡魔が襲ってきて、

意識がゆっくりと薄れていく。

（・・・エピオン。明日は絶対に勝ち残ろうな・・・。）

——そして、それから数時間後。

俺が起きた時には時計の針が9時を指し示しており、

ホテルの一室で人目もはばからず、絶叫の声をあげるのだった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編その2）

「スタービルド・ストライク、出るぜ!!」

「行くよ!!レイジ!!」

「おう!!」

カタパルトからフィールドに射出される僕とレイジのガンプラ。

世界大会の第一戦目は無差別のバトルロワイヤルだった。

宇宙フィールドで翼を展開し、他の機体が密集している地帯から離れるために、全速力で駆け抜ける。

僕が知る限りでは、ほぼすべてのガンダムシリーズからMSが参加している。

しかもそれぞれがすべて改造を施されており、丁寧に作りこまれていた。

右隣を見ると、ひととき大きなMS、デンドロビウムがアルヴアトーレがメガ粒子砲を打ち合い、その余波で辺りの小惑星帯が吹き飛ばされ、破片がMSに突き刺さってい

く。

後ろからは、スーパーカスタムザクF2000がミサイルを一斉掃射してきたので、ビームをミサイルに当てて誘爆させた。

「うお!?どこだっ!?!」

混乱しているうちにミサイルの爆発によって生じた煙に紛れ、

上からビームライフルで撃ち落とす。

「よっし!!」

「これならどう!?!」

一機墜としたと思っただのもつかの間。

ゲーマルクが拡散メガ粒子砲を前面に向かって放ち、

僕たちと、ゲーマルクの射線上の合間にいた機体をすべて消し飛ばしていく。

「——いまだ!!」

「おう!!」

左腕に装備してあるアブソープ・シールドでビームを吸収した。

よし!!出力の高いメガ粒子砲を吸収できたからか、エネルギーをたっぷり蓄えられた

!!

それを見たゲーマルクはついで、30個はあるであろうファンネルをすべて展開し、

スタービルドストライクに追従させてきた。

「——エネルギーは十分!!」

「よし!!行くぜえ!!!」

それから数分後。

僕たち以外のすべてのMSが全滅し、勝者となった。

——僕たちの世界戦デビューは、最高の形で幕を下ろすことができたのだった。



「はあっ・・・はあっ・・・ああ・・・足が痛い・・・。」

ぜえ、ぜえ、と若干運動不足の体に鞭を打ち、

どうにか会場までやってくる事ができた。

すでに時間は10時を過ぎているが、

まだ間に合う。

そのまま受付に行こうとして、足が止まった。

(・・・そういえば、このまま出たら、元カノに顔バレするんじゃないかね・・・?)

国内の予選でさえバレたのだから、世界大会に素顔で出たら一発でアウトだろう。というか、もっと早く気付くべきだろ、俺。

グラサンでもつけるべきか・・・？ラルさんだったら持つているだろうし、借りれないだろうか。

どうしようか悩んでいると、後ろから声をかけられる。

「——どうした、宿敵よ」

「・・・。。。」

「・・・え？」

振り向くと、白と黒の怪しいマスクをかぶった大柄な男と、全身を白のフードで覆った小柄な人物が立っていた。

あれ？こいつらは確か・・・。

「——あああ!!お、お前ら!!!国内予選の時のシュピーゲルと、ザク・スナイパーIIを操作していたファイター!!?」

「うむ。久しぶり・・・というわけでもないがな。」

「・・・。」

はっはっは、と笑うマスクマンと、ぐ、と右手でサムズアップをしてくる小柄な人物。そういうえばこいつらも国内予選を突破しているんだった。

「お前らに散々追い掛け回されたの、忘れてないからな!!」
「強者を見ると挑みたくなる性分だな。許せ。」

「・・・強いやつ・・・先に倒すの・・・定石・・・。」

予選では、分身をさらに増やして迫ってくるシユピーゲルと、アホみたいな精度で、MA形態で飛行しているエピオンに当ててきたスナイパーIIは頭がおかしいと言っても過言じゃない

「・・・とここで、何か困っていたことがあるんじゃないのか?」

「あ、ああ。・・・実は・・・。」

元カノのことを若干ぼかしつつ、

身を隠さないといけない事情を伝えると、マスク越しに眉をひそめながら言われる。

「むう・・・。私みたいにプライベートバレしないようにしたいのなら、もつと早く隠すべきだと思うが・・・。」

「その点については返す言葉もない」

とにかく泊まるホテルも、来店する模型店も、毎日ランダムに変えて元カノのストーリーキングから逃れるのに必死だったからな……。

その上、世界大会に備えてエピオンの改造に集中していたからすっかり抜け落ちていた。

「まあいい。それでは、これを使うといい。」

「……。」

そう言っつて、マスクマンはごそごそとポケットから白の医療用マスクを手渡してきて、フードの人物は、フードを脱いで、こちらに手渡してきた。

っつて

「お前女だったんかい!!?」

「……女性に向かって……それは失礼……。」

「あ、スンマセン……。」

フードを取ったら、原宿にいそうな金髪のギャルだった。

普通に超美少女で思わず声をあげる。

「あ、ちなみにこいつは私の従妹だ。」

「・・・うん。」

「うそお!!」

目の前のむさいガタイのマスクマンと、身長が150cmぐらいしかない、

小柄な金髪ギャルに同じ血が流れているだと・・・?!

今世紀で一番の謎に巡り合ってしまったかもしれん。

「ところで、急がなくていいのか? 私とこいつはすでに予選を勝ち抜いてきたが、

お前はまだなのだろう?」

「・・・急いでいってらー。」

「あ、そうだった!!・・・マスクとフードあんがと!!これで身を隠すわ!!」

お礼を言って、手を振って返す。

あ、そういえば今日の予選勝ち抜いた後のバトルロワイヤル、

チヨマー達と組むんだった。

元カノからのメールが怖くてあまり見ていなかったが、

ケータイにチヨマーの連絡先が入っているため、見ざるを得なかった。

メール受信数：19902

「

．．．は
は!!?
???

あ、悪化してないか．．．？

本文は、それまでと同じか、それ以上に熱烈なメッセージであり、
要約すると、”わかった。じゃあ、早く肉体関係もと？なんでもしていいから、早く私のもとに帰ってきて？”

”胸がいい？口？手？それともお尻？”

”先月18歳になったから、拳式も．．．”

といった過激な内容である。

おかしい。トラウマでもないのに手の震えが収まらない。
ぶるぶると震える手で携帯を取り出し、
チヨマーの電話番号にかける。

「あ、チヨマーか。俺だ．．．いま、だいじよ」

「おかえり。待ってたよ。」

「……え？」

——電話口から聴こえて来たのは、チヨマーの声ではなく、いつも聞いていた、俺の良く知るかわいらしい声であった。

……え
????

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（世界大会バトルロワイヤル編その3）

『——続いて、第××ブロックの一次予選を開始——』

スタービルド・ストライクガンダムの初出撃も上手く行き、どうにか一次予選を突破することができた。

あのゲームマルクを使ってたお姉さん、やたら強かったけど、どうにか勝って良かったあ……。

リカルドさんに聞いたら、デンマーク代表の世界大会出場常連組らしい。どうりで手ごわかったわけだよ……。

「よ。セイ、レイジ。」

「あ、フェリーニさん!!」

「へっへっへ。見てたか？俺たちの活躍？」

「ああ、やるじゃねーか。……ビーム吸収型のシールドとは驚いたぜ。」

俺のウイングのバスターライフルも易々とは撃てねえな。」

レイジと一緒に控室に戻ると、

フェリーニさんが右手をあげて、笑顔で声をかけてきた。

どうやら先ほどの戦いを見ていてくれていたらしい。

知り合いに自分たちの戦いぶりを見られるのは、やはりちよつと恥ずかしい気もする

けど、勝ててうれしかった。

「マオのやつもとつくに一次予選は突破しているぜ。」

「よかった……。これでみんな一次予選突破ですね！」

「……………いや。」

僕の言葉に首を振って否定するレイジ。

どうしたんだろう？

「……………あいつが見当たらねえ。」

「……………?あいつ……………?」

「……………そういえば……………」

レイジがいうあいつ、という言葉に疑問符を浮かべて、

顎に右手をやるフェリーニさん。

たぶん、フェリーニさんは知らないだろうけど、

僕とレイジにとっては同じガンプライフライダーだ。

最後に会ったのは確か数週間前で

あの人の腕なら突破できるとは思っただけでも……。

「誰か他に知り合いが出てんのか？」

「はい。……確か、世界大会に何度も出ているすごい強い人なんですよ。

……ラルさんとも戦って、生き延びたって聞いてます。」

「へえ……。あの青い巨星と戦って生き延びたのか……。」

「そりゃつええな。……常連組だったら俺も何人か知っているが……。」

「そいつがまだいねえ。……一次予選もまだあるとはいえ、

後数回だ。……目立つ機体だから見れば一発で分かるんだけどな。」

「……まあ、本当にそれだけ強けりゃ、ちゃんと上に上がってくるだろうよ。俺たちは、

モニターで試合観戦しようぜ。」

「……。」

「……まあ、そうするっきゃねえか。」

フェリーニさんは大丈夫だろ、と言ってくれるが、

僕とレイジはなぜか嫌な予感がしていた。

彼自身の身に、何か良からぬことが今起きているんじゃないかと……。

でも、それを知るすべは今の僕たちにはないのだった。



『——第一次予選!!最終ブロック!!!泣いても笑ってもこれが最後の一次予選だああああ!!!二次予選に勝ちあがるのは誰か、目が離せないぞおおおお!!!』

実況の煽りを受けて、会場は最高潮に盛り上がり、あちらこちらで叫びの声上がり、熱狂の渦に包まれている。

会場全体が熱を帯びているからか、肌が若干熱く燃えるような錯覚さえ、観客たちは感じていた。

『——最終ブロックの登録者数は30人!!!そのいずれもが地区予選や国内予選を生き残ってきた猛者ばかりだああああ!!!誰が勝つてももおかしくない!!!勝ちあがるのは一体誰だああああ!!!』

ファイターたちは昂るを気を落ち着けるために、各々が深呼吸をして呼吸を整えたり、ストレッチをして体をほぐしたり、見守っていくれている家族や知り合いに手をあげて応えたりして闘いの準備をしていた。

ガンプファイールドに己のガンプラ、愛機をセットしていくファイターたち。

・・・しかし、30個用の席に対して、たった一つだけが埋まらずに空いていた。

『・・・ん？一つだけ席が空いているぞ？これはどういうことか？』

一次予選は言うまでもなく、4人が戦うバトルロワイヤルのため、全員がそろってから始める闘いだ。

プログラムに多少の余裕があるため少しくらいのアクシデントがあっても対応は可能だが、それも5分、10分と時間が過ぎ去るたびに、観客も何かが起きていることに気づき、運営側もしきりに選手に連絡を試みるがつながらなかった。

「・・・どうやら、何かアクシデントがあったみたいだな。」

「アクシデント？」

「一人足りんのだよ。・・・まさか、な」

「？」

ラルの言葉に隣で一緒に見ていたチナはそう聞き返すと、

眉間にしわを寄せながらラルは答える。

彼自身も何度も世界大会や、他の地区大会に出場してきたため、こうしたアクシデントに出くわしたことは一度や二度でもない。

しかし、それはガンブラが運悪く経年劣化で試合中に壊れてしまい戦闘続行できなくなったりといった戦闘中の物である。

選手がそもそも会場に到着しないといったことは無論少なく、

大抵は間に合うのだが時間を過ぎてもやってくる気配がないのは異常と言えた。

「はっ。兄貴。どうやら一人不戦敗みたいだぜ。」

「そりゃいいな。楽に勝てるに越したことはない。」

控室でそう笑いながら喜ぶ世界大会出場常連者のレナート兄弟。

合理的に、とことん効率的に物事を運ぶことを良しとする彼らからすれば、

1人でも多くの参加者が労をせず、脱落してくれることはこの上なくありがたいことであつた。

「……そういう物言いはやめたほうがいいと思うぞ。」

「……ああ?」

まさか反論されるとは思っていなかったのか、

レナート兄弟がその声のする方を見ると、無精ひげをあごにはやし、

長い髪を後ろにまとめた褐色肌の青年が鋭い眼光でにらみつけていた。

「……タイ代表のルワン・ダラーラか。」

「なんか文句でもあんのかよ？ いい子ちゃんが。」

「・・・少なくとも、君たちとは気が合わないということだけは言っておく。」

「ああ!？」

「・・・てめえ。」

ルワンの物言いが気に障ったのか、レナート兄弟が座っていたソファから立ち上がり、ルワンの方に詰め寄る。

彼らにとつてはとことん“戦争”を効率的にすることが信条であり、

ルワンの在り方とは水と油のごとき相性の悪さであった。

「勝つてなんぼのだろうがよ。負けて得られるものなんざねえよ。」

「・・・負けたら終わりだ。ただそれだけだ。」

「・・・勝つべきというところは同意だけしておこう。」

私も負ける気はさらさらしない。」

「・・・っへ。」

「・・・もし、俺たちとかち合っちゃったら、どうやって逃げるか今のうちに考えておくんだな。」

一触即発の空気の中、互いに決着はガンプラバトルでつけるべきだという一点に合意し、再びレナート兄弟はソファに腰を降ろし、ルワンは二人から興味を失ったように

モニターをまた再度注視する。

そのやり取りを見守っていたマオや、フェリー二達も喧嘩にならなかつたこと確認すると、あまりこうしたやり取りに慣れていないマオは安心したように肩をなでおろす。

「・・・・・・・・・・はへへ。し、心臓に悪いですわあ・・・。」

「あ？あんな軽口の言い合い、俺たちからしたら日常茶飯事だぞ？」

「ええ・・・・。僕、もうちよつと仲良く、というか、穏やかに・・・・というかあ・・・・。」

「それは無理だな。もし、俺がお前と戦うことになったらそんなん考えない。」

「ひどいですう!!」

『——規定時間を過ぎてもあと一人がまだ来ないため、その選手は不戦敗に・・・・』

待てども来ない選手には悪いが、不戦敗にしよう。

そう運営がアナウンスを告げようとしたその時、

1人の選手がその姿を現した。

ブーイングが出そうだった空気の中、ようやく表れた最後の一人に観客席からどよめきの声がある。

「・・・あ、あいつは・・・!!」

「??フェリーニさん、知ってはるんですか??」

フェリーニは思わずそうこぼす。

自分にとって、何度も戦った事のある、ある意味因縁深い相手の姿を見て。

「・・・間に合ったぜひゃっはああああ!!」

——ドイツ代表のチョマー。

左手に紫と赤でカラーリングされたゲルググを持ち、

右手をあげて、雄たけびの声をあげた

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガン普拉バトル出場する（世界大会―番外乱闘編）

『くすくすくす……あなたに来てくれないのなら、

この人が世界大会に出場できなくなっちゃうかもね？』

——元カノは、ただそういつて、白目を向けて死んだように寝ているチョマーの誰得なドアップ写真をメールで送りつけてきた。

要求はただひとつ。

指定の場所までやってこいとのことである。

アリーナから少しだけ離れた公園。

確か、今は世界大会を開催している期間だけ、

無料でガン普拉フィールドが設置されている場所だ。

10時はすでに回ってしまっているが、

さすがに無視をすることもできず向かうことにした。

筋肉痛確定な体を無理して走らせ、目的地につき、

辺りを見回すとベンチでチヨマーがすやあ・・・と寝顔を浮かべながら寝ていた。

「久しぶりね。・・・会いたかったあ・・・。」

「・・・っ。」

そして、その隣には白のワンピースを身にまとっている

長い黒髪をポニーテールで結った俺の良く知る少女がそこに立っていた。

「・・・うふふふ。私ね、ずっとずっとアナタのことを追いかけていたの。」

「・・・ねえ？私たちってやっぱり以心伝心よね？だって、すぐにあなたはここに・・・。」

「御託は良い。さっさとかかってこい。」

あまりにイラついてたからか、俺は相棒を袋から取り出し、ガンプライールドにセットする。

さっさと終わらせて、世界大会の一次予選に出て、

セイ君、レイジ君たちとまた戦うんだ。

チヨマーとも一緒に戦う約束をしている。

こんなところで足止めを食っている場合じゃない。

俺が構えるのを確認した彼女は、とある機体をセツトし、微笑みかけてきた。

「……………」

「……驚いた？驚いたかしら？……うふふふ。

知らないはずはないものね。」

ひげが特徴的な独特のシルエツト。

ダブルオーライザーなどのガンダムと同じく

ガンダムシリーズで一番強い機体を議論する際に必ず出てくる最強クラスのMS。

「……何もかも消し飛ばして、元の関係に戻りましょう？」

大丈夫。すぐに私しか見えないようになるから……。」

蝶の羽をもつ、“黒歴史”を生み出した、文明消去を成した異次元の怪物。

——ターナーガンダム。

ナノマシンですべてを分解し、原子レベルまで溶かす“月光蝶”を扱う悪夢の機体。

「……………」

「うふふふ．．．．．あなたとの戦い方は、すべて知っているわ．．．だって、そばで何度も見てきたんだから．．．．．」

エピオンと、俺の戦法を何度も近くで見してきた事実からか、

彼女は余裕そうな表情を浮かべ、愉しそうに笑う。

新しいその白くカラーリングされた3つ首の相棒の名を呼ぶ。

魂をこめた、俺の最高傑作。

「．．．．．ドラグ・エピオン・イエフイム、出るぞー！」

「．．．．．ターンエーガンダム・ウラノス。出るわ。」

お互いにカタパルトから機体が射出され、フィールドに送り込まれる。

距離はまだ互いに十分ある。

月光蝶は発動に時間が多少かかるが、発動してしまえば一定時間無敵と言える物質分解フィールドを展開できる。

そのためか、彼女はいきなりそれを起動させようとした。

「——月光蝶、き」

「——”システム”多重起動。」

「．．．．．は？」

羽化しかけの虹色の羽を伸ばそうとしていた無防備のターンエーの前に、俺のエピオンが一瞬にして距離を詰めて表れ、

呆気にとられた彼女が呆けた声をあげる。

そのスピードを保ったまま、右腕から生やしたビームソードでターンエーガンダムのボディを切り刻み、びたりとエピオンが動きを止めて停止する。

”Battle Draw”の表示がフィールドに表示されるのを確認すると、俺はチョマーが寝ているベンチまで駆け寄った。

「……………そう。そうなのね。……………ふふふ。最初から私なんて見ていなかったというのね？」

「……………チョマー。大丈夫か？起きろー。」

「……………ふざけないでっ!!」

無視をされたからか、いつもでは考えられない大声で彼女が叫びだす。

その姿を見ると、ぶるぶると握った拳を震えており、

瞳から涙を浮かべている。

「・・・俺は別に、お前が嫌いってわけじゃない。」

「・・・じゃあどうして?どうしてなの?」

頭を右手でかいていると、脳裏に浮かぶ彼女とフェリーニの仲つむまじい姿を思い出し、はあ、とため息がこぼれた。

事情はちやんとある。

だが、これをどう説明しろというのか。

この世界はやつぱり理不尽だ。

「とにかく、いろいろと事情があるんだよ。」

「・・・やつぱり!!私以外に好きな相手がいるのね!!?」

（駄目だ聞いていない・・・。）

自分のガン普拉をポーチにしまい、

俺の前まで来たかと思うと、彼女がそつと耳打ちをしてきた。

「——決勝本戦でまた会いましょう。・・・私の本当の力、魅せてあげる・・・。」

——かぶり、と首元に噛みつき、ペろりと俺の血を舌でなめ、

恍惚とした表情を浮かべつつ、ラベンダーの香りを漂わせながら去っていった。

噛み傷で痛む首元を右手でさすると、更にちくりと痛んで、これが本当に現実なのだ、嫌でも認識せざるを得なかった。

「……え??? あいつ、大会に出んの???」

「……うーん。……置いていかないでくれ○○う……。…」
彼女が最後に残っていた爆弾発言に気が付き、思わずつぶやきながら、おいていった悪夢にうなされているチヨマーを介抱するのだった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（世界大会バトルロワイヤル編_1次予選編開始）

「ウああああ!!俺のゲルググウウウウ!!!」

「Oh……」

チヨマーの泣きさけぶ声が公園にこだまする。

起きたチヨマーから事情を聴くと、元カノにサインください、バトルしてください、とウインクで誘惑され

ほいほいついていったら思っていた以上に強く、

一次予選で使おうとしていたゲルググを大破させられたの事。

悲しみに暮れるチヨマーに声をかけ、

他に手がなにか探る。

「チヨマー……ほかの機体は？」

「……駄目だ……。今日は1次予選しかでないから、ゲルググしか持ってきてない……」

ほかの機体はホテルの宿泊室に保管してあんだよお……。」
「oh……。」

思わず小声でそうつぶやく。

そういえば、チヨマーは大量のガンプラを持っていたから、全部一度に持ち歩くこともないか……。

出場する日に応じて持つてくる機体を変えて、

本戦を乗り切っているのだろう。

多様性があるのは強みだが、

事ここに至っては意味をなさない。

「ちなみに、俺はまだ少し時間があるから何とか間に合うが

チヨマーは第何ブロックの1次予選だ？」

「……最終ブロックだからちようど昼前最後だ。

……けど、ゲルググが壊れたまんまじゃあ……。」

「……よし。」

俺は無傷で済んだ相棒を見て、

ぱん、と両手で自分の頬を叩く。

—— アクシデントは戦いにつきものだ。

それに、元はといえば俺の元カノが引き起こした出来事だし、俺にだって責任はある。

「チョマー、提案がある。．．．まずは、これを使え。」

「．．．お、おい。これって．．．。」

そうやって俺は片掛けに背負っていた袋から、

予備パーツが大量に入ったBOXを取り出して渡す。

中を開いて驚きの声をあげたチョマーが、

俺の顔を再度見てきた。

「——大量の予備パーツ!!?!しかも、一通り全部そろってるじゃねーか?!!」

「それを使ってゲルググを応急処置したほうが、今から新品のガンプラを買ってきて、一から作り直すより早いだろ?」

「．．．．．。」

それでも悩む表情を見せながら、ゲルググと俺が渡したBOXのパーツ群を交互に見比べて、間に合うかどうか計算しているのか、考え込むチョマー。

「．．．間に合う、かもしれない。．．．しかし．．．。」

「安心しろ、同志。」

ほんと、左手でチョマーの肩を叩き、

俺は右手でぐつとサムズアップする。

「・・・俺が試合を引き延ばして時間を稼ぐ。

だから、お前は自分の愛機を直せ。

——俺たちは、リカルドを倒すんだろ？」

「・・・!!」

その言葉をうけとったチョマーは、

すぐにBOXと壊れたゲルググをもってベンチに移動し、

応急処置を始めた。

(・・・よし。やるか)

相手は世界大会の猛者たち。

その強者たちを相手に、倒すのではなく、逃げ続けて時間を稼ぐという難易度の高い

ミッション。

普通であれば、無理だ、と思ってしまいかもしれない。

逃げたいと叫ぶかもしれない。

——けれども。

(・・・そこなくっちゃなあ!!)

——そんなシチュエーション、燃えないわけがない。
俺が落ちるのが先か、チョマーが間に合うのが先か。
それもまた面白い。

体中から汗を流しながら、俺は会場へ走る。
自身の相棒と共に、今度こそ誰の妨害もなく
世界大会に出るために。

「……………」

第5ブロック1次予選。

3つ後の第8ブロックが最終1次予選であり、チョマーが出る予定の場所である。

俺は、汗をかいてしまったジャケットを脱ぎ、

汗を汗拭きシートで体中を拭いた後、

代わりに借りていた白のフードを被り、ガンプラファイルドに赴いた。

（……………お、いたいた。）

レイジ君、セイ君が途中の控室にいたので、

声をかけようと手をあげながら近づくと・・・

——リカルド・フェリーニがそれよりも先に彼らに近づき、何やらねぎらいの言葉をかけているのが見えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

かかげた右手を黙って下におろし、肩を落としながら彼らがいる場所とは正反対の出口に向かい、出ていく。

わかっていたことだが、そういえば彼らはリカルドとある意味師弟関係にあった。

——つまり、俺たちの敵だ。

個人的にはレイジ君、セイ君は好きなのだが、リカルドがいるところにわざわざ話を割って入る気もなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ。」

ため息がこぼれる。

元カノはすでに1次予選を突破したと言っていた。

つまり、控室にいないということは俺に今は会う気はなく、

観客席か他のどこからか俺の戦いを見ようとしているはずだ。

あんな目立つ美少女がいれば、俺が気が付かないハズがない。

そういえば、彼女は髪型を変えたのか、ポニーテールにしていたな。

何か心境の変化でもあったのだろうか。

・・・似合ってたな・・・。

「・・・・・・・・・・。」

周りを見ると、それぞれが細部まで細かくスクラッチされたデカブツや、

あまり見かけないマイナーな外伝の機体をガンプライルドにセットしている選

手たちの姿があった。

どうも一筋縄ではいかなそうである。

俺もガンプライルドに機体をセットし、

深呼吸をして目をつむり、

——目を見開いて、腹を据える。

アナウンスの声が流れたのは、そのすぐ後だった。

『——ただいまより、第5ブロックの1次予選を開始いたします。』

空が割れるかと思うほどの観客の歓声があちらこちら噴き出す。

そして、それに呼応するように、俺も相棒の名を叫び、

奮えあげる。

「——ドラグ・エピオン・イエフイム!!出るぞ!!!」

さあ、ここからが本当の戦いだ。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（世界大会バトルロワイヤル編_1次予選編_その1）

『——バトルロワイヤル!!1次予選第5ブロックの試合が開始したああ!!』

「はっはあ!!」

「・・・!?!」

ドラグ・エピオンのブーストを最初からマックスにし、

最高速を出そうとすると、いきなり真横からミンチ・ドリルで狙われ、

間一髪で回避する。

すれ違いざまに機体を確認すると、

相手の機体が分かった。

（・・・イーゲルか? 珍しいの使ってるな。・・・いや違う?）

ミンチドリルを持っているからそうだと思ったが、

なんと、まったく別の機体、メリクリウスだった。

と、なると……。

——メリクリウスが退避したと同時に、

その後ろの射線上から黄色のメガ粒子砲が俺めがけて発射された。

「!?!」

真上に上昇して回避すると、

正面に二機、そのコンビが俺の行く手を立ちはだかるように姿を現す。

(……ヴァイエイトと、メリクリウスのコンビ。

けど、ファイターは独りとして登録が……。……そうか。)

確かウイングガンダムに出てくるOZのMSには、

特殊な機体がいくつかあるのを思い出す。

「はーっはっはっは!!」

その機体を操っているであろう褐色肌の、金髪坊主の青年が、

愉快そうな声をあげて笑う。

「いやあ、1度に2機使えるのはやっぱり便利だぜ!!」

モビルドールシステム。

ガンダムXにも似たようなのはあるが、要するに複数の機体を操ることができる反則

臭い仕組みだ。

原作から言えば、ギリギリヴァイエイトとメリクリウスのコンビは出場が許されたの
だろう。

何しろ、ガンダムXとその量産機のモビルドールがガンダムビルドファイターズに出
てきたのだ。

ヴァイエイトとメリクリウスのペアぐらい、出てきたっておかしくはない。

Pデイフェンサーを展開したまま、メリクリウスがミンチドリルを俺に向かって振り
かぶり、その後ろから、まとめて吹き飛ばすつもりなのか、ヴァイエイトがまたメガ粒
子砲を発射しようと構えているのが見える。

だが、

「——おらあつ!!」

「——ぬ!?!」

ミンチドリルをMS形態に戻って急停止することで空振りにさせ、右腕から出力した
ビームソードで真つ二つに斬り

次いで、胴体に蹴りを叩き込み、ヴァイエイトのメガ粒子砲の方に弾き飛ばそうとす
るが、Pデイフェンサーでガードされ、防がれる。

メリクリウスと、ドラグ・エピオンの横をメガ粒子砲が通過すると同時に、距離を離してドラゴンクローからビーム砲を放つが、

それもPディフェンサーによってすべて防御される。

「はははは!!無駄だ無駄だ無駄だ!!そんなもの効かねーよ!!」

メガ粒子砲でもなけりやな!!」

「……もちろん、そうだよな。」

また、再度Pディフェンサーを展開しながら

メリクリウスが、その後ろからヴァイエイトがメガ粒子砲を叩き込もうとしてくる。

展開しているPディフェンサーにMA形態に変形したまま頭部バルカンを叩き込み、

前面にPディフェンサーを使用させる。

「無駄だっつってんだろぅがよお!!」

——そしてすれ違い様に更にタツクルして、弾き飛ばす。

もちろん、これもPディフェンサーによって完全に防御された。

……ただし、吹き飛ばされた方向からはヴァイエイトのメガ粒子砲が迫ってきていた。

「あ．．．し、しまっ．．．」

機体の制御が効かない状態は吹き飛ばされている時だけだが、ここは宇宙空間のため、地上よりも弾き飛ばされ、

姿勢制御をするにも時間がほんの少しだけかかる。

そのため、姿勢制御してからPデイフェンサーを展開するしかないのである。

一体一の戦いであれば、メリクリウスがPデイフェンサーで自分の身を守る程度守りつつ、相打ち覚悟でヴァイエイトがメリクリウス事メガ粒子砲を撃ち、勝つ。

それで今まで勝ってきたのだろう。

Pデイフェンサーは便利だが、使うとあまり速い動きができないという点と、

メガ粒子砲クラスの攻撃は防げないという弱点がある。

ヴァイエイトのメガ粒子砲をまともにくらい、

展開していたPデイフェンサー事メリクリウスは消滅した。

「~~~~~つち、ちきしよー！！！！」

形勢不利と見るや否や、ヴァイエイトはスラスターを全速力で吹かせ、

逃げようとしていた。

だが、あんなデカブツを背負っている機体が速いわけもなく、

後ろからドラグ・エピオンでのMA形態で追いつき、ヒート化したドラゴンクローを

背中の巨大ジェネレータにぶち当てながらひき逃げすると、爆発を起こし、消えた。

これで、後二人。

……残り時間は?!

ちらりと経過時間を見ると、時刻は11時40分を回っていた。

そこで、俺は試合前にチョマーからかかってきた電話の内容を思い出す。

『——修理は順調だ。後、30分あれば間に合う。』

『ブロックごとの平均終了時間が20分。……わかった。何とかして見せる。』

『ああ、すまねえ……。完成したら、すぐにまた連絡する!!』

経過時間はすでに10分を回っている。

予測では、後20分あればチョマーから連絡があるはずだ。

そうすれば今みたいのろのろ戦わず、逃げ回る必要もなくなるのだ。

それに、まだここは1次予選。

本戦で当たるかもしれないセイ君、レイジ君、マオ君、レナート兄弟、

ルワン、3代目メイジン、ジュリアン、ニルス、アイラ

——リカルド。そして、俺の元カノ。

闘い方を見られているために、

手の内をすべてさらけ出すことはできない。

”奥の手”は一瞬だけだが元カノに見せてしまった。

これ以上手札を消耗するわけにはいかない。

対戦者残り3名のうち、1名を屠った。

次の相手は——。

『TRANSSAM SYSTEM』

「!？」

——無機質な声が聴こえると同時に、

すぐ目の前に真っ赤な影が襲い掛かってくるが見えた。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編―1次予選編―その2）



「――あれは?!」

「機体が紅くなったと思ったら、急に動きが速くなりやがった。」

モニター上に映し出される、二つの機体。

一つは、白をベースに塗色された改造されたエピオン。

もう一つは、紅く発色しながら驚異的なスピードで、そのエピオンに猛攻を食らわせるガンダムタイプの機体。

「アルケーガンダム・・・?いや、でも、アルケーがTRANSAMするなんて・・・。」

「なんだそりゃ?」

ガンダムの知識があまりないレイジが首を傾げると、

セイが今起きている現象について説明をする。

「ダブルオーガンダムシリーズに出てくるパワーアップ能力だよ。」

——機体のエネルギーを大量消費し、一時的に超スピードで動けるようになるやつ。」

目まぐるしく、ビームサーベルで四方から分身しているのではないかと思えるほどの速さで襲い掛かる紅いガンプラ。

対して、エピオンは多少被弾しながらもどうにか直撃を免れつつ、攻撃をしのぎ続けていた。



「!!」

「あはははは!!やるじゃないの!!」

メリクリウスとヴァイエイトを倒した矢先、

消耗した俺を狙って姿を現したのか、改造を施されたアルケーガンダムが襲い掛かってきた。

しかも、TRANSAM状態である。

バスターソードで突っ込んできたのを躲した瞬間、すぐさままたブーストをかけて、剣ごと突撃してくる。

「くそっ!!」

「遅いよ!!!」

「うぐおっ!!」

偏差射撃でビーム砲を繰り出すも、

あまりの速さに残像だけしか撃ちぬくことができず、

直撃させることができない。

右腕のビームソードで切り結ぶも、

向こうの方が出力が上のようなのだ。

……駄目だ、このままじゃやられるっ!!

切り札を1枚切ることにした。

「あはははは!! さっきのやつは楽しめなかったんだよねえ!!! もっと私を……!!!」

『SYSTEM EPYON』



(……あんなファイターがいたのか……)

タイ代表ルワン・ダラーラは、モニターに映る、

真つ赤に染まるアルケーガンダムと、

それを相手に互角以上に戦っているエピオンを見てつぶやく。

いくら近接戦闘が得意な機体とはいえ、

TRANSAMを起動した機体を相手にあそこまで正面から戦えるのか。

彼のアビゴルバインでも容易いことではない。

それと同じように、ニルスはモニターに映る機体を見て、

分析をする。

（エピオンとくれば、当然積んである強化システムは、”あれ”に間違いない。

．．．．どちらが勝ちあがっても要注意だな。）

2次予選のバトルロワイヤルでは、すべての1次予選を勝ち上がったファイターが戦うことになる。

当然、今戦っているどちらかが勝ちあがるということは、そのどちらかと2次予選で鉢会う可能性があるということだ。

弱点らしきものを探るため、ニルスは再びモニターに視線を戻す。

「．．．W系はめんどくせーもん積んでんな．．．俺たちの”アレ”とどつちが強いかね？兄貴。」

「奥の手は最後まで隠す。．．．．戦術の基本だ。」

「はっはっは!!あいつら手札丸見えだもんなあ!!」

．．．俺らの敵じゃねーぜ。」

レナート兄弟は自分たちが隠し持つ”切り札”に搭載されている”奥の手”を發揮させた場合、問題なく勝てると判断し、他に弱点がないかをじっくり観察する。

「はえー．．．．．。」

マオは自分が操る機体とは別の方向に極められた機体の動きを見て、

思わず感嘆の声を漏らす。

彼の操縦するガンダム・X魔王は超火力のサテライトキャノンで相手を吹き飛ばすというわかりやすい機体だ。

速度に特化した機体とは全く方向性が違う。

そして――。

「――。」

リカルド・フェリーニは、自身の相棒、ウイング・ガンダム・フェニーチェのライバル機であるガンダム・エピオンの改造機に動きに目を奪われていた。

それまで、彼の頭の中にあっただのは、レイジ、セイ、マオ、ルワン、ニルス、レナー
ト兄弟、アイラといった実力者たちとの闘いについてである。

だが、彼はおもわず握りこぶしを右手に作り、

——笑みを浮かべる。

（——面白れえ!!）

確かな闘志が、彼の胸の内から湧き上がっていた。



「——っち。しつこいなあ!!きっさとおちてよお!!」

「……こっちも負けるわけにはいかないんだよお!!!」

TRANS—AM SYSTEMに対して、こちらが発動させたもの。

それは”ゼロシステム”。

ガンダムWに出てくる、”未来予測”を行うインターフェースである。

設定では、あまりに危険なシステムであるため、

超人的な精神力がなければ扱うことができないとされている。

しかし、これはガンプラバトルだ。

搭載して、起動させても何の問題はない。

起動中はエネルギーを著しく消耗するという弱点はあるものの、相手の動きを予測して、超合理的に機体を機動させることができる。

さすがにTRANS—AM相手ではすべての動きを予測しきることはできなかつたが、

それでも何発か被弾させることに成功し、勢いを削ぐことができた。

「——もう!!もうちょっとで墜とせそうだったのに!!!」

「——よし!!しのいだ!!!」

アルケーガンダムの赤い光が収まると同時に、

脚部からフアングが射出され、こちらに襲い掛かる。

「行きなさい!!フアング!!!」

「——そんなもの!!」

8機のフアングが俺を取り囲むように向かってくるが、

MA形態に飛行変形し、背部からドラゴクローのビーム砲を発射し、4機墜とす。

しかし、もう半分は両腕と脚に刺さってしまい、被弾してしまう。

「ハ!のお!!」

背中につけていた残り一つの竜頭。

ガンダムナタクの腕を軽量化してつけたそれをアルケーガンダムに向けて伸ばすと、バスターソードで防御しようと構える。

「無駄よ!!!」

「・・・だったら!!」

——バスターソードそのものではなく、柄の細い部分をアルケーガンダムの手ごとつかみ、握りつぶす。

「ああっ!?!・・・くっ!!」

バスターソードを落としたとほぼ同時に、左足に仕込んであるビームサーベルで飛び蹴りをしかけてきた。

こちらも、次の攻撃を繰り返す。

「・・・ファイア!!!」

俺のかけ声と同時に、アルケーガンダムは炎に包まれた。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編―2次予選前のお話）

「――おっしやああああ!!!勝ったぞおおおお!!!」

スタジアム内部から、観客の声が天井に反響し、

アリーナ中に声が伝わる。

ビームナギナタを構え、

ガッツポーズをとるゲルググと同じく、

そのパイロットも右手を上抱え上げ、

勝利の雄たけびを上げた。

『――最終ブロック、勝者、チョマー!!!』

「やったな同志よ!!」

「やったぜ!!」

「やったな!!」

「やったぞ!!!!」

「うおっしやああああ!!」

で、”リカルドに彼女寝取られた連合”の

俺たちは、そんなチョマーのもとに駆け寄り、

わーっせ、わーっせと囃し立てる。

ちなみに俺も悪乗りして、

率先して胴上げしていた。

「はっはっは!!!!これで2次予選出場決定だああ!!!!」

「やったな同志よ!!」

「やったぜ!!」

「やったな!!」

「やったぞ!!!!」

「うおっしやああああ!!」

次は、いよいよ本番である。

——憑依前の俺が、やられてしまった2次予選の超多人数バトルロワイヤル。

定められた運命は変えられるのかどうか。

俺はこの世界に試されているような気がしてならなかった。

◆ 「あー楽しかったー。」

”リカルドに彼女寝取られた連合”

略して、R・K・N・Lの同志たちと、

1次予選を突破したお祝いをしてきた。

やっぱり、男同士でがつつり行くってなったら焼肉一択だよな、

ということになり、お財布に優しい食べ放題の店で目いっぱい食べてきた。

ここ数週間は独りつきりだったので、

他の人と思いつきり気兼ねなく話せて大分はっちゃけられた。

それにしても……

(……元カノの姿は結局見えなかったな……)

諦めた……という可能性は限りなく低いだろう。

日本まで俺を追いかけてきたうえ、別地区の予選を突破して、

世界大会に飛び入り参加してくるほどの執念だ。

ビルド能力は俺よりも格上だが、ファイターとしてはそこそこだったはず。

それが、こうも短期間でここまで駆け上がりつつくるとは。

元々才能があつて、今更それが開花したのか、

俺がきつかけで目覚めてはいけない何かが目覚めてしまったのか。

今となつてはわからない。

しかし、今はそれよりも喜ばしいことがある。

ドラグ・エピオン・イエフイム。

セイ君の改造案をもとに作つてみたが、想像以上の性能であつた。

セイ君、レイジ君と数週間前に改造案を出し合つていた時に話は遡る。



「——え？もつとスピードが出ないか考えてる？」

「ああ。」

俺のドラグ・エピオンを見て、セイ君は驚いたような声をあげる。

「でも、今でも十分早いですよ？」

「・・・わかつてる。正直、めっちゃ工夫凝らしまくつて、

限界まで出せる速度になつてるしね。」

エピオン自体はＡＣ歴で最強の機体の一つと言われている。

その機体の性能を限界まで引き出し、ベストだと思えるパーツを組み合わせ、

一撃離脱のコンセプトを実現したのだ。

セイ君の言っていることはわかるが……。

「……それじゃ、駄目なんだ。」

——そう、普通のMSには追い付けないのだが、

追い付かれる可能性は十分にあつた。

”TRANSAM”、“ゼロ・システム”、“M・E・P・E”、“EXAM”、“

ハイパー・モード”、“月光蝶”

これらのどれかの強化機能を備えたMSを相手にするのは非常に厳しいのである。

つまり、“TRANSAM”とか持っていないMSへの勝率は非常に高く。

”TRANSAM”とか持っているMSへの勝率が非常に低いという何とも相性差が顕著な仕上がりとなっているのである。

この先、必ずこれらのいずれかを持ったMSと戦うことになる。

セイ君たちのスター・ビルドストライクみたいに、

RGシステムがあるわけでもないし、安定して機体性能を引き出すためにオミットされていのか、

俺のドラグ・エピオンにはなぜか”ゼロ・システム”が搭載されていない。

……いや、おそらく、元カノが搭載しようとしてくれていたが、

別れてそれがかなわぬままここまで来てしまった、という可能性もある。

今となつては、本当に可能性を推測するしかできないが。

「かなり、厳しい戦いになりますよ。」

「わかつてる。」

「本当に、毎日テストして、組み立てて、壊して、

また組み立てる・・・つてなるでしょうし。」

「覚悟の上だ。」

金ならある。

だが、時間はそれほどない。

だから、俺は再度彼らに頭を下げて頼んだ

「——強くなるために、どうか俺にガンプラの作り方を教えてほしい。」

・・・セイ君のビルド能力を、レイジ君の発想を、俺に貸してほしい・・・。

——それから俺は自分が知る操縦技術について、その日の深夜まで二人に教え、

代わりに俺も、二人から様々なことを学んだ。

そうして出来上がったのが、このドラグ・エピオン・イエフイムだ。

相棒を手に取り、柔らかい布で磨いてやると、

先ほどよりも光沢が増し、嬉しそうに光り輝いているように見える。

(・・・勝ちたい。・・・俺は、あいつに勝ちたい。)

元カノのこともあるし、

今でもリカルドと彼女が仲良くしているイメージが脳裏に浮かび、

気分が悪くなることもある。

だけれども、セイ君、レイジ君と一緒にガンプラを動かしているときに思い出したこ

ともある。

俺がどうして、ガンプラバトルをやっているのか。

勝つことばかり考えるようになって、楽しい、と思えることがなくなって

いった。

相棒が傷つくたびに、俺はいつも彼女の手を煩わせて申し訳ない、と謝ってばかり

だった。

元カノの笑顔が少なくなったのも確か・・・。

(・・・ああ、そうか。・・・そうだったなあ・・・。)

——だから、原作で元カノはいつも楽しそうに戦い続けている、

リカルドに惚れたのかな。

あいつが元凶ではあるし、やっぱり胸がいまだにもやつきもする

けれども、今はそれもどうでもよかった。

俺の願いはただ一つだけだ。

（……………この、ドラグ・エピオン・イエフイムで、

……………最高の相棒で、あいつに勝つ……………!!!）

——ガンダムエピオンが、ウイングガンダムに勝つところを見る。

それが、俺の望みだ。

フエリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編――2次予選編――開始）

世界大会2次予選の試合が行われる会場にて、

俺やチョマー達は会場受付で待ち合わせて、合流することになった。

無論、チームを組んで戦うためである。

R・K・N・L（リカルドに彼女寝取られた連合）のメンバー全員で、受付を済ませ、控室に移動する。

その途中、世界大会常連のレナート兄弟、タイ国代表のルワン・ダラーラ、急病で病欠した祖父の代わりに出場した3代目メイジンの先輩、ジュリアン・マツケンジー。

世界大会元王者のカルロス・カイザーを倒したアイラ・ユルキアイネン。

世界大会ベスト8のグレゴを下し、初出場ながら2次予選まで進んだニルス。

3代目メイジンを襲名したユウキ・タツヤといった猛者たちとすれ違う。

そして、原作主人公組であるマオ君、リカルド、レイ君、セイ君はすでにガンブラフィールドの近くまで移動しており、何やら話しているのが見えた。

「…………ふふふふ。リカルドめえ……今日こそがお前の命日だ……!!

やるぞ!!同志諸君!!」

「…………!!」

チヨマーを中心として、俺たちは円陣を組み、必ず2次予選を勝ち残るために気合を入れる。

バトルフィールドに出て、いかに早く仲間と合流できるかが鍵だ。

空いていたガンブラフィールドまで赴き自分の機体をセツトする。

他のメンバーも、それぞれ空いている場所についたようだ。

「…………ただいまより、2次予選を開始いたします…………。」

そのアナウンスが告げられると同時に、俺の相棒が身を屈ませ、膝を落として発進前の態勢を取り始める。

腹の底から声を張り上げ、自身の相棒の名を呼ぶ。

「…………ドラグ・エピオン・イエフイム!!!行くぜ!!!」

—— 未来を、変えるために。

◆ 「うおっ!!このおっ!!」

「うあああっ!!!」

2次予選。超巨大フィールド内で行われる、1000人を超えるガンブラファイターたちのよるバトルロワイヤル。

宇宙ステージと、地上ステージに別れており

始めてからすぐに何名もの脱落者が出るほどの熾烈な戦いとなっていた。

あちらこちらで機体が爆発は星となって散っていき、

また弾幕が花火のように閃光として煌めいては、

点滅していた。

宇宙ステージでは、すでにセイ、レイジ、マオと、

タイ国代表のルワン・ダラーラが接敵し、

闘いを繰り広げていた。

「—— 一度見せただけで、アブソープ・シールドの弱点を!?!」

「うああああっ!!!」

ルワンが操るアビゴルバインのビームを吸収したが、

それと同時に放っていたミサイルが直撃し、

二人は被弾して吹き飛ばされてしまう。

援護しようとしたマオも、警戒していたアビゴルバインの角から発射された衝撃波を盾で受け止め、何とかしのいでいる所であった。

そのまま追撃しようとするルワンに対して、マオはビームライフルで勢いを削ぐ。

「——深追いは、禁物か。」

そのまま流星のごとく、ブーストをふかして180度転回し、

マオの前から離脱する。

引き際を見誤らない立ち回りに、マオはなんて手ごわい、と思わずこぼす。

「——そうや!!二人は!!?」

地上に落下していつてしまったセイ、イオリを追うように、

マオも地球に向けて大気圏突入を試みる。

「。」

その後ろから見守る影が二つ。

いや、観察する機体が二つ。

「……どうするっ?」

「はっはっは。宇宙フィールドも悪くはないが地上のほうが面白そうだ。

——3代目メイジンに、イタリア代表リカルド。．．．．そして、あの男も地上で戦っているらしいしな。」

「．．．．わかった。私の新しい機体の性能．．．．試すチャンス．．．．」

「うむ。では、そのまえに雑兵どもを片付けるとしよう。つかまれ。．．．．ぜああああああ!!」

片方の機体が、もう片方の機体に後ろからおぶさると

背負っている側の機体が高速で回転し始め、

竜巻を生じさせる。

そして、おぶされている側が二丁拳銃のビームピストルを乱射することで、辺り一面にビームの弾幕が張られ、それをよけきれないガンプラが被弾していく。

「なっ、なんだあ?!」

「で、でたらめすぎるっ．．．!!うあああっ!!!」

運よく避け切った選手も、小惑星にぶつかり、大きく損傷し、機体に深刻なダメージを追ってしまう。

くるくる、と回ること数十回。

あらかた周りの敵を片付けた二人は、マオの後を追うように、地上に落下していった。

「うふふふふふ。そう、あの人はあそこにいるのね。」

二人の 대기圏突入と、会話を盗み聞きしていたファイター。

そのはるか後方から、巨大な”それ”を操る人物が飛行してきた。

「そんなデカブツでえっ!!!」

近くにいたローゼン・ズールがジオングと同じタイプの伸びる腕を駆使し、オールレンジでの攻撃を試みる。

しかし、その巨大MSに搭載されているIフィールドによって、ビーム系の砲撃はすべて無力化される。

「射撃が効かないなら、近距離で!!」

次いで、他の参加者のバルバトスが、メイスをもって襲いかかる。

いかにIフィールドだろうと、直接殴ってしまえばダメージを与えられる。その判断は何も間違っていないかった。

——ただし。

「邪魔よ。」

近づいたからと言って、必ずしも攻撃が通るわけでもない。

ずばん、という音とともにバルバトスのメイスを持っている右腕が巨大ビームサーベルによって切り裂かれる。

リーチが違いすぎるあまりに、近づく前に斬られてしまったのである。

しかし、致命傷は済んでのところでき、

形成不利と見るや否や、すぐさま反転して逃げていく。

さすがに世界大会の出場者ともなると、

戦局を見誤ることは少ない。

ローゼンズールも無駄な消耗を嫌ってか、

攻撃が効かない相手とやり取りをやめ、

バルバトスとその機体がやりあっている最中に、

すでに他のエリアに移っていた。

「つまらないわ。そろそろ向かうとしましょうかしら。……あらっ。」

彼女が速度を高めようとエンジンブースターに動力を回そうとした瞬間、

見えないところから突然、ビームが自分に放たれたのを見て、疑問の声をあげる。

近くを探知すると、そこから少し離れた場所に、

何かを展開しているその機体が立ちはだかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・あら。面白い機体ね。・・・でも、私には効かないわよ？」

360度、あらゆる個所から見えないビーム砲の攻撃を、

アイラの操縦するキュベレイ・パピヨンが試みるも、

やはりIフィールドを突破することはできなかった。

「相性の差ね。・・・私はやることがあるから、見逃してあげてもいいけど・・・や

るといふなら、相手するわ。・・・どうするの？」

「・・・・・・・・」

その問いかけに、アイラは無言で踵を返し、去っていく。

判断の良さに笑みを浮かべつつも、ちよつとやりあつてみたかつたと半分残念そうに

眉を八の字にしながら、彼女は笑う。

「——うふふふ。いい腕のパイロットね。・・・さて、それじゃあ今度こそ向かう

としましょう。・・・私たちの晴れ舞台に。あなたの力、世界に見せつけてあげな

い？——」ウエンデ」

——かくして、これより地獄が始まった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編―2次予選編―その1

「うらあつ!!」

「このおつ!!」

――第二ピリオド。バトルロワイヤルが開始してから10分が経過した。

地上フィールドに放り出された俺は、すぐさまMA飛行形態に変形し、

なるべく戦闘をさけながら進んでいた。

しかし、森林地帯に潜んでいたジム・スナイパーを倒すためにMS形態になって降り立ち、撃破する必要があった。

被弾せず、ジムスナイパーを倒すことができたものの、

運悪く優勝候補の一角に当たってしまった。

レイジ君、セイ君と同じ、ペアで出場している異色の双子ファイター、レナート兄弟。こちらとしてはなるべく闘いたくはなかったものの、

互いにこうして相まみえた以上、下手に背中を向けることもできず、一進一退の攻防を続けていた。

しかし・・・思った以上に強い。

相手の操る緑色のハイゴックはこちらの機体よりも小さく、背も低い、木が生い茂って動きにくい地帯の中では、下手に飛行形態をとることもできず、小回りの効く相手の方が有利である。

さすがは、原作で3代目メイジンを追い詰めた実力者といったところか。クロー・バイスビームに対して、こちらもクローからビームを発射する。二つのビームが正面から衝突しあい、衝撃波が発生し、

俺のドラグ・エピオン・イエフイムが吹き飛ばされて木にぶつかり、相手のハイゴックが地面へと叩きつけられる。

「・・・!!?舐めやがって!!」

「・・・待て!!」

立ち上がろうとしたエピオンより先に態勢を整え、

とどめを刺そうとした弟を止めようと兄が何か言おうとしているが遅い。

直接クローでコックピットを串刺しにしようとしていたところと、

背中越しに隠していたナタクのドラゴンクローを発射し、ハイゴックの右クローとぶつかり合う。

間一髪でこちらの攻撃を右のクローでいなすようにはじかれ、竜頭を防がれた。

「——腕はもう一本あるんだよお!!」

左腕のクローで続く二連撃目を繰り出そうとしてくるハイゴックに向けて、切り払われ、流された竜頭の頭部分だけを稼働させて相手の方に向け、火炎放射を放つ。

「——うおっ!!」

「・・・今だっ!!」

ぎりぎりですら真上に上昇して躲すハイゴック。

だが、無理やりブースターを吹かせて機体を浮かせているだけだ。

水陸両用機にそこまでの空中戦はできない。

エピオンで浮き上がり、ほんの一瞬だけが隙を晒したハイゴックにMA形態で突撃し、ひき逃げする。

「・・・!?野郎っ!!」

「・・・待て!!」

「・・・さいならっ!!」

こちらの左腕が多少損傷したが、

相手も右肩と、右手のクローにヒビが入ったので痛み分けである。

地上戦ではあちらの方が分があるし、空からでは密集した森林地帯を狙って攻撃する

ことは難しいため、さっさと離れることにした。

レナード兄弟が何か言っているのを無視しつつ、他のエリアに移動する

「——てめえ!!覚えてろよ!!」

「・・・この借りは必ず返すぞ・・・!!」

危ないところだった・・・。

あのままあの密集している場所で戦っていたら、

エピオンでは高速戦闘もできず、やられていたかもしれない。

そのままMA形態で飛行し続けていると、

目の前に廃墟と化した市街地が見える。

爆発音があちらこちらから聴こえてくるわ、

マシンガンが放たれる銃撃音がこだまするわ、混戦の真ただ中らしい。

(・・・あ、確かここは・・・。)

「——もらったあ!!」

上から声のした場所を見ると、ドム・トルーパーが3機でケンププアーの改造機を囲み、バズーカを放とうとしているところであった。

しかし、ナイフを投げられ、更には両腕に構えたマシンガンであつという間にハチの巣にされ、3機は瞬殺され、爆発した。

(・・・相変わらず強いな・・・。)

3代目メイジン。ユウキ・タツヤ。

いくらこのドラグ・エピオンでもまともによりあえばただでは済まない。

そう感じさせる気迫が、あのケンププアーからは感じられる。

気づかれる前に素通りしようとする、そうは上手いかなかつたのか、

後ろからケンププアーに狙撃され、左の翼にかする。

バランスを失い、ふらついて挙動が怪しくなるも、

すぐに機体の制御を保ち、安定飛行を続ける。

(・・・あ、あああつぶね!!?)

敵を倒して少しは気が緩んでいるんじゃないかと思ひ、

上を通り過ぎて早くスルーしようとしたのは甘すぎたようである。

そのあとも何度もビームライフルを撃たれたが、

今度は全弾左右に飛び回って回避し、今度こそケンプファーの射程圏内から離脱することができた。

「逃がしたか。厄介な相手だから、ここで仕留めたかったが・・・。」

ケンプファーが追ってくることもなく、別方向にいるMSに攻撃を始めたのを確認すると、安どのため息を漏らす。

（・・・みんな強すぎじゃねえかな!!）

出くわす相手、出くわす相手が、優勝候補ばかりでイヤになる。

廃墟地帯を抜け、飛行し続けていると通信が入る。

「——よお!!同志よ!!」

「ようやく合流出来たな!!」

「——みんな!!無事だったか!!」

原作で、俺と同じくリカルドに彼女を寝取られた同志たちだ。

チヨマーを含め、全員無事にこれらしい。

ビギナ・ギナ、ゲンガオゾ、ガンダムヴァサーゴ、ガンダムアシユタロン、

バンデット、そしてチヨマーの新しいMS。

——しかし、チヨマーのあの機体は……。

(……紫と赤で独特の色合いになっていて、サイコ・ガンダムmk2っぽいカラーリングになっているが間違いない。)

あれも相当な性能を持つ機体だ。

確か、ZガンダムとZZガンダムの時代間に生まれた名機である。

バスター・ライフルが効かないガウ攻撃空母でも心強かったが、

バトルロワイヤルなら、やはり小回りの効きやすいMSのほうが戦いやすいだろう。

俺の助言を受け入れたらしい。

「うし!!このままりカルドのもとに行くぞ!!」

チヨマーが声を皆にかけ、俺たちは山岳地帯でザクタンクが率いる一個小隊と戦闘しているリカルドのもとに向かう。

——決戦は、すぐそこまで迫ってきていた。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（世界大会バトルロワイヤル編_2次予選編_その2

「——まずは、優勝候補の一角を叩くんだ!!撃ちまくれえ!!」

ザクタンク率いる、ドワツジ、タオツーといった5機ほどの小隊が、

協力して優勝候補のリカルド・フェリーニのウイングガンダム・フェニーチェに襲い掛かる。

だが、地上戦用に作った専用のバイクに乗るフェニーチェになかなか攻撃は当たらず、

逃げられていた。

「ひゃっは!!……お前らの考えることなどお見通しなんだよお!!」

——リカルドがバイクからザクタンク達に向けてバスターライフルを発射しようとしたその瞬間、リカルドに向けて、青色のビーム粒子が放たれた。

「——おおっ!?!」

バスターライフルを撃とうとしてバイクを多少浮かせていたところをかすり、機体のコントロールを失ったフェニーチェが地面に投げ出されるが、転がることでダメージを最小限に抑え、受け身を取る。

「——見つけたぞ!!!リカルド・フェリーニ!!!」

「——お前は!!ドイツのチョマーか!!?・・・何!!?」

真上から、メガ粒子砲に匹敵する長距離ライフルのビームスマートガンを構えたまま飛んでくるチョマーが操るMS。

その周りを取り囲むようにガンダム・ヴァサゴ、ガンダム・アシユタロン、ビギナ・ギナ、バンデット、ゲンガオゾ。

そして、ひときわ早く動くMA形態のドラグ・エピオン・イエフィムを見て、リカルドは驚きの声を上げる。

「——貴様を倒すために、俺はこいつを同志の協力によって作り上げた!!!」

この、E x | S ・ G ・ カスタムによって散るがいい!!!」

「——つち!!!」

離れた場所にあつたバスターライフルを取ろうと移動するも、

更になら紫と赤色でカラーリングされたE x | S ・ G ・ カスタムのビームスマート

ガンが再度発射され、

それをよけるために大きく上に飛行したために、フェニーチェはバスターライフルからさらに距離が離れてしまう。

「——邪魔すんじゃねえ!!!」

「ああ?!なんだお前ら!!」

横から、ザクタンク率いる他ファイターたちは、リカルドがチョマー達に襲われているのを見て呆然としてたが、我を取り戻し、乱入してくる。

ゲンガオゾの5連装ビームがタオツーにの左腕に当たると、

すかさず、サーペントがお返しとばかりにバズーカ砲を近くにいたバンデットに叩き込んで報復する。

「あいつは俺たちの獲物だ!!てめえらはさっさとどっかに行きやがれ!!!」

「——ふざけんな!!てめえらこそどっかに行きやがれ!!」

「・・・チョマー!!こいつらは俺らが抑えてっから、今のうちにフェリーニをやっちなまえ!!」

「——兄さん!!」

ガンダム・ヴァサールゴのパイロットにそういわれ、思わず反射的に呼んでしまうチョマーと、ドラグ・エピオンのパイロット。

山岳地帯から離脱しようとするフェニーチェをそのまま追跡し始める二人。

「逃がすかよ・・・!!フェリーニ!!」

「やらせてもらうぞ!!」

「・・・くつそ!!しつこい男はモテないぜ!!?」

軽口を言いながらも、肩に装備してあるビーム砲からEx―S・G・カスタムとドラグ・エピオンに向けて発射し、反撃をしながら逃げ回るフェニーチェ。

フェニーチェにバスターライフルがない今の状況が、2機にとつて最大のチャンスであった。

「――喰らえ!!インコムう!!」

「――おちろお!!」

「・・・くつそ!!バスターライフルさえあれば・・・!!」

Ex―S・G・カスタムから、有線式のオールレンジ兵器インコムが射出され、フェリーニを追うように伸びていき、あらゆる角度からビームを放ち、

徐々に回避しきれないよう追い詰めていく。

インコムで行動を制限しているところを、ドラグ・エピオン・イエフィムの背中につけてある三つめの竜頭が口を開き、エネルギーをチャージし始める。

「発射あああ!!」

「・・・くっ!!」

拡散型の粒子砲を放たれ、逃げ場がないと思われたその時

——フェニーチェと、それを狙って放たれる拡散型粒子砲の間に、
超スピードで割り込む機体が現れる。

「——エネルギー、充填!!!」

「——うし!!ブーストに使っちゃった分は回復できたか!!!」

——大気圏に突入していたスタービルドストライクが、

インコムと、ドラグ・エピオン・イエフイムから放たれた粒子砲を盾で吸収した。

「?!セイ君と、レイジ君!!!」

「——なんだ!?!誰だ!?!」

突然の乱入者に頭が混乱する二人。

だが、新たに表れたスタービルドストライクが攻撃してきたことからすぐに敵だと認識し、回避行動をとり、応戦し始める。

（・・・嘘だろ!?!間に合わないと思っていたのに・・・!!）

原作では、大気圏近くから狙撃してきて、チョマーとその仲間たちはスタービルドストライクによって半壊させられてしまった。

しかし、それを危惧したドラグ・エピオンが上手い事原作での戦いより離れた場所に上手い事誘導し、セイ、レイジの介入を防ごうとしたが、

スタービルドストライクには切り札があった。

原作の話を知っているドラグ・エピオンのパイロットは、

答えにたどりついた。

(・・・あ!!!!デイスチャーシステムか?!)

ゲームルクと戦っているときに見せたスター・ビルドストライクガンダム能力の一つ。

アブソープ・シールドでエネルギーを吸収しつつ、蓄えてあるエネルギーで超加速を行うことができるのだ。

第二ピリオド序盤では、ルワンに盾を削られたとはいえ、エネルギーをしっかりと取り込んでいた。

その時に蓄えたエネルギーを使って超加速し、高速でフェニーチェの前まで移動してアブソープ・シールドで防御したのだった。

「なあにやっつてんだよレイジ!!セイ!!」

俺がいなくなった方が後々楽になるってのによ!!!」

「あんたにこんなところでやられてもらっちゃ困るんでね!!」

——あんたとは、サシで勝負したいし、あのおっさんにも借りを返したいからな!!!」

「へっ……言ってくれるぜ!!」

「~~~~くうう!!あと少しだったのにいいいい!!うぎいいいい!!」

おのれリカルドフェリーニいいいい!!!」

「……チョマー!!!落ち着け!!!フェニーチェにはバスターライフルがない!!……あれがなければ!!!」

「———このことか?」

そういつて、スタービルドストライクが右手に掲げたのはフェニーチェが落としたバスターライフルだった。

「———お前?!?なんで俺のバスター・ライフルを!!!」

「あんたが落としたところが見えたからさ!!!ついでにひろってやってやったぜ!!!」

「———でかした!!!」

「くうううう!!!どこまでも!!!」

「まだまだ!!!俺たちに勝てると思うなよ!!!」

「それはこっちのセリフだけ!!エピオンのおっさん!!」

「今日こそ、勝たせてもらいます!!」

「しやらくせえ!!!てめえら二人事ぶつ倒してやらあ!!!」

「——ほう、なかなか面白いことになってるな。・・・どうする?」

「——傍観。勝ち残って、消耗したほうを倒せば一番楽。」

「俺はあのエピオンとまた戦いたいのだが・・・まあいい。」

お前がそういうのならそうするとしよう。」

——不穏な影が見守る中、

4 機の激戦は続く。

【幕間】 ～前世と、自分と、恋人と～ その1

前世では、自分はガノタとよばれる人間だった。

ガンダムシリーズのアニメはすべて視聴済みであり、

外伝小説や、カトキハジ●画集を買うほどののめりっぷりである。

あまりのハマりっぷりに友達には若干引かれ、

親からは嘆かれた。

ガンダムにはまったのが原因なのか、恋人もできず、

1人さびしく社会人となってしまっていた。

家に帰れば、散らかった部屋が自分を出迎え、

おかえりを言ってくれる人もいない。

それでも、恋人を作る努力もせず、

相変わらずガンダムにのめり込んでいた。

社会人になってから、金とある程度自由な時間を得られるようになり、

暇となつてしまった。

土日によることが特になく、ネットでガンダムに関する小説や動画ばかりを見てい

た。

あらかたコンテンツを見つくして、これ以上見ることのできるものはないと思つていたところ、気になる番組が放映されていた。

(・・・なんだろ。これ・・・。)

——自分の知らない機体が出てくるガンダムのアニメ。

だが、どうも世界観がそれまでと全く違つており、

子供がガンダムを、いや、あまり自分の知らないガンプラという模型を動かしているのがわかつた。

(・・・ふーん。・・・ま、興味ないけど・・・。)

次の日。何か面白いゲームはないかと家電量販店まで出かけた時のことである。

昨日見たアニメで言つていた、ガンプラなるものがとある一角にて積み上げられているのが見えた。

値段は一つ辺り1000円。

安いものであれば700円くらいの物も売っている。

(・・・。)

一つ手に取って箱に描かれている絵を見る。

その箱には、「ガンダム・エピオン」と書かれていた。

値段は1500円。買えないものではない。

Wガンダムに出てくる近接特化の機体である。

(……いやいやいや。……模型とか作ったことないし……)

そう思つて再び箱をもとの場所に戻し、買い物袋をひっさげたまま立ち去る。

更に次の日。

気が付いたら、また同じ場所に足を運んでいた。

そこには、まだ“ガンダム・エピオン”が置かれており、

まだ誰にも買われていない状態であった。

(……)

——財布の中を確認すると、1500円ちょうど入っていた。

箱と、財布の中を何度も交互に見比べる。

◆ その日、生まれて初めて、自分はガンブラを買った。

「……ふあ？」

目を開けると、白い天井が見えた。

いつも自分が寝泊まりしていたアパートの一室ではなく

シャンデリアみたいな電球がつけられた部屋であり、

体を起こすと、そこがどこか徐々に思い出してきた。

(……ああ、そういえば予選終わって、日本に来たんだっけか。)

ぼりぼり、と右手で頭を掻きながら左手でテレビのリモコンを取り、

電源スイッチをオンにすると、ちようど特集をやっていた。

『——ええ。世界大会の元優勝者、カルロス・カイザーがまさかの予選敗退という大番狂わせになったのは驚きで……』

ちようど、テレビにはアイラとカイザーの画像が映っており、

彼女がカイザーを倒して、予選を勝ち上がったことについて、

コメンテーターが意見を述べていた。

原作を知っている俺からしても、彼女の強さはチートレベルだ。

なんやねん。相手の動きが見えるって。

(……おっと。それどころじゃない。)

テレビを見つつ、近くに置いてあったドラグ・エピオンをセイ君からもらった改造案をもとに改造を施していく。

基本コンセプトの高速戦闘で相手を圧倒する、という点はそのままに、

燃費や攻撃力を強化するためだ。

遠距離攻撃のためにつけてあるドラゴンクローのビーム砲だけでは、

射撃戦になった時に心もとないので、俺は予備パーツBOXに入れてある、

そのパーツを右手で取り出し、ドラグ・エピオンの背中に軽く合わせてみる。

やはり、少々大きいかもしれない。

何をつけようとしているのか。

それは、アルトロンガンダムのカローである。

なぜ、3つめのドラゴンクローをつけようとしているかというと

すでにつけてある2つのドラゴンクローはMA形態でないとビーム砲をうまく

撃てないからである。

MS形態時にできる射撃が頭部バルカンくらいだけでは不安なため、背中に隠し玉を仕込み、近距離はクローおよび火炎放射、中距離は拡散粒子砲、遠距離はビームキャノンを放てるように改造するのだ。ただし、求められるビルド能力がそれまでとは桁が違い、文字通り俺もこの1か月は休みなしで、ドラグ・エピオンの改造に没頭する必要がある。

作っては、テストし、壊れては直し、そしてまたテストし、とセイ君が言っていた通りのことをしなければならぬのである。

道のりは険しい。

が、その過程を経て、乗り越えたら相棒は一体どれだけ強くなるのだろうか。考えただけで心臓の鼓動が早まる。

この際だ。

今までの派手な金色と緑の色合いからもつとかつこいいカラーを目指してみるか。
(・・・んーと。何色がいいかな・・・。)

ふと、頭の中に、あの子の姿が浮かんだ。

青空の中、いつも気に入っている白いワンピースと、麦わら帽子を被り、

笑顔ではしゃぐその姿が。

(.....)

今頭の中に浮かんだこととは全く関係ないが。

全く、これっぽっちも関係ないが、新生ドラグ・エピオンのカラーは、
H i | v ガンダムと同じ配色の青と白色に決定したのだった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編―2次予選編―その3）

「——っぐ!!」

「おらあつ!!」

バスターライフルを撃って反撃するも、上手く懐に潜りこまれ、斬られそうになったところを左腕でサーベルを抜き防御するフェーニチエ。

ぎやりりり、とビームサーベルがつばぜり合いをし、

火花が生じ、熱が拡散して空气中に火の粉が舞う。

青のサーベルで斬りかかるチヨマーのEX―S・G・カスタム。

フェリーニが右肩の小口径ビーム砲から何発もEX―S・G・カスタムに当てるが、見えない壁があるように、EX―S・G・カスタムに当たる前に、ビームが拡散し、消失してしまう。

「——Iフィールド!?」

「無駄だあ!!俺のEX―S・G・カスタムを舐めるなあああ!!」

「めんどくせーもん作りやがって!!あと、逆恨みしつこいんだよ!!」

「キララちゃんと仲良くしているお前に、言われたくないわあああ!!」

—— 対して、俺はレイジ君・セイ君と相対し、ぎりぎりの攻防を繰り広げていた。

「——前に戦った時よりも速くなってる!?!レイジ!!注意して!!」

「——おらあつ!!」

「——っ!!」

スタービルドストライクから放たれるビームをMA形態で旋回しながら回避する。

一発でも当たれば致命傷だ。もらうわけにはいかない。

アブソープ・シールドが向こうにはあるので、下手にビーム砲を撃つと吸収されてしまう。

それに、スタービルドストライクは、ビルド・ファイターズの中でも最強クラスの性能を誇る。すべてのパラメータが最上位だ。

近距離、中距離、遠距離と隙がなく、しかもデイスチャージシステムによる高出力のビーム砲を発射したり、V2ガンダムと同じような光の翼を発生させることもできる。

俺のドラグ・エピオンに勝ち目があるとすれば、MA形態時の速さと、近接格闘ぐら

いだ。

中途半端な距離にいれば、やられる。

俺は、1次予選、第1ピリオド時に使った切り札をすぐに切ることにした。

「——」ゼロシステム”!!起動!!”

それまで回避に専念していたが、ゼロシステムを起動することにより、相手の攻撃が以前よりも躲しやすくなる。

いかに燃費効率を改良したイエフイムとはいえ、機体にかかる負担は並ではない。

だが、後手に回っていた手を、攻め手に回せる余裕が生まれたため、

MA形態でまた突撃する。

「——このおっ!!」

「——また格闘を．．!?!」

ビームライフルを撃ってきて、抵抗するが、

射線をゼロシステムの恩恵で予測し、

紙一重で回避する。

そのまま、一瞬だけヒート化させた両腕のドラゴンクローでひき逃げ気味に襲い掛かるも、シールドで防御される。

しかし、シールドを壊すことはできなかったが、半壊させることができた。

「ぐううう!!」

「野郎!!」

（・・・仕留めそこなったか!!・・・いったん解除!!）

エネルギー効率のことを考え、いったんゼロ・システムを解除する。

弾き飛ばして、遠くに二人が吹き飛んだのを確認し、

未だ戦っているチョマー、リカルドの方に向かう。

「あ!!まずい!!フェニーチェが!!」

「くそっ!!」

俺の狙いに気が付いた二人が、ブースターをバックパックから吹かせ、

姿勢制御してすぐにこちらに向かおうとしているが、俺の方が速い。

チョマーに気を取られているフェニーチェに斬りかかる。

「もらったあ!!」

「!?!?うおつと!!」

MA形態からMSに変形し、右腕のビームソードで斬りかかると、

ぎりぎりですらこちらに気が付いたのか、フェニーチェが左に急ブーストして避ける。

機体に攻撃をすることは叶わなかった。

しかし、最初から狙いはフェニーチエではなかった。

——奴の持っていた右腕のバスターライフルに、俺のビームソードが直撃した。

「——くそっ!?!」

誘爆を回避するために、すぐさま持っていたバスターライフルをこちらに投げ捨ててくる。

後ろに距離を取って、頭部バルカンでビームソードによる傷が斜めに刻まれたバスターライフルに撃ち込むと、爆発した。

「——ひゃっはっはっはっはああああ!! これでもうバスターライフルはなくなっただなあ!! さあ、どうするフェリーニ!!!」

「——ぐうう!!」

「——これ以上やらせるかよ!!」

「——フェリーニさん!!!」

「——ぐおっ!?!」

このまま2人でリカルドを追い詰めたかったが、

左腕に後ろから救援に駆け付けたスタービルドストライクのビームライフルが直撃

した。

「——ちいつ!!」

こちらもお返しとばかりに背中から3つ目の竜頭を解放し、スタービルドストライクに向けてクローを伸ばす。

「——んなもんっ!!」

右足でクローの先っぽを蹴飛ばされ、みしや、とひしやげた音が響く。

それと同時に頭部バルカンを発射し、スタービルドストライクの関節部分を狙う。

左腕ですでにビームサーベルを抜き、

こちらに斬りかかろうとしてきていた所にまともに当たったため、多少のダメージが通る。

しかし、いくら関節部分を狙ってバルカンを撃つても早々あたるものでもなくすぐに距離を取られ、対応されてしまう。

「……!!」

「……!!」

(……強い!!)

このドラグ・エピオン・イエフイムにここまで肉薄するとは、さすが侮れない。

……どうする。

流れを変えるためにゼロシステムを一瞬だけ使ったが、

更を使うか？

いや、いくらバスターライフルを壊したとはいえ、

この後にはリカルドとの闘いも控えている。

チョマーのあの機体なら、バスターライフル以外の攻撃はほぼ効かないし、フェリーニともうまく渡り合えるとは思いますが、撃墜まではできないだろう。

他のメンバーはいまだに別の集団と戦っている状況だ。

増援を期待するのも難しい。

(……仕方ねえ!!もう一度行くか!?)

まだバトル・ロワイヤルが続くことを考え、エネルギーを温存しておきたかったが、
そうも言ってもらえないらしい。

もう一度、ゼロシステムを起動しようとしたその時、

——何か巨大なモノが上から降ってきた。

「……!?!」

「……うおお!!」

「うあつ!!」

すぐ近くにいた俺と、セイ君たちは周りが暗くなつたと思つた瞬間、

やってきたそいつが着地した時の衝撃波で軽く吹き飛ばされる。

「——なんだ!?!」

「——あれは……」

ここから少し離れた場所で戦っていたチョマーと、リカルドも手を止め、
そいつの方を注視する。

——1/144スケールの俺たちのガンプラよりも圧倒的な大きさ。

右腕には、一体どれだけ馬鹿でかいというのか、

それだけで普通の1/144ガンプラの大ききはあるであろう、マシガンを持っている。

ピンク色のモノアイがうごめき、俺を・・・いや、正確には俺の隣にいるスタービルドストライクを見つめている。

「——なんなんだ、ありや!!?」

「——あ、あれは・・・!!」

「・・・このタイミングでかよ・・・。くそっ!!」

俺は思わず毒づいた。

そういえば、こいつがいたんだった・・・!!

「——メガサイズ!!?」

1/48の巨大ザクが、俺たちの行く手に立ちはだかった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（世界大会バトルロワイヤル編_2次予選編_その4

「……な……な……!?!」

「……嘘だろ……?!」

チヨマーとフェリーニも思わず手を止めて戦うのをやめている。

分かり合えず、喧嘩多発の二人が争うのをやめて二人で同じ光景を見ているなど
そうそうない。

俺だって、正直近くで見たらびびる。

「……あ、あれは……1/48サイズ……!?!」

「……おい、セイ!! あんな奴、開始時にはいなかっただろ!?!」

何がどうなってやがんだ!!?!」

「わからないよ!!……!?!動き出した!?!」

それまで、排気音を吐き出し、亀のようにゆっくりと動くだけのザクが右腕に持つ巨大なザクマシンガンを構え、こちらに向ける。

その光景を見て、俺は思わず叫んだ。

「逃げる!!! あれはバトルとは関係ない!!! 早く!!!」

「!!!」

俺の言葉に呆然としていたレイジ君、セイ君が状況を認識しだすとすぐにザクから離れようと距離を取る。

そして、さきほどまでスタービルドストライクがいた場所を、

ザクマシンガンの弾丸が通り過ぎていった。

遠くの山に着弾すると、跡形もなくその山が消し飛び、更地と化していく。

轟音が鳴り響くと同時に、吹き飛んだ山のかげらが土砂のように天から降り注ぎ、

地面へと零れ落ちていく。

「な、なんだありやああ・・!!!?」

「馬鹿野郎!!! 早く逃げんだよ!!!」

「戦っている場合じゃねえ!!! 巻き添え喰らうぞ!!! 早く撤退だああ!!!」

それまで争っていたザクタンク率いるファイターたちと、

同志たちも事の重大さに気が付いたのかメガザクから遠く離れた場所に行こうと、山岳地帯から、隣のフィールドへの移動を始める。

とりあえず、この時点でまだ仲間たちが無事なことに胸をなでおろし、ほつと息を吐いた。

だが、これからの展開を知っている俺は、頭の中で考える。

メガザクが出てくる前にフェリーニと、セイ君たちを倒して

チョマー、同志たちを生存させる。

そして、メガザクが出てくる前に速攻で退避し、

安全地帯で後は時間切れまで待つ予定だった。

しかし、それも思った以上にフェリーニと、セイ君たちが手ごわく、

チョマーと組んでも容易に撃墜させることができなかつたため、ご破算となった。

こうして出てきてしまった以上、次にメガザクがとる行動は予測できる。

「くそっ!!なんで俺たちばかり狙いやがるっ!」

「・・・うつ!?!まずいつ!!一発でも当たったら致命傷だよ!!」

——メガザクの狙いは、原作と変わらずスタービルドストライクだ。

あのザクを投入したのはこの大会を開催しているマシタ会長だ。

このマシタ会長は異世界、アリアンの技術を持ち出して、この世界にやってきた人物である。

ゆえに、同じくアリアン出身である、しかもその王子であるレイジを見つけてしまい、急遽メガザクを投入し、排除することにした、という経緯のはずである。

今頃、会長室でほくそ笑んでいる所だろう。

——その光景を想像しただけで、右手に力がこもり、拳を握っていた。

「おい!!同志よ!!さっさと逃げるぞ!!」

「レイジ!!セイ!!早く逃げろ!!」

チョマーとフェリーニも後退しつつ、

俺とセイ君たちにそう警告してくる。

だが、俺はともかく、メガザクにロックオンされているセイ君たちはそうもいかず、

ザク・マシンガンを必死によけ続ける。

(……どうする!?!どうすればいい!?!)

すでに当初の予定は破綻している。

この第二期オドではフェリーニを、セイ君たちを倒すことを諦め、

さっさとチョマー達と逃げるべきだろう。

このザクを倒したところで、俺には何の得もない。

原作主人公であるならば、きつと、原作通りスタービルド・ストライクの力を使って、デイスチャージシステムでメガザクを倒してくれるだろう。

——しかし、フェリーニの援護。そして、本来ならばここにいるはずのマオ君のアシストがないのが原因か、セイ君たちはその真価を發揮することができず、

また、通常の攻撃もメガザクには効いている様子もなく、徐々に追い詰められていく。それでも、彼らは諦めるようなそぶりを見せず、怒りの表情を浮かべ戦い続けている。

「許せない。．．．こんな、めっちゃくちゃ、されちゃあ!!」

「——ああ!!だよなあ!!」

ファイターとして戦っていたところに水を差されたことに激高しているのか、一歩も引く様子を見せず、メガザクにビームライフルを連射して当てまくり、また時には肉薄して、サーベルでメガザクのボディに攻撃をしかけている。が、分厚すぎる装甲を突き抜けることはできず、いたずらにエネルギーを消耗していく。

(．．．．．)

きつと、メガザクに狙われていなくても、彼らならこの状況に怒りを感じ、闘いを挑んだのだろう。

馬鹿だ。やつぱり、彼らはまだまだ子供だ。

闘いで雌雄を決したかったが、引き際を誤っては元も子もない。

——本当に残念だ。



「——畜生!!攻撃が通らねえ!!何とかなんねえのか!?セイ!!」

「——せめて、もう少しエネルギーがあれば・・・!!」

セイ、レイジはメガザクの絶え間なく続く猛攻にさらされ、

刻一刻と機体の寿命を削られていた。

ビルドストライクは高性能の機体だ。

スピード、パワー、操作性、すべてにおいてトップクラスと断言できるガンプラである。

しかし、1/144に比べ、3倍以上の質量をもつ1/48スケールのザク相手では、あまりに分が悪いと言わざるを得ない。

マシンガンを回避し、攻撃を叩き込み続けるが、いまだに通じる気配もなく、プラフスキー粒子を消耗させられていくばかりだ。

次いで、ザクは新たな武装を左手に持ち、二人に投げつける。

「・・・あれは!?!」

ジャイアント・クラツカー。

そもそののザクのクラツカーは小さく、炸裂範囲もそこまでないが、

1/48ザクが扱うものなれば、比較にならないほどの爆発規模となる。

クラツカーの直撃を避けられはしたものの、

爆発の余波までは回避することは叶わず、熱風が彼らの機体を襲う。

「——うああっ!!」

「——ぐうっ!!」

空中から地面へと投げ出され、無防備な態勢でスタービルドストライクが叩きつけられる。

それを隙と見たのか、メガザクは左足につけてある巨大ミサイルポッドをセイ、レイジに向けて一斉発射する。

ぐぐぐ、と機体を動かそうとするもルワン・ダラーラ、ドラグ・エピオン・イエフィムとの連戦ですでに機体のエネルギー残量は減っており、また、先ほどクラツカーによる爆発に巻き込まれたのもあって、すぐに機体を動かすことができなかった。

「……くそっ!!!」

「……駄目だっ!!!やられるっ!!!」

ミサイルがスタービルドストライクに迫りつつあるその時

——一筋の閃光が、ミサイルを切り裂き、彼らの前に降り立つ。

「……………」

「……え? ……え!?!」

「……おっさん!?! ……なんで…………?!?!」

メガザクの後頭部にMA形態で突撃して体をぐらつかせてひき逃げした後
ドラグ・エピオン・イエフイムがビームソードでミサイルの先端を切断し、

二つに分かれたミサイルがコントロールを失い、離れた場所に着弾して、

爆発を起こす。

「……………全く、俺も馬鹿か……………」

観念しきつたようにため息を吐き、スタービルドストライクを庇うように男は自身の
愛機を前に立たせる。

「……………運命は、変わらないみたいだな……………。本当、理不尽だ……………。……………セイ君、
レイジ君。まだ戦えるか?」

男が二人に問いかけると、呆然とその後ろ姿を見ていたセイとレイジの二人は我を取り戻し、力強く返事をする。

「——はいっ!!!」

「——へっ!!!当たり前だろおっさん!!」

「おっ・・・いや、子供から見たら俺もおっさんなのか・・・。」

それまで、ドラグ・エピオン・イエフイムの後ろにいたスタービルドストライクは、その横に立ち、肩を並べる。

「——へへ。いいのかよ!?俺らを手助けなんてして!?後々、困ることになるぜ!」

「——あの、ありがとうございます。」

「その減らず口・・・フェリーニみたいだな。あんまりあいつの影響受けてほしくないんだけどな。・・・ああ、いいさ。どちらにせよ、俺もザクに狙われているみたいだし。」

それまで、スタービルドストライクを執拗に狙っていたメガザクが、

スタービルドストライクを護ったことで、ドラグ・エピオン・イエフイムも敵として認識し、バズーカを構え始める。

「——それじゃあ、行くぞ!!二人とも!!」

「はいっ!!!」

「おうっ!!!」

——かくして、正史ではありえない共闘が、いまここに始まった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（世界大会バトルロワイヤル編_2次予選編_その5

「——くるぞっ!!」

「!!」

俺が掛け声すると同時にメガザクが再び動き始め、

その足で踏みつぶさんとこちらに歩み寄ってくる。

相棒を通してみるその大きさは、巨人というべきものであり、

奴が一步動くだけで地が揺れ、歩いた個所に少しばかりへこみができる。

俺とレイジ君たちは左右に分かれてターゲットを絞らせないように

あちこち動き回る。

「どーした!!動きがすつとろいなあ!!デカブツさんよ!!!」

「レイジ!!回避に専念して!!どちらに攻撃が来るか見定めるんだ!!」

「おう!!」

飛び回る俺のドラグ・エピオンと、セイ君たちのスタービルドストライクをゆつくりと一瞥すると、メガザクはセイ君たちのほうに向けて、またザク・マシンガンを構え、撃とうとし始める。

その隙を逃さず、MA形態に変形し、やつの頭に突撃してヒート化させたドラゴンクローで切り裂いた。

やはり装甲が分厚く、まともなダメージは与えられなかったが態勢を崩したことにより、ザクマシンガンの射線もぶれ、スタービルドストライクがいるところは全く関係ないところを撃っていた。

——やはり、間違いない

「——二人とも!!こいつはあまりの大きさに早く動くことができない!!」

ターゲットにされていけないほうが、メガザクが攻撃する瞬間に妨害すれば、しのぐことがぞぞ!!」

——こいつは、一度に一人しか狙えない!!

ならば、的にされていけないほうが攻撃し、ちよつかいを出すことで、

容易にメガザクの動きを抑えることができる!!

俊敏性であれば、ガンプラの中でも最高クラスのパフォーマンスを誇るスタービルドストライクと、さらに速度だけでいえば最速と云って過言でないドラグ・エピオン・イエフィムで

あればよけ続けることも可能だ。

俺が攻撃をして、多少の傷をコックピット部分につけたからか、

メガザクが今度は、セイ君たちのほうでなく俺の方に向けてヒートホークを左手に構え、振り回してくる。

しかし、フェニーチエを相手にするよりもずっと容易く、

斬撃の軌道が読みやすい大ぶりのため、難なく横に飛んで回避し、

メガザクの後ろに回ったスタービルドストライクがビームライフルを、

奴の後頭部に叩き込んだ。

ダメージはやはりほとんどなかったが、それでもずっと攻撃を受け続けたせいなのか、機体がわずかだか削れたように見えた。

「——いける!!いけるぞ!!ダメージは少ないが通っている!!このままいけば——!!」

しかし、ここで思わぬ誤算が生じた。

「——あ、あれ!?!?!き、機体が!?!」

「・・・!?やべえ・・・!!」

度重なる連戦と、エネルギーを使い続けた弊害から、スタービルド・ストライクの動きが鈍り始めた。

ただでさえ高出力のビームライフルを装備していることに加え、デイスチャーシステムでエネルギーを大量消費し、

フェリーニを助けに来たのだ。

原作よりもエネルギー残量が少なくなるのは必然といえる。

それでもまだ動くことはできていたが、明らかに

動きに精細さを欠き、機体の空中制御も怪しくなってきた。

(・・・こちらも、まずいな・・・。)

そして、それは彼らと戦い続けていた俺にもいえることであり、ドラグ・エピオンもあまり長くは戦えそうにない。

フェリーニとセイ君、レイジ君を倒したら撤退し逃げる予定だったため、メガザクとまで戦うリソースを確保できていない。

そして、もう一つ最悪の誤算が発生した。

メガザクが右腕に今度はバズーカを装備し始め、

動きが遅くなり始めたセイ君たちを狙い始める。

（・・・っ。カバーしないと・・・!!）

とりあえず時間稼ぎのために、またMA形態でメガザクの後ろから左肩を狙い、態勢を崩そうと突貫を試みた時のことである。

——イエフイムの左真横からミサイルが迫ってきていた。

「——なっ!?!」

機体を真上に急上昇して回避を試みるも、機体の側面部分にかすってしまい、

ミサイルが爆発こそしなかったものの、圧倒的な重さの物体がぶつかったことにより、左の翼と、腕がひしやげてしまう。

「——うおおおっ!!」

エピオンがくるくると空中を回り、地面へと落下していく。

そのまま大地に撃墜しそうになるが、機体を左斜めに傾けつつ、背中にあるクローを展開して地面にぶつかる瞬間、その地面に向かってクローを伸ばして突き立てることで着地時の衝撃を軽減する。

元々使い物にならなくなった左腕と翼から地面に突っ込むことで、

ダメージを最小限に抑えるようにしつつ、

がががが、と大地を削りながらエピオンが地面へと降り立つ。

(・・・なぜ!?レイジ君たちの方を狙っていたはず!!・・・同時に攻撃は・・・)
その時、奴の左足のミサイルポットの弾数が減っていることに気が付き、
冷や汗を垂らす。

・・・そうか。奴は通常のザクじゃなく、陸戦仕様のザクだ。

奴の足には、追加武装のミサイルポットがある・・・!!

(俺は、馬鹿か・・・!!)

歯ぎしりをする。

ミサイルポットを併用すれば、

同時に俺たちへ攻撃を仕掛けることは可能だ。

「——おっさん!!」

「・・・逃げてください!!」

ザク・バズーカをよけて、ビームライフルをメガザクに当てながら、
二人がそう言ってくるが、ザクはそれを気に留めず、
バズーカを地面に堕ちてまだ動けないこちらに向けて、発射してきた。

(・・・くそっ!!機体が・・・!!)

地面に墜落した時にどこか推進系がいかれたのか、

機体が上手く飛んでくれない。

（マズイ・・・!!再び空に上がるまでに時間がかかる・・・!!）

これまでか、と思つたその時、

救いの手が差し伸べられた。

「——うおらあああ!!」

「——喰らえよ!!インコムう!!」

青い光の粒子が線となつて、バズーカの弾を吹き飛ばし、

有線型のファンネルというべきインコムが、

ザクに襲いかかる。

攻撃自体のダメージはなかったが、360度、様々な角度からビームを撃たれ、ザクが身をよろけさせ、地面にずずん、と轟音を響かせて倒れる。

そして、俺は助けてくれた二人の機体を見て、思わず叫んだ。

EX—s・G・カスタムのビームスマートガンを持ったフェニーチェと、発射したインコムを収納するEX—s・G・カスタム。

そして、フェニーチェが持っていたビームスマートガン
EX-s・G・カスタムに投げ返すとすぐさまそれも格納した。

「——フェリーニ!? チョマー!!?」

「・・・おい!! いつまでぼさつとしてやがる!!? ずらかるぞ!!」

「同志よ!! 逃げるぞ!!」

チョマーがいまだに上手く動けない俺の機体の右肩を持ち、

フェリーニがスタービルド・ストライクを誘導して、

起き上がりつつあるメガザクから距離を取る。

「……………」

「・・・なんで、チョマーはともかく、俺がお前を助けたのか? ……って顔してんな。」

「・・・同志よ。こいつが憎いのはわかる。・・・だが、今はあいつをどうにかしな

ればならないようだ。」

「……………二人とも、ありがとうございます。」

「礼を言わず。フェリーニと。……………あと、しましま服のおっさん。」

「チョマーだ!!! 助けてやったんだから、もうちよつと年上を敬え!! あと、俺はまだおっさ

んと言われるような年齢じゃない!!」

「え．．．？」

「なんで疑問系なんだよおおおお!!」

正直、助かった。あのままだったらやられていた．．．。

二人とも、あんな怪物と相對するのも嫌だったろうに、

よく助けてくれたものだ．．．。

ぎゃーすかわめきながら、自分はまだ20代だからおっさんじゃないと主張するチョ

マーと、そんなチョマーを見て楽しそうにいじるフェリーニ。

困惑するセイ君對照的に、レイジ君も先ほどまでと違い、

楽しそうに笑い転げていた。

俺もその光景を見て、思わず緊張の糸が緩み、

噴き出す。

しかし、その空気も一瞬で凍り付く。

(．．?! エネルギー反応!!?)

真後ろを見ると、両腕に構えたザクバズーカを発射し、

両足からミサイルポッドを射出しているザクの姿が見えた。

その光景に気づいた他の面々も事態の深刻さを認識し

叫ぶ。

「・・・やべえ!!回避だ!!」

「待て!!フェリーニ!!俺は同志を支えているからよけ切れん!!」

「じゃあ、ビームスマートガンをもう一度貸せ!!アレで・・・!!」

「駄目だ!!受け渡している暇もない!!」

「・・・セイ!!何とかならねえのか!!?」

「実弾系相手じゃ、アブソープ・シールドも役に立たない!!」

(・・・くそ!!今度こそ終いか!!?)

眼前にメガザクの圧倒的質量から放たれたバズーカとミサイルが

迫り、3人を庇うためにミサイルにぶつかりに行こうとしたその瞬間

——先ほどの光景をリプレイ再生するかのように、

再び光の粒子がメガザクのバズーカと、ミサイルに放たれた。

ただし、今度はEX-S・G・カスタムのビームスマートガンとは比にならぬほどの、当たれば即死するほどの熱量が天上から降ってきた。

そして、その光の発射源をサーチすると、

青い光が点滅しながら、ゆっくりと降下しているのが見えた。

「あれは・・・!!」

今の俺には、その姿が救いの天使にさえ思えた。

「それは、ガンダムX魔王が、左肩からザクバズーカの弾丸と、ミサイルに向けて、

戦略兵器、”サテライト・キャノン”を放つ姿だった。

「ゆえあつて!!手助けしますわ!!!・・・サテライト・キャノン!!いつけえええええ!!!」

光の奔流がミサイルとザクバズーカの弾を焼き尽くし、メガザクを飲みこんだ。

フエリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編―2次予選編―その6

天上から降り注ぎ、桃色の光の粒子が火の粉のようにあたりに舞う。

それは、太い線となり、巨大な緑の巨人、メガザクを包み込んだ。

「——うおおっ!!」

あのバスターライフルさえも超える威力がメガザクを襲い、

そして貫通したビームがメガザクの背後にあつた廃墟市街地に当たり、建物を吹き飛ばしていく。

態勢を崩したメガザクが後ろにふらつき、地面へと倒れ込んだ。

「——マオくん!!無事だったんだね!!」

「いやあ、遅れてすみません。・・・えへへ」

ぷすぷす、と音を立てて焼き焦げるメガザクの斜め上空。

マオ君が駆るガンダムX魔王がサテライト・キャノンを構えたままの態勢でこちらに降り立ってくる。

た、助かった……。

「えらい大変でしたね……。本当……。」

「しかし、何にせよ九死に一生を得たぞ。……まじでありがとな、マオ。」

「いやあく。褒められると素直にうれしいですわー。」

あれだけこちらに猛威を振るつたメガザクもついに地面に倒れ伏した。

原作とはだいぶ違った形になるが、チョマーも、仲間たちも生き残り、

いい方向に運命を変えられた。

何より、俺自身もこの第二ピリオドを生き残ることができたのは大きな変化と言える。

「フェリーニ!!次は貴様の番だ!!覚悟しろ!!」

「ああ!?!お前この和やかムードの中戦るつもりなのかよ!?!」

しつこすぎねえか!?!」

「当たり前だ!!俺はお前に勝つまで諦めんからな!!」

「上等だ……!!バスターライフルがなくなったって、お前に負けるわけ……。」

で、案の定というかチョマーがフェリーニに詰め寄り、

だからこそ、ここでフェリーニに対して借りを返しておきたい、というのが理屈だ。屁理屈にもほどがあるが。

「…ふん。運がよかったな、フェリーニ。同志を助けたよしみで今回は見逃してやる。」
「何を偉そうに。俺が助けたのはお前じゃなくこいつだっつーの。」

「…ま、今更戦う…って雰囲気でもないし…。」

「俺は、やる気満々だけどな。」

フェリーニと、セイ君、レイジ君は飛び立ち、

そして最後に一言述べて去っていく。

「——決勝トーナメントで会おうぜ。…なあ、エピオンを使い手よ。」

「じゃあな、しましま服のおっさんに、エピオンのおっさん。」

「…また。」

それだけ言って、今度こそ本当に飛び立っていく。

チヨマーのEX—S・G・カスタムの装備であれば、

後ろからあの2機を狙って墜とそうつすることもできただろう。

だが、背部のビームカノンを構えはしているものの、そこから一步も動かず、EX—

S・G・カスタムはフェニーチェとスタービルドストライクの後姿が見えなくなるまで

見届けていた。

そして、その姿が完全に見えない位置にまで遠ざかるのを確認すると、ビームカノンの砲口を下に向けた。

「……全く。フェリーニのやつを潰すチャンスだったが……まあ、同志の頼みであれば仕方ない。……奴が腹立たしいことは変わりないがな!!」

「すまん……。」

「……俺たちも、遠くに避難していた同志たちの元に行くぞ。向こうの方角から戦闘音がまたし始めたということは、戦いが再開しているとことだ。」

チヨマーの言う通り、ザクタンクの小隊と、他の仲間たちが逃げていった先の森林地帯から戦闘音が再び鳴り響いていた。

早々負けることはないだろうが、気にかかるのは俺も同じだ。

一緒に飛ばうとスラストを吹かせた。

——そして、なぜか背中にぞわりと悪寒が走り

思わず空を見上げる。

「」

「……ん? どうした?」

「……チヨマー。先に行っててくれ。」

「・・・え？なぜだ？」

「・・・早くっ!!!」

「お、おう・・・。・・・じゃあ先に行って待つてるぞ!!早く来いよ!!」

チヨマーが、EX-S・G・カスタムのバーニアをブーストさせ、

あつという間に点となり、空高く舞い上がり、森林地帯エリアへと消えていった。

「——行っただか。」

「——お別れの挨拶は済んだの？」

聞き覚えのある、耳こちのいい何度も聴きたくなる高いソプラノボイスが聴こえた。

はるか上空から、今まで高高度の空に滞空していたのであろう、

そいつが上からゆっくりとバーニアを噴かせ、降り立ってくる。

左右につけられた巨大なコンテナ。

その中に詰まっている兵装は、どれだけ多くのMSがいようと一網打尽にできる戦術

兵器。

アイラのキュベレイ・パピオンが装備するクリア・ファンネルと同じくらい厄介な代

物だ。

巨体の中心部には何が乗っているのか、丸いコアのようなものに包まれており、その内部を伺うことは叶わない。

だが、俺はこの機体を知っている——。

「……わざわざ見逃してくれたんだ。それに、お前が俺をやろうとしているんだったら、そのコンテナにある”アレ”を一斉掃射すれば、ボロボロの今のエピオンなら楽に倒せるはずだ。」

「……ういふ。」

”GP開発計画”において、最強の機体と目される3番目のガンダム。

正確に言うならば、”0083くスター・ダストメモリー”に登場する機体の中でMAに近い巨体を持つ、カテゴリ的にぎりぎりMSの怪物。

ガンダム・デンドロビウム。

その、1/144のしかも改造したであろう機体が、

左腕、左翼、背中ドラゴンヘッドが傷ついた状態のエピオンの真上までやってきた。

「——そうね。本当だったら、あのメガザクと戦って傷ついたところを貴方まとめて消し炭にする予定だったけど……。」

「・・・」

セイ君、レイジ君、フェリーニ達が聞けばドン引きするであろうことを恍惚とした笑みを浮かべてそういう彼女に内心引きつつ、

黙って話の続きを促す。

ここで下手に刺激して、戦闘になったら俺に勝ち目はない。

「私からのお願いはただ一つ。」

「!?!」

そう言つて、元カノが目を見開き、にらみつけてくる。

・・・やはり、戦闘は避けられないか!!

「大会が終わるまで、私と同じ部屋で一緒に過ごさない!!!」

「HA?」

————— 過ごさない・・・

————— 過ごさない・・・

————— しさない・・・

大声で叫んだ彼女の声は会場中にきいん、と響き渡り、
聴こえてしまったのであろう、一部の観客たちを絶句させた。
そして、その”お願い”を聞いた俺は思わずつぶやく。

「．．
なんで???

混乱だらけの頭の中、俺は先ほどまでとは別の意味で、
ピンチを迎えているのだった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガン普拉バトル出場する～（世界大会_大騒ぎ編）

ガン普拉バトルの世界選手権。

複数あるピリオドを勝ち抜き、決勝トーナメントに残った猛者たち。

そのいずれもが優勝を狙える実力者たちであり、

誰が勝つか予想がつかないほどにレベルが伯仲していた。

そして、その一人、いや、ペアなので二人であるセイ、レイジは数々のガンプラマフィアや運営側から数々の妨害等を受けながらも、無事に決勝に残ることができたのであった。

ホテルの一室にて、セイはスタービルドストライクのメンテナンスをしており、

レイジはベッドに寝転がりながら、束の間の休息を堪能していた。

「なあ、セイ。そろそろメシ喰いに行かぬーかー？」

「……………」

(・・・聞いてねーな。こりゃ。)

相方が集中してのめり込んでおり、周りに一切注意を向けずに黙々と作業し、返事がないことを確認すると、はあ、とため息を吐き、

もう一度ベッドに寝転ぶ。

レイジの頭の中では、それまでの戦いの数々が思い出されており

中でも一番印象的だった第二ピリオド終了時の出来事が浮かび上がった。



第二ピリオド終盤時。

メガザクが倒れ、”Battle End”の表示がフィールド上に出て、

バトルロワイヤルが終了する間際。

彼女の発言で会場の空気が凍った。

時が止まったといったほうが正しいかもしれない。

それほどまでに・・・彼女が”お願い”してきたことが爆弾発言だったからである。

「」

会場中の視線が俺に注がれる。

お前、何してんの？その美女とはどういう関係なの？と。

ちなみに、侮蔑の視線が1割、好奇心が2割。

そして残りの7割が非モテなのか、嫉妬と恨みの感情を込めた男どもからの熱い視線である。

「……………なんで????
……………なんで????」

「……………なんで、ですって?…そんなの、貴方のことが好きだからに決まっているじゃない!!」

「違う。俺が言いたいのはそうじゃなくって

なんで、わざわざこんな世界中継されている場で、

俺の部屋に來いよ、ベイベ、みたいなことを言ってしまったのかということだ。

メールでも散々なぜか愛の言葉を送られ続けていたが

さすがに世界大会の生中継しているときに一緒に部屋ですごそ?

じゃないとデンドロビウムで、貴方のガンブラすり下ろしちゃうから♡などと

そんな想定外の斜め上の脅迫を受けるなんて、誰が思う。

そして、ぷつり、と通信が入ったかと思うと、

大声で割り込んでくる声。

『同志よおおお!!これはどういうことだああああ!!裏切ったのかああああ!!』

『お前・・・!!こんな美人の女の子に誘われるなんて・・・!!!』

『死ね!!氏ねじゃなく死ね!!』

チヨマー達から怨嗟の声が届けられる。

いや、違うねん・・・。

俺も原作ではリカルドに寝取られるから、だから、

寝取られる前に別れたから防げただけで・・・。

『くそおおお!!お前など・・・!!』

「———今、私がこの人と話しているの。黙っていてくれないかしら?」

『・・・ア、ハイ・・・。』

彼女がそれだけ言うと、あれだけ騒いでいた同志たちも通信を即座に切り、会話を打ち切った。

完全なる護身である。

おいしいおいしい!!?!?

見捨てるの早すぎんだろおお!!

「それじゃあ、行きましようか。」

「い、いや、まだ戦いは続いて・・・。」

第二ピリオドの戦いはまだ終わっていない。

なので、俺と彼女がどこかに行くことはできないはずだ。

現に、メガザクがまだ辛うじて生きているからか、戦闘終了のアナウンスも出ていな

いし。

「・・・ああ。そういえばそうだったわね。・・・よいしょつと。」

俺の言葉にうなずきながら、デンドロビウムのメガ粒子砲を

倒れ伏しているメガザクに向けてると、チャージし始め、

大口径のビーム砲が放出される。

それまで数々の攻撃に耐えきり、何とか生存していたメガザクも

さすがにサテライト・キャノンを受けた後の装甲では叶わないのか、

コックピット部分に大きな穴が空き、大爆発を引き起こす。

メガザクの爆発と同時に、Battle Endとフィールドに表示された。
ええ……。

「じゃあ、まずはあなたの部屋に行つて、荷物を取りに行きましようか。」

「……いや、男女が同じ部屋とかまずいのでは……。」

「は？」

「いや、その……。」

「……。」

「……タスケテ」

ずるずる、と俺が立っている隣までいつの間にか移動していた彼女に腕を取られて、会場の外まで引きずられる。

観客たちは、その間一言もしゃべらず、静寂を保っていたが、

俺と彼女が会場の外に出て、しばらく歩いていた後、

どよめきが起こり、囁し立てるような声がするのが聴こえてきた。



本当に、俺の部屋の荷物をすべて撤収させられ、

彼女の部屋に移動させられた。

どうしてこうなった？

どうしてこうなった!!?

今はホテルのレストランで一緒に食事をしている所である。

横並びのソファアの席に座り、にこにここと笑いながら、

俺の隣でメニュー表を広げて、何を食べようか考え込む彼女。

・・・しかし、どういうことだ？

この子は、フェリーニに気があるのではないのか？

原作ではフェリーニとイイ感じになったはずなのだから、

今回もそういう風になるはずだ。

だというのに、いろいろとオカシイ。

メガザクと戦った時は、俺が変な介入をしたせいで、

原作とは違う流れとなったのはわかる。

だけれども、前世の記憶を失う前の俺と付き合っていただけの彼女なら、

フェリーニの方に惹かれるはずだ。

腕組みをしながら考えるもやはり理由はわからず、

ああだこうだ色々頭の中で可能性を考えこむ。だが、やはり、考えてもわからないことはわからないのだった。

「……?どうしたの?」

彼女がまだ料理をオーダーしようとしないうちに俺を不思議がつてか、そう聞いてくる。

あ、そうだ。彼女に聞けばわかるのでは?

「……なあ、君が好きなのってフェ……。」

その時、ぞくりと首元にナイフを突きつけられたような悪寒が体中に走り、鳥肌が立った。

その先を言うことは叶わなかった。

「——フェ、が何?」

「」

NTばりのプレッシャーが彼女から発せられ、隣にいただけで押しつぶされそうな重みを感じる。

心臓の鼓動が早まり、脳がやめろ、その続きを言っではいけないと警告を送ってくる。

「……フェ、フェネクス。ガンダム・フェネクスってかっこいいよな!!」

「ええ、そうね。」

俺が言った言葉を受けて、彼女は体から放つプレッシャーを弱め、

ニコニコと嬉しそうに笑みを浮かべる。

女はこれだからかんがするどくこわい（）

半分死に体で白目をむき、意識を失いそうになるが、

腹に力を入れて何とか耐える。

意識が落ちたら、マジでナニされるかわからないので、

必死にこらえる。

「……あの、すみません。」

「……何でしょうか。」

「……」

そんな俺たちに声をかける人物がいた。

彼女はなぜか若干いらついているのか、

声が多少低くなり、笑みを浮かべながらも目は笑っていない。

あれ・・・？この子って・・・こんな子だったっけ・・・？

俺の知っている彼女とやはりどこか違うような気がするが、

これが彼女の素なのだろうか。

「お楽しみのところすみません。私、日本ガンプラ協会関係の記者なのですが・・・。」

「まあ、そうでしたか。」

「ほんの1分だけいただけませんかでしょうか。」

「・・・食事中なので、質問なら一つだけ答えますわ。」

「ひ、一つだけですか・・・。」

「ええ。」

うわあ・・・記者さんも困っているよ・・・。

まあ、いくら記事になるネタを探して、たまたま俺たちを見かけたからと行っても、

食事しているところに話しかけるのはなあ・・・。

やり取りを見守っていると、記者さんが彼女に爆弾を落とす。

「——お二人はどんな関係ですか？」

「」

絶句し、二の句がつけず、しかしここで早く何か言っただけでフォローしないとまずい気がしたので口を開こうとした。

したのだ。

だが、彼女の行動は俺よりもわずかに早く、ぐい、と俺が来ている服の首元を記者さんに見えるよう軽く引つ張り笑いながら答えた。

—— 先日、彼女が俺の首元につけた噛み跡が見えるようにしながら。

「こんな噛み跡をつける関係です♪」

「

セイ君、レイジ君、マオ君、ラルさん、チヨマー、同志たち、いやこの際フェリーニでもいい。

誰か、誰か助けてくれ……。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガン普拉バトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編―第三ピリオド前コミュ編―セイ）

□

「……あ、あの、大丈夫ですか？」

男は、真つ白に燃え尽きていた。

ガン普拉協会から嚴重注意を受けたり、黒髪の美少女に惚れられて、

大会の野郎どもからラブレターならぬ、デスレターのメールをもらったり、

同じホテルの一室にいた彼女が、風呂上がりの姿を確信犯的に見せつけてきたり、

もう、いろいろとアレであった。

そんな男を心配そうに控室で声をかけるのは第二ピリオドで一緒にメガザク相手に戦ったセイ。一時は一对一でタイマンをしていた敵同士だったが、あからさまに第二ピ

リオドよりも元気がなく、目から光が失われつつあるエピオンのパイロットに対し、さすがに彼も見かねた。

レイジは恋愛とかよくわからない、と言つて、アイラと会場の外でいちやついていた。

「

「……げ、元氣出してください……。ガンプラの改造くらいなら、

また、力を貸しますから……。」

「……。」

セイ自身も、スタービルドストライクの改造とメンテナンスが終わったため、時間に余裕が生まれていた。

何よりも、自身が出した改造案通りに作られたドラグ・エピオン・イエフィムの完成度を確かめたい、という気持ちもあり、男が右手に持っているイエフィムをちらちらと見ては、うわあ、あの武装つけたんだ……。すごい……。と心の中でこぼす。

カラーも緑と金色の二色ベースから白と青のカラーリングに変わっていたためまるで以前とは全く別の機体のように見えた。

男はセイの言葉にぴくり、と体を動かして反応し、

ぐぐぐ、と右手にもつエピオンをセイの方にもつていき、

手渡した。

「……それ。改造案通りに作ってみたんだけど、どこかおかしいことかない？」

「うーん。……当初の予定だと、MA形態時にもMS形態時にも発射できるビームを増やしつつ、燃費もよくするって方向性でしたよね？」

「うん。」

「……背中のドラゴンヘッド、ビーム砲と拡散ビームだけじゃなく、火炎放射もできるですね……。」

「それ、なかったらレナート兄弟にやられていたかもしれん。」

ドラグ・エピオン・イエフィムの背中に取り付けられた第三の竜頭。

両腕につけられたドラゴン・ガンダムのドラゴン・クローとは別に、

新たに取り付けたものである。

イエフィム、という名前もこの2つのドラゴン・クロー、1つのドラゴン・ヘッドのみつつを合わせて”三重奏”に由来するロシアの人名から取られた名前である。

MA形態時に不足していた射撃戦の火力を底上げする目的で取り付けられたものであったが、ビームを発射するだけでなく、近距離では火炎放射で実弾系、ビーム系が効かない相手だろうと確実にダメージを与えることができ、しかもドラゴン・ヘッドを伸ばせばアツガイの腕のように、相手にぶつけて攻撃できる優れものであった。

それ以外の目的としては、ドラグ・エピオンが様々なフィールドで戦えるようにと、男とセイが案を出し合って成した改造である。

「あと、あれだね。ドラグ・エピオンはMA形態で開けたフィールドなら、

問題なく戦えるけど、洞窟とか狭い場所は苦手だし・・・。

アツガイが腕を伸ばして、狭い場所でぴよんぴよん飛び跳ねるみたいに、

エピオンもぴよんぴよんさせたかった。」

「そもそも、狭い場所で可変系MSを戦わせないほうが・・・。」

「・・・だって、俺のサブガンブラ、弱っちいんだもん・・・。」

すぐにある程度性能の高いガンブラを用意できるセイからすれば、

かつて作ったビルドストライクMk-IIなどの予備ガンブラを控えさせておくこと

は容易である。

しかし、いくら世界最高峰のビルダーであるセイから薫陶を受けた男であっても、

エピオンレベルの予備機を準備するにはさすがに無理があった。

なぜか迷走して、リーオーとトラスを作って、ホテルに持ってきたはいいものの、

預けっぱなしであった。

「トールギスとかは？あれならエピオンみたいに早く動けるし、

使いやすい気もしますけど。」

「……ドゥーバーガンと、トールギスの速度差になれなくてやめた……。」
「あ……。」

トールギスはその殺人的な加速度により、ガンダムレベルの速さを獲得している、
”プロト・リーオー”である。

後継機であるⅢあたりなら武装も違うが、初代のトールギスの場合、

機体はかなり早いのに、持っているのが実弾系でビームより遅いドゥーバーガンと言われる射撃武装なのだ。

つまり、機体の動きは相手を翻弄できるほど早いのに、

威力は高いが少し遅いドゥーバーガンと、武装が微妙にあっていないのである。

「まあ、とりあえず予備のガンプラは作ったよ。……焼け石に水かもしれないけど、まだピリオドは長いし……。」

「そ、そうですね……。」

一通り、改造案を出し切った二人はまた沈黙し、部屋に静寂が訪れた。

そして、これが本命と言わんばかりに男はセイにほつり、とこぼす。

「あ……。あのさ……。いや……。子供にこんなこと聞くのもあれなんだろうけど……。」

「えっと……。なんででしょう?」

聞くべきか??でもさすがにまだ14歳くらいの子供に、こんなこと聞いていいのか??と男の良心が躊躇させる。

しかし、男は自分の周りにほかに頼りになりそうな人がいないことに気が付き、セイに聞くしかないと判断した。

ラルはガンプラバトルについての知識は深いが、こういったことについては門外漢であった。

「・・・例えば。ああ、例えばでこれは俺の友人の話なんだけど・・・。

自分が付き合っていた娘がいるとするだろ??」

「はあ」

「・・・で、実はその娘は途中で他に好きな人ができちゃった可能性が非常に高いとする。・・・いつかはそちらの男の方になびく可能性がめっちゃありえる、ってハナシね。」

「はあ」

「たまたまそれを確信できる情報を知っちゃったから、じゃあ、いろいろと思うところはあつたけど、別れる、ってなったんだけど・・・。」

「はあ。」

「……その別れたはずの相手から、なぜかめっちゃ言い寄られて、

で、あれ??なんか俺の思っていたのと違う??あの娘は、あいつが好きじゃなかったのか??惹かれていたんじゃないかったのか??ってケースなのよ。」

「はあ。」

「……どうしたらいいと思う??」

「そんな重い話をされても……。」

「せやね……。」

まだ中学生くらいというのに、痴情のもつれに巻き込まれそうになったセイは、死んだ目をして男に答える。

実は、セイもとある少女に惚れられていて、未来では正式に付き合うことになるのが今時点の恋愛経験があまりない彼にとって、そんな話を相談されてもどうせいっちゅーの、という状態であった。

「……あの、貴方はその人のことをどう思っているんですか?」

「……嫌いじゃない。付き合っただけはいたんだし……。」

でもなあ……その、かなりの高確率だとある男が好きになった。

そっちの方に近々なびく可能性がある、って知っちゃまって俺なりに行動を起こしたん

「だけど……。」

「……別れるときに、なんでか、って説明したんですか？」

「……………」

「してなかった……。」

「……それが原因では？」

「」

正論で顔を横殴りにされ、男は両手で顔を抑えた。

いくらガン普拉バトルでは世界上位に食い込める腕を持つと、

恋愛に対してはクソソザコであり、赤ん坊レベルである。

しかも、自分より10歳以上の子供に淡々と指摘をされ、

羞恥でうおおおおう・おう・おう……と嗚咽の声を漏らした。

「……やっぱり……まずかったかな……？」

「それで、納得する人っているんですか……？」

「せやな……。」

また熱い正論でボディーブローをかまされ、

男は肩を落とした。

そして、もしかしたら、万が一だが、別れた彼女の今の言動を見るに、

自分が知っている通りに流れにならず、違う未来に進み始めているのではないのか、と考え始めた。

自分が付き合い始めた時には、すでに彼女がとあるイタリアの伊達男に惹かれているのでは？と男は20歳のころに蘇った前世の知識をもとに断定し、

その通りに行動を起こした。

それに何よりも、倒したい相手がいる、という点については嘘偽りはなかった。

ガンダム・ウイングの改造機を操縦し、世界大会のベスト8にまで上り詰めたのとは対照的に、男は世界大会の予選で毎回敗戦を喫し、決勝トーナメントまで進むことさえなかったのである。エピオンのライバル機を扱い、その性能を最大限に発揮しているところを見るたびに、エピオンの性能を引き出しきれしていない自分のふがいなさを嘯みしめ、さらにガン普拉バトルにのめり込むのだった。

「……どうしたらいいと思う？」

「……あそこまで女性が言ってくれているんですから、さすがに一度は話し合ったほうがいいと思うんですけど……」

「なんか、すいません……」

中学生の少年に諭され、なんかもう、いろいろといたたまれなくなった男はセイに謝った。

一歩間違えれば痴情のもつれ、SchooO Daysなことになりそうな出来事に子供を巻きこもうとしてしまったことに今更ながら羞恥心を覚え、またうおおおおとうめいた。

「……うし。わかった。……とりあえず……ちよつと……いや、いまのあいつと正面から話すのはぶつちやけ色々怖いけど……。話してみるわ……。」

「……世界大会が終わったら……。」

「……それ、世界大会が終わっても話さないですよね……?」

「……け、決勝であいつに当たる前にはするから……。」

一日にメール200件を送ってくる相手と正面から顔を合わせて話すのこわい、と漏らす男にセイはジト目でマジレスする。

「ついに男も観念したのか、決勝トーナメントで当たる前には必ず話をする、と宣言するのだった。」

「——あら。やっぱりここにいたのね。」

「．．．．．っ!?!?」
「あ。」

男が自身の心情をセイに吐露していると、声が二人に掛けられる。

その声を聴いた瞬間、男は身をこわばらせ、セイはじりじり、と男から距離を取った。少年特有の多感な時期であつたからか、すぐさま危険地帯からエスケープせねば、とセイの体全体が目の前的美女に対してアラームをあげている。

男はすぐさまソファアールから立ち上がり、逃げようとするも女性が上からのしかかり、膝の上に乗つたため、それも叶わずにソファアールにまた腰をすんとおろさせられた。

「——うふふ。ねえ、何をあの子と話していたの?」

「．．．．．。」

「．．．ふうん? やつぱり、エピオンの改造はあの子の仕業だつたのね。」
「!?!?」

「あ、怒っているわけじゃないわよ? ．．．ただ、一方的に別れを告げた挙句、私じゃなくって、赤の他人にエピオンの改造を任せて、一言も相談してくれなかつた、ってだけですものね?」

「……………おこつてりゅ？」

「……………うふふふ。」

「」

速足で控室から退室しながらセイは思った。

自分も、誰かと付き合うようになったら、尻に敷かれないよう気をつけよう、と。

こうして、まだ青春ざかりの少年の心に、女性に対する消えぬ恐怖の種がまかれつつ、
第三ピリオド前夜の夜が更けていった。

フエリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガン普拉バトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編―第三ピリオド編―その1）

ガン普拉世界大会第三ピリオド。

ピリオドごとに種目が変わり、第一ピリオドの四人対戦。

第二ピリオドの超大人数バトルロワイヤルと来て、第三ピリオドはウエポン・バトルである。

それぞれのファイターは一对一形式で戦い、そして使用できる武装は、大会側から準備されたウエポン・ケースにある武器だけだ。

例えば、その中にカラスプレーしか噴き出すことができない文字通り、スプレーガンが入っていたとしても、トンファーしかないとしても、それで戦うしかないのだ。

極例外として、原作ではなぜかセイ・レイジペアと、ルワンダラーは、バトルというかまんまアイア○・リーガーで、野球勝負をしていたが。

マオ、フェリーニ、アイラ、ニルス、レナート兄弟、メイジンカワグチといった実力者たちは早々に勝ち残り、新たな白星を刻んだ。

そして、件の主人公である男も戦場に赴くために、

自身の相棒をひっさげて、叫ぶ。

「ガンダム・エピオン・イエフィム!!!出るぞ!!!」

♪

——なぜか、その後ろに黒髪の美少女を引き連れて。

「頑張つてね♡」

「……………」

既に第三ピリオドを勝ち上がった少女は、自身の意中の相手の応援に駆け付け、

その勝利を願っていた。

勝ちあがることによつて、更に彼女と一緒にいる時間が増えることに男は気をやきもきさせたが、負けるのも嫌だったので、とりあえず会場中からの生温かな、

”ああ……やっぱり付き合っているんだな……”という視線を振り払うように、意識を操作に集中させ、外界からの余計な情報をシャットダウンする。

イエフィムがミノフスキー粒子を消費し、背部のバーニアを噴かせて

ガンプライフィールドに繰り出すと、そこはどこかの内部なのか、薄暗い道が続き、その横に掛けてある松明で周りが見える状態であった。

(・・・屋内か。・・・MA形態にはならないほうがいいな)

高速移動が可能なエピオンのMA形態で移動できなくはないが、万が一、そのスピードで洞窟の壁にぶつかつた場合、

機体の損傷が目も当てられないことになることを危惧し、

MS形態で、中の道を進んでいく。

入り組んだ道が多く、横別れになっている細道もあり、

迷路に近い形状である。

歩くこと1分ほどして、先ほどまでよりとは違う、

機体同士を戦わせるためであろう大きな空間に出る。

目の前に”13”と書かれた長方形の箱を発見し、

それに近づくと、それが第三ピリオドで使う武装が入ったコンテナであることを

男は認識する。

(・・・さて。せめてマシな装備が入ってくればいいんだが・・・)

そう思いながら、コンテナを解放すると、そこには彼も見ただことのある装備が入っていた。

丸い黒の物体が数珠のようにつなぎ合わせられ、鎖のような形に近い、巻き付けるための形状の武装。

（・・・あー。これかぁ・・・。）

男も当然知っている武装であるが、エピオンとの相性は最悪と言える。

チエーン・マイン。”ポケットの中の戦争”に出てくる、ケンプファーが使用していた

近接戦用の武装である。

エピオンの得意な戦闘が近接格闘であるとはいえ、相手に巻き付けて、爆発させるチエーン・マインはスピードで翻弄し、かく乱して突撃を繰り返すスタイルとは合わない。

どうしたものか、と男が頭を悩ませていると正面の反対口。

そこから相手の機体がやってくる音が洞窟内に響き渡り、姿を現す。

ずしり、ずしりとその機体の重みを表すかのように一歩歩きたびに

エピオンよりも大きな音を洞窟に鳴らしながら、にじみよる。

機体のベースはサーペント・カスタムのパーツを使用しており、

肩と腕にはビルゴ・II、背中にはメリクリウスの持つプラネイト・デイフェンサーを

待機させ、身にまもっていた。

背中側だけでなく、肩にもビルゴIIのプラネイト・デイフェンサーが備え付けられているため、そちらも展開しだすと、360度を動き回るファンネルのように、本体を守るべく空中に漂い始めた。

そして、右手にはバルバトスのメイスを持っており、エピオンの存在に気が付いたカスタム機、

ビルペンス・OZが全速力で駆け寄り始める。

「……くそっ!!」

駆け寄ってきたビルペンスに対して正面からMA形態に変形し、

突撃するエピオンは、プラネイト・デイフェンサーの隙間を縫うように、

本体に攻撃をしかけようとするも、自由自在に動き回るプラネイト・デイフェンサーが正面部分に集中して分厚い装甲のように固まり、思わず右に軌道をそらし

回避する。

メイスが届かない距離まで離れ、エピオンが着地する、

笑い声が響いた。

「ふふふふふふ……はっはっはっはっはっ!!」

プラネイト・デイフェンサーを多重に搭載し、

防御力を極限まで高めた機体。

このピリオドでは元々持っていた両手装備のダブルガトリングガンを使うことができなくても、プラネイト・デイフェンサーによる圧倒的防御力により要塞のごとき堅牢さを誇る。

ネルス。今大会で初めて世界大会の予選を勝ち上がり、本戦に出場をした

女性パイロットである。

「見たか!!見たか!!我が、愛機の圧倒的重装甲!!たとえ、バスター・ライフルであろうと、一撃は耐えられる仕上がり!!原作のOZ機体とは違うんだよ!!原作とは!!」

テンションMAXで八重歯をむき出しにしてしゃべる金髪の女性。

その独特のコンセプトを目にしたからか、それともそのような機体をそもそも見たことがない珍しさからか、観客席から歓声があがった。

（・・・っち。思った以上に硬い・・・。ここが開けたフィールドでないうえ、

ヒートロッドも、ビームソードも使えない。・・・ドラゴン・クロウはぎりぎりOKか?いや、でも武器判定でアウトだった俺の負けだ・・・。）

自由に武装が使えず、ルール通り与えられたチエーンマインしか使えないエピオンに對して、ビルペンスを操るネルスには追い風が吹いていた。

MA形態時の突進は、360度に展開している大量のプラネイト・デイフェンサーで封殺し、近づいてくればメイスで吹き飛ばして距離を取り、またプラネイト・デイフェンサーを展開しながら近づく、という方式だ。

プラネイト・デイフェンサーは武器ではなく、あくまでそれ以外の追加オプション扱いのため、使ってもアウト判定が出ないことにネルスは笑みを深め、叫んだ。

「——さあ!!やろうぜ!!私のビルペンスのパワー!!存分に味わいなあ!!」

プラネイト・デイフェンサーを身にまとったビルペンスが

再度エピオンに向かって走り出す。

第三ピリオド、ドラグ・エピオン・イエフイム VS ビルペンス・OZ・カスタムの戦いが始まった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（世界大会バトルロワイヤル編_第三ピリオド編_その2）

——選手たちが勝ち上がり、第三ピリオドを攻略している中、不穏な動きが地下でうごめいていた。

ガンプラ世界大会会場のマシタ会長が座っているVIP席にて、彼の秘書が淡々と連絡事項を述べていく。

「——メガザクの投入による、イオリ・セイ、レイジの排除は失敗いたしました。

つきましては、次の手段を考案いたしました。」

「ふーん。それってどういうヤツなの？」

「はい。あの1/48サイズのメガザクを動かすことによつて、それまで取得できていなかった有人ガンプラに対する戦闘データを記録。．．．これにより、戦闘力の底上げにいたしました。」

「でも、第二ピリオドはバトルロワイヤルだからパフォーマンスとしてあのおつきなげ

クを投入できたからいいけど、他の試合じゃ無理でしょ？……何とかできるの？」
未だに元気に戦っているレイジたちの姿を見て、

ぶるぶる、と身を震わせるマシタ会長。

彼はとある理由により、自分がいた故郷から逃げ出してきており、

レイジはマシタにとって、同郷の人間であると同時にどうしても排除しなければなら
ない相手であった。

第二ピリオドではメガザクを解き放ち、セイ、レイジペアを優先して狙わせたのもこ
のせいであった。

「こちらのデータをもとに、ガンプラマファイ……失礼いたしました。在野の腕
の立つガンプラファイターが扱う機体の性能を底上げいたします。」

「へー。そりゃあいいねえ。」

秘書の言葉ににんまりと笑うマシタ会長。

さっさと憂いを断ちたくて仕方がなく、お気に入りのワインさえも味気なく感じる。
だからこそ、指名手配されているガンプラマファイアさえも引き込み、

大会で暗躍してでもレイジたちを大会から追い出したい、との意図があった。

原作通りであれば狙われるのは彼らだけであった。

しかし、とある男の行動が一つのバタフライ・エフェクトをここでも生み出した。

「———そういえば。あの二人……うん。スタービルドストライクだったけ？」

・・あれをかばったやつらがいるよねえ？」

「そちらもすでにプロファイリングしております。……もちろん、こちらの選手にも手厚い“歓待”を差し向ける予定です。」

「わあ!! さつすがだねえ!! ……うんうん。いいねいいねえ。」

・・・・じゃあ、後は任せるね？」

「はい。お任せください。」

秘書は会長室を出て、歩きながら考える。

メガザクからスタービルドストライクを庇ったガンプラファイターについて。

そして、メガザクにとどめを刺したとある少女のことも。

その結果、ガンプラファイターのガンプラを保管している保存場所にて、

”ある機体”を見つけたことを。

あれをうまく使えば、容易にレイジたち、そしてエピオンのパイロットを排除できると算段を立てた。

かくして、男は知らない。

自分の行動が、自分の首を絞めたことを。

——その結果、あるべき結末とは違う形でドラグ・エピオン・イエフィムを喪うことになることを。

概ね原作通りに進んでいると考える男には、知ることができなかつた。



「——あつはつはつはあ!!そらそらそらそら!!!!どうしたあああ!!!!」

「くっ・・!!」

第三ピリオド。ジャブローに続く洞窟内を模倣したフィールドにて。

エピオンとそれを扱う男は苦戦を強いられていた。

自身の強みである速さを活かした戦いが屋内では充分に発揮することもできず、

大量のプラネイト・デイフエンサーを身にまとったビルペンスの振り回すメイスをよ

けながら、攻め手を伺う。

「——そこおっ!!」

時折、メイスをふりまわして出来た隙をつき、エピオンの拳をビルペンスに当てるためにその右腕が振り上げられた。

だが、その拳は相手に届くことなく、途中でプラネイト・デイフエンサーによって阻まれ、弾き飛ばされる。

「はっはっは!!!無駄無駄無駄あ!!!無駄だよ!!!私の絶対防御を崩したいんだったら……サテライト・キャノンか、アトミック・バズーカでも持つてくるんだね!!!」

「厄介なもん積みやがって……!!!」

プラネイト・デیفエンサーを身にまといながらビルペンスは体当たりをしかける。

それを真上へ飛行し、エピオンがぎりぎりのタイミングで躲すと、

ビルペンスはそのまま壁にぶつかり、大きく洞窟が揺れた。

上から落ちてきた大きな土の塊がビルペンスに当たると、

それでもダメージは特になく、多少頭部が汚れただけである。

「んん?外したか。……でも、逃げたって無駄だよ!!!」

（……どうする。）

壁から抜け出し、メイスとプラネイトデیفエンサーを構えながら、

ビルペンスは一步一步、ゆっくりとイエフイムの方へ歩みを進める。

相手が倒れるまで攻め続ける。

自身にはそもそもその機体の重装甲とプラネイト・デیفエンサーがある限り、

近接戦ではつねに主導権を握れる。

そう判断してのことであつた。

男にとってはこれ以上なくやりにくいと同時に、

どこか”彼女”とは別の意味で苦手な相手でもあった。

(・・・チェーン・マイン。・・・だめだ。格闘をしかけて防がれたのなら、それよりモーシヨンの大きい攻撃は当たるわけない。)

イエフイムが背中を持っているチェーンマインは重装甲の相手にも通用する兵装である。原作では、ケンプファーがチョバム・アーマーを身にまとったアレックスの装甲を壊すことに成功しており、同じようにこの装備であればビルペンスの重装甲もぶち抜ける可能性は非常に高い。

しかし、そもそもプラネイトデイフエンサーがイエフイムの攻撃を阻害し、機先を制していることよって、容易に攻撃をしかけることを男にためらわせていた。

右腕で殴りつけたのも、MA形態での突撃以外では最短、最速の格闘攻撃であったからである。それが通り、かつ、いけそうであればチェーンマインを隙について使い、爆破する。その目論見は破産となった。

チェーンマインを使っても、壊せるとしたらプラネイト・デイフエンサーだけであり、その際に、メイスによってイエフイムがやられる可能性が非常に高い状況であった。

ゼロシステムを使おうかどうか男を迷わせていたのも、

あまりにもプラネイトデイフエンサーの数が多く、疑似的な未来予測がどこまで通用

するか。もし、通用しなかった場合はエネルギー切れに近い状態でビルペンスと戦わなければならない。そのために二の足を踏んでいた。

ありていに言えば、男はどうしようもなくピンチであった。

そして、そんな状況で

「ははは。．．．ははははは。．．．すげえな、アンタ。マジですげえよ。」

——思わず、男は笑った。

そんなことをしても、ごまかしにしかならず、現状が変わることがないとしても。

ただただ、子供が笑むように無邪気に、陽気に、呑気に笑った。

そこまで愛を注げるガンブラファイターに対して、面白おかしく笑うしかなかった。

同じWガンダム系の機体であるが、相手の使う機体はただの量産型。

エピオンみたいな主要機でもなく、ガンダムに倒されたやられ役に近い機体であった。

そんな機体を極限まで突き詰め、作り込んだ結果の機体が、

多少の不利があるとはいえ、徹底してエピオンを追い詰めていた。

自分の最高の相棒がやられそうになるかもしれない。

メガザクという例外はともかく、一対一のタイマンで、間違いなく最高傑作と男が信

じている相棒が。

そして、男はまた笑った。

「——それじゃあ、俺ももう一つの”奥の手”。．．．出すつきやないよなあ!!!」

——イエフイムの頭部が紅く染まる。

ゼロ・システムとは違う、禁じられたもう一つの”奥の手”を晒しだすために。

試験的に搭載したが、元カノのターン・エー・ウラノスとの闘いでしか使わなかった
まだ実験段階でしかないその機能を。

——『EXAM SYSTEM STAND BY——』

冷徹な機械音声か、洞窟に響き渡った。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（世界大会バトルロワイヤル編_第三ピリオド編_その3）

ガンプラにおける方向性は多種多様に別れる。

とりあえずドリルとか、一斉射撃とか、ぶっぱとか格闘だけできる機体とか、

スナイパーっぽいけど、実は近接のほうがも得意なんですよ（「U」）

ひゃあ!! 突っ込まねえタンクはタンクじゃねえ!! みたいな変人系の機体。

バーニア増設しまくって、ドヒャドヒャブーストを噴かせてフロ○ぼりの

変態高速機動をキめるスピード狂。

合理的にとことん勝率を高めるため、ベースとなった機体の長所を伸ばし短所を補う組み立てにして、堅実な道を征くもの。

そういう意味で言うと、ネルスが使用している機体、ビルペンスはサーペントにプラネイトデیفエンサーを後付けし、徹底した防御と超火力の遠距離武装により終始相手を圧倒する機体である。

ロマンも多少入っているものの、勝つために機体の性能を引き上げ、相性の良い武装を組み合わせた合理的ガンプラである。

彼女にとって自慢の相棒は、無敵の要塞さながらの防御面を信頼していた。

どのような射撃も通さず、戦術兵器、戦略兵器クラスでなければ貫通することもない多重プラネイトディフェンサーを。

だが、その目の前にいる相手の行動に、驚きを禁じ得なかった。

エピオンの頭部、正確には目が紅く発光し始め、

異様な様相へと変貌した。

それと同時に、MS形態のまま背中中のバーニアを全力で稼働させ、

一直線にビルペンスへと突っ込んでくる。

「——何度やっても!!」

「・・・ぜああつ!!」

殴りつけてくるエピオンに対して、プラネイトディフェンサーをぶつけて

行動をキャンセルさせようとする。

だが、先ほどよりも明らかにスピードが増しており、

今までと同じ動きを予測した位置に放ったプラネイトディフェンサーの半分が外れ、

そのまま拳が顔まで届けられんと伸ばされる。

左腕を目の前に構え、ガードの態勢をとるビルペンス。

（この攻撃をしのいで、控えさせたもう半分のディフェンサーをぶつけて、よろけさせたところをメイスで終わり!!・・・撃ってこい!!）

右腕にメイスを構えておき、あげておいた左腕ではじいて、

反撃で倒すビジョンを浮かべたネルスはにまり、と笑みを深める。

自身の勝利に揺らぎはなく、負ける可能性もない。

だが

「——おらあああつ!!」

——エピオンの右腕が、ビルペンスの左腕に絡め止められ、

そのまま地面へと引き倒された。

EXAMによる機体性能の底上げにより、本来であれば不可能であった、

重装甲を身にまとうビルペンスを力技で引き倒すという行為が可能となる。

「ぐっ!!?」

まさかそのまま殴るのではなく、倒されると思わなかったビルペンスは虚を突かれ、反応がわずかに遅れ、そしてすぐさまエピオンが左腕に隠し持っていたチェーンマインが巻きつけられた。

「くっそ!!こんなもの!!」

いつも通り、相手を弾き飛ばして圧殺するためにプラネイト・ディフェンサーがエピオンに巻き付けられ、全身を覆われてしまう。

射撃から身をまもるだけでなく、こうした使い方ができる強みが、プラネイト・ディフェンサーの恐ろしさでもある。

「は!!はははは!!」

ぐぐぐぐ、とEXAMにより、何とか機体が壊れずにすんでいるものの、

徐々にその物量によつて、プラネイトディフェンサーに押しつぶされていくエピオン。一度は驚かされはしたものの、今度こそネルスは勝利を確信し、叫んだ。

「これで!!私の勝ちだ!!」

そして、気が付いた。

——相手を覆うために、プラネイトディフェンサーのほとんどをエピオンに使い、チェーンメインが上半身に巻き付いたままの自身の無防備な姿に。

当然、ビルペンスの身を護るものは何もない。

「お、お前・・・!!?」

「・・・助かったよ。堅実な戦い方をしてくれて。」

ネルスは冷や汗を浮かべて、信じられないといった表情でエピオンの方を見る。

攻撃を当てるためには、自身が隙を晒さなければならぬ。

相手の守りが硬ければ硬いほど、攻撃を通すのは難しい。だから、男はそうした。

「まさか!!包み込まれることを承知で、チェーンマインをあてに!!?」

馬鹿な!!それじゃ相打ちだろ!!?」

「ああ。まったく、ここが狭くなければもつとほかにも戦い方はあったんだけど。……一度お前の戦い方を見て、やらざるを得なかったよ。」

みしみし、と悲鳴をあげてきしんでいくエピオンを見て、男は自嘲した。

無理させて悪いな、相棒、と。

そして、己の愛機の性能を信じているからこそ、取った行動でもあった。

慌ててエピオンを包み込んでいたプラネイト・デイフエンサーを戻すために、ネルスは次の行動を即座に取ろうとした。

「まずい!!戻れ!!!」

「——もう遅い!!」

相手を押しつぶしていたために使われていたプラネイト・デイフエンサーがビルペンスの方へと向かい、本体を護るために飛んでいく。

それと同時にがちり、と起動音が鳴り、ビルペンスに絡みついたチェーンマインが起爆する。

——閃光と、爆音がフィールドを包み込み、洞窟は静寂に包まれた。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する～（世界大会バトルロワイヤル編_第三ピリオド編_その4）

轟音が洞窟内に響く。

灼けるような風が辺りに吹きすさび、爆心地の近くにいたエピオンはその余波をもろに受けて、押し流される。

地面をバウンドして転がり、ビルペンスがいた場所から壁際まで移動させられる。

機体のあちこちにヒビが入っており、

まだ稼働はするものの、浅くない傷がエピオンに刻まれており、

痛々しい見た目である。

「——はあ。．．．マジで負けるかと思った。」

エピオンを立ち上がらせながら男ははああ、と安堵からため息を漏らす。

デザートシユピーケル、ザクスナイパーII、青い巨星、レナート兄弟、スタービルド

ストライクなどの数々の強敵と戦ってきた経験はあるものの、

ここまで追い込まれ、やりづらい戦いは初めてであった。

爆発の余波を受け、天上からはばら、ばら、と細かな石が降り注いでおり、先ほどの爆発の大きさを物語っていた。

だが、どうあれ男の策は上手く行った。

エピオンが立ち上がると同時に、それまで発動していたEXAMの効果が切れ、頭部から発していた紅い光が収まる。

「——やってくれるね。」

「…!?!」

爆発した個所から立ち上る煙に人影が見える。

ぎぎぎ、と何かがきしむ音が聞こえ、

男が驚きの表情を浮かべながらそちらを見ると、そこにそれは立っていた。

思わず、こぼす。

「……マジか……。」

——煙が晴れ、人影の正体があらわになる。

上半身の装甲がところどころはがれ、ボロボロに汚れ、

それでもなお、まだ動くビルペンスの姿が。

そして、ビルペンスの無事な関節部分を見て、男は再度驚きの声を心の中であげる。

（全身を覆うのは無理だから、

チエーンメインが絡まっていない、弱い関節部分に

プラネイトディフェンサーを身にまとって

ダメージを最小限に!!一瞬でそんな判断をしたっていいのか!!?)

ネルスのやったことは至極単純である。

プラネイトディフェンサーは外部からの攻撃を遮断するのに有効だ。

だが、チエーンメインのように、すでにとりつけられてしまった

ものをはがしたり、それらから身を護ることはできない。

なので、ダメージを負うことは必至であり、

本来であれば、これで勝負が決まっていたはずである。

——ゆえに、壊れたら困るビルペンスの関節部分だけにプラネイトディフェンサー

を展開させ、とっさの弱所を護りきった。

関節部分にくっついていたプラネイト・ディフェンサーは壊れはしたものの、

本体を防護するには成功しており、その役目を果たした。

両腕をぶらぶらと動かし、機体の損傷率を把握しながら

ネルスは苛立ったように八重歯をむき出しにし、

吠える。

「——容赦しないよ!!覚悟しな!!」

そういうと、残りの4分の1ほどの数まで減ったプラネイトディフェンサーを再度前面に展開し、エピオンに突撃を行う。

エピオンは壁から離れ、横にステップし身を躲そうとしたが、

リーチを測らせないようぎりぎりまで後ろ手に隠しもっていたメイスを振りかぶられ、左腕に当たる。

「・・・ぐっ!!」

「ふつとびなあ!!」

めしやり、めき、という硬いものが碎ける音と共に、

メイスが左腕に直撃したエピオンはお返しとばかりに、

右足でビルペンスの頭を蹴り、頭部カメラを破壊した。

「!?」

「・・・!!」

メイスを振り切ると同時に、エピオンはビルペンスが立っている場所から離れたフィールドの出口近くまで飛ばされ、ビルペンスはエピオンの蹴りが頭に当たり、体をよろけさせ、地面に仰向けに倒れ伏す。

ぎゅぐう、と体からいびつな音を響かせながら、エピオンがすぐさま膝を立たせ背中ブースターを噴かせて、すぐ隣にあった出口から離脱した。

「・・・待ちな!!逃がしはしないよ!!」

頭部が破壊されたが、まだ戦う分には問題ないビルペンスをすぐさま立ち上がらせ、重く、スピードを出すために邪魔となるメイスを投げ捨て、同じくスラストスターを全力で噴射し、重装甲機と思えぬ挙動でエピオンを追いかける。



二人の戦いを眺める実力者たちは二の句を告げず、静寂に包まれていた。

男と少なからぬ面識のあるセイ、レイジペアは、どちらが勝つかわからない

死力を振り絞りあう闘いに、心臓の鼓動を早くして見守っていた。

「……すごい。まだ、二人とも微塵も諦めていない。」

「……………」

エピオンと切り結び合い、互角以上の戦いを演じた二人にとって、

世界大会の予選であそこまでエピオンが追い詰められるとは考えていなかっただけに、衝撃を受け、固まっていた。

かたや、高速軌道が命綱で、近接戦闘主体の可変MS。

かたや、超火力、絶対防御が主体の重装甲MS。

対極を極めたようなガンブラ同士の戦いに、目を奪われていた。

(…………あのサーペントの改造機を操る女性…………出来る。)

タイ代表ルワンダラーは、ビルペンスを操る女性、ネルスの頭の回転の速さ、そして卓越した操作技術に舌を巻きながら賞賛する。

プラネイトディフェンサーでチェーンマインの攻撃がすべて防げないと瞬時に判断し、使い捨てで関節部分を護り切り生き残ったセンスを。

彼はまだ第三ピリオドを戦ってはおらず、

エピオンのパイロットとも、ネルスともぶつかることはないが、

それでも決勝に残ってもおかしくない二人の動きを見定めるために、

映像で会場中に流れる光景を目には焼き続けていた。

（・・・絡め手に対して、あのような対策の仕方があるのか・・・。）

——何かを学習しつつある彼が、決勝トーナメントで周りを驚かせる出来事を引き起こすのは、まだ先の話であった。

フエリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガンプラバトル出場する（世界大会バトルロワイヤル編―第三ピリオド編―その5）

エピオンを追っていたビルペンスは、速度差によって生まれた距離により、機体を見失いかけ、その痕跡の一つ一つを調べながら洞窟内を歩き進める。

（……どこに行った？……こっちか。）

二手に道が分かれていたが、微妙に何かを引きずった跡が残る道に進路を定め、油断なく、辺りを警戒しながら突き進んでいく。

重装甲であり、そして上半身だけしかチェンマインが絡みつかず、関節部分は損傷がほとんどないため、動くこと自体は問題ない。

あれだけあったプラネイト・ディフェンサーは関節に取り付けた際、そして、格闘をしている間に爆発の余波によって他のプラネイト・ディフェンサーも壊れ、ほとんどが使い物にならなくなっていた。

ネルスは、エピオンがチェンマインを使ったため、武装を持っていないと判断し、何

かを仕掛けられる前に追つてとどめを刺すことを考える。

自身のメイスも今のビルペンスでは逆に重荷となり、追撃する際に邪魔となるため、既に放棄していた。

わずかに残ったプラネイト・デیفエンサーで攻撃を防ぐことも難しく、逆にそれをぶつけて爆発させることをネルスは考えた。

機体のエネルギーを節約するために、この武装を最大限有効に使って廃棄し、格闘戦を仕掛ける必要があると。

（——いたか。）

洞窟の奥の方。おそらく、ジャブロー内部の基地を模したものである、建物が存在するエリアに到着したネルスは、自身の正面にエピオンが立っているのを見つけた。

（・・・よし!!きつさと近づいて終わらせる・・・!!）

互いに武装はもはやない。

壊れかけのプラネイト・デیفエンサー数個が届く距離まで近づいたら、それをぶつけてわざと爆発させ、発生した煙に紛れて白兵で仕留める。

プラネイト・デیفエンサーを操作し、エピオンの方に構えたその時、

ネルスは思いとどまった。

「——待て。．．．なぜ、あいつはあんな堂々と姿をさらしている?？」

ジャブロー基地内にまで来て、隠れられそうな場所がいくらかでもあるのに、身を潜めずに敵の前に姿を現し、逃げる様子もないエピオンに対して、

疑念を抱いた。

その時だった。

—— エピオンが右腕に何か丸い円盤状の物を持っていることにネルスが気が付いたのは。

「．．!?」

嫌な予感が頭をかすめた彼女は、ビルペンスのスラスタ―推進を全力で稼働させ敵機に近づき、攻撃するために一直線に突き進む。

「——そお、らあっ!!」

男の掛け声とともに、右腕に持っていた丸い円盤状の物体がフリスビーの要領でビルペンスに投げられる。

すぐさまネルスは、壊れかけのプラネイト・デイフェンサーをぶつけることで

身を守る。

二つの物体がぶつかった瞬間、先ほどビルペンスを包んだのと同じような爆発が再度起こり、あたりに熱風と、砂埃が舞う。

プラネイト・デیفエンサーがエピオンの投げた物体と激突し、大破する瞬間にネルスは相手が投げてきた物体の正体に気が付き、驚きの声を心の中で上げた。

（・・・チーンマイン!? 使い切ったはずじゃ・・・!!）

それは、すでにビルペンスに使用され、なくなったはずの武装であった。

チーンマインは確かにビルペンスに巻き付かれ、

爆発してその武器としての役割を全うした。

だが、次いでとある可能性が彼女の頭の中に思い浮かび、
そして思わず叫んだ。

「まさか!! 巻き付ける前に!! ちぎっておいたのか!!?」

チーンマインは地雷を鎖状につないだ武装である。

つまり、もともとつながっていた一つ一つの吸着爆弾を、

ビルペンスに対して使う前に半分の長さに分解しておき、もう半分を隠し持っていたのだ。

そもそも、チェーンマインでは装甲が分厚く施された重装甲系の機体はアーマーを削ることはできても、倒しきることは難しい。

原作の、「ポケットの中の戦争」でも、ケンプファーがチェーンマインをアレックスに対して使用したが、チョバム・アーマーだけの破壊に留まり、本体へのダメージはゼロの描写がされている。

そこまで男が考えていたかどうかは定かではないが、

プラネイト・ディフェンサーと、ビルペンス自体の硬さを見て、チェーンマインで機体上半身の前面だけ爆弾を吸着させ、

ダメージを与えることにしたのだった。

運よくそれだけで倒せないかという打算もあったが、関節部分に防御をされたために結果として撃破には至らなかった。

上手く行かなかったときのことも考え、

もう半分にちぎったチェーンマインを隠し持ちながら洞窟内を逃げ回り、

十個ほどのチェーンマインをビルペンスが追い付く前に一個一個分解して、単体で使えるようにしたのだった。

つまり

（・・・さつきと近づかないと、またあの爆弾を投げつけられるってわけかい!!）

すぐさま土煙が辺りを覆うのも気にせず、ビルペンスを急上昇させ、

視界が晴れる上空へと機体を飛行させると、

正面で、またマインを投げようとしているエピオンに向かって特攻する。

距離が近づくと、エピオンは右腕に持っていた単体のチェーンマインを投げつけて

応戦するが、右にブースト回避され、右腕で殴り掛かれた。

後ろにバックステップをし、回避したエピオンをビルペンスが追撃する。

そして、バックパックからスラスタによる噴射をせずに、

ボロボロの足でジャンプして拳を躲すエピオンを見て、ネルスはほくそ笑む。

（——よし!!さつきのEXAMですでにエネルギーがないな!!——これでえ!!

私のお!!）

エピオンを追うために、先ほどまで敵機がいた前の地面に一度着地し、

スラスタが噴射できるようになったら、すぐさま飛んで、

まともに飛ぶことができないエピオンをしとめる。

そのために、ネルスが駆るビルペンスが着地し

カチリ、と音が響き、ビルペンスが爆発に包み込まれて大破した。

「・・・は？」

自身の愛機が突然爆発したことに對して呆氣にとられたネルスは、何が起こったかわからずに、呆然と声を漏らした。

エピオンのファイターである男が、冷や汗を垂らしながら述べた。

「——それを踏んでくれていなかったら、俺の負けだった。」

そういわれたネルスは、すぐさまなぜ爆発が起きたか考察し、

そしてその答えにたどり着いた。

(・・・ああ、そうかい・・・くそつ。・・・爆弾を投げつけたのも、そういうことかい・・・。)

崩れ落ちるビルペンスに対してエピオンがボロボロの足を引きずりながら近づく。

もう動くことはできないが、いまだに重装甲のおかげでまだ完全に機能停止していな

いから、とどめを刺すためである。

「・・・あんだ、引っ掛けやがったな。二度も。チェーンマインを投げつけたのは、当てるためじゃなく、煙を起こして視界を見えにくくすること。」

「——そして、地面に地雷がもしかしたら仕掛けてある、なんて連想させなくするため。」

「残りのチェーン・マインをすべて爆弾として投げつけて、私を倒すふりをしていた。」
「・・・動くMSに爆弾を投げたつて、早々当てられるわけない。ビーム兵器ならともかくない。地面を爆発させて、煙を起こすことくらいしかできない。」

「それで充分だったろう。・・・それくらいしかできない武装に負けた私への当てつけか？」

「いや、マジであんだ強かったよ・・・。」

「会話で時間を稼ぎながら、ネルスは自身のバラバラになってしまった機体が動かせないか、プラネイト・ディフェンサーをエピオンにぶつけることができないか試したが、すでに何の操作そのものがないほどにダメージを負ってしまっていることを認識すると、即座に告げる。」

「——降参だ。私の負けだよ・・・。」

——彼女が降伏を宣言すると、フィールド上に“Battle End”の表示が浮かび上がった。

フェリーニに彼女寝取られた男の一人に憑依したので、先に彼女と別れておいて、ガン普拉バトル出場する～（世界大会バトルロワイヤル編_番外乱闘 VS チョマー）

「——これは!!聖戦である!!」

「「「うおおおおお!!」」」

「えー……」。

元同志、チョマーに電話で呼び出された男は、のこのこと一人

アリーナの内部にあるガン普拉バトル練習室にやってきて、

熱い歓待を受けた。もちろん、主に嫉妬、怨嗟がこもりにこもった野郎ども

のお出迎えである。

「——同志!!いや、元同志よ!!」

「あ、はい。」

なんか、ノリノリで声を張り上げつつ、俺に向かつてびつ、と人差し指を差し、宣言するチヨマー。

最初にちよつとテンション高めで迎えちゃったから、途中から素に戻って冷静になると恥ずかしいのか、そのままのノリで突っ走り続ける。

エピオンのファイターは、元カノに部屋でベッドに押し倒され、

あわや今度こそ捕食されるといったその間近で、電話がチヨマーからかかってきたのである。

ちなみに、その電話によつていい雰囲気だったところを邪魔された元カノは、スツ、と目を細めながら通話相手の声を耳をそばだてて盗み聞きし、

”・・・ああ、あの人ね・・・”と通話相手を断定した。

ストーキングスキルを兼ね備えた乙女にとつて、これくらいの所業は難しくもなんともないのである。

話し合いをしようとしていたのに、有無を言わずに襲われかけ、奇跡的なタイミングでかかってきたチヨマーの電話に救われた男は部屋から飛び出し、

指定された場所までやってきた、という経緯である。

そんな一歩間違えれば18禁な展開になっていたことを知る由もない

チヨマーは熱く拳を握りしめ、断言する。

「俺は悲しいぞ!!お前もフェリーニに恨みがあるというから、

連合に迎え入れたというのに!!」

チョマーが恨みがましく告げる。

おそらく、彼にとつては”恨みがある”ということは、同じ寝取られた経緯があるんだな”という認識であり、エピオンのファイターは”経緯はどうあれ、原作での”俺”の彼女を寝取った上に、キララとかいう他の女子を選んだ浮気者をちよつと倒してやりた”い。”という理由であつた。

つまり、そもそもフェリーニの女関係がちよつとだらしなればそもそもは発生しなかつたであろうが、多少の私怨が入り混じつており、しようもないと言わざるをえない動機であつた。

「本来であれば、裏切り者であるお前を制裁するところだが・・・」

そう言つて、チョマーは目の前にあるガンプラフィールドを指し示す。

痴情のもつれという、どろどろとした事柄でさえさわやかに解決できるであろう、その競技をする場所に。

「——ファイターらしく、ガンプラバトルで蹴りをつけるでしょう!!」

そういつて、チョマーが取り出したのは、自身が作った中でも特に強い、ガウを作る代わりにリソースをつぎ込んで作成したMS。

EX—S・G・カスタム。

豊富な武装に加え、フィールドさえも備わっている

超高性能機である。

「……わかった。」

男は、チョマーの言う通り勝負することにした。

自身が思っていた元カノの気持ちと、

現状の元カノの気持ちに差異があるにせよ、

よりを戻そうと言い寄られるところを見て、

裏切り者、と同志から言われても仕方がないと思っていたからである。

本来であれば、もっと恨まれても仕方がないことをガンプラバトルという

リアルファイトしないスポーツ的勝負で決着をつけるあたり、

彼らも十分常識のある大人と言えた。

「へっ!!そうこなくつちやなあ!!——ガウを作る代わりに作成し、完成させた

俺の新たな機体!!!最高傑作だぜ!!!」

「——俺だって、最高の相棒がついてる。」

男もチョマーと同じく、自身の愛機を取り出し、フィールドにセットする。

「ドラグ・エピオン・イエフイム!!出る!!」

「EX-S・G・カスタム!!出るぜ!!」

お互いのかげ声と共に、戦いの幕が上がった。



「あれ?」

「どうした、セイ?」

「なんか、あそこらへん、人だかりができていない?」

同時刻にて、アリーナで第三ピリオドをルワンダラーと戦ったセイ、レイジは、会場のお店で食べ歩きをしていたところ、やけに人が集まっている一室を見かけた。部屋の外には人が群がっており、その中には彼らのよく知る人物もいた。

「ラルさん!!」

「ラルのおっさんじゃねーか。どうしたんだ?」

「おお。君たちか。うむ。見ればわかるよ。」

「?」

二人はラルの言葉にきよとん、とした表情で顔を見合わせ、ラルが開けてくれたスペースに体をねじ込むと

ガンプライフィールドで戦っているらしい姿が見えた。

「——あの人は?!?」

「エピオンのおっさん!?!: それに、あつちは第二ピリオドのしましま服のおっさんじゃねーか!!」

ドラグ・エピオン・イエフイムと、EX—S・G・カスタムが熾烈な戦いを繰り広げているのを見た二人は驚き、ファイターの顔を核にすると、思わず声を漏らす。

第二ピリオドでは散々自分たちを苦しめた相手同士がなぜか今は、

一対一の決闘をしていることに混乱しつつも、状況について

ラルに説明を求めらる。

「なんでこの二人が……?」

「私もよくわからんのだが、どうもあつちのドイツ代表の選手が、エピオンのファイターに怨恨があるみたいだ。」

「怨恨……? あつ……」

以前、男から元カノとの関係性について相談を受け、思わずマジレス神拳をかましてへこませたセイは、手で口元を抑え、ああ……と多少の納得を見せた。

「いいぞ!! チョマー!!」

「そいつは俺たちの敵だ!! やっちまえ!!」

美少女に言い寄られているところを見て、

何かしら思うところがあった男たちも噂を聞きつけて駆け付け

チョマーを応援し、エピオンのファイターに野次を飛ばす。

「???なんだ? あいつら? エピオンのおっさんに恨みがあんのか?」

「いや、ちよつと違うかなあ・・・。」

恋愛絡みに疎いレイジにとつては、場の機微を察することも難しく、

ただ、昔エピオンにやられて恨んでいる男たちが囃してっていると想像し、

つぶやくが、セイが困り顔を浮かべ、相方に突っ込む。

「・・・まあ、どちらにせよ、二人ともやつぱり強いね・・・。」

「・・・ああ。見ているだけでウズウズしてきやがる・・・。」

「世界大会出場の常連だからな。そこら辺のファイターたちとはレベルが違う。」

三者三様の感想を述べ、戦いを見守っていると、ボロボロに疲弊した機体同士がサーベルを抜き切り結び合う。

互いに隠し持っている切り札をいまだ切ることもなく、

時間制限に到達し、フィールド上に”Battle End”と表示される。

切り結んだ態勢のまま、二機の動きは完全に止まり、プラスチック粒子が展開されていたフィールドが解除された。

「……引き分けか。」

「……そのようだな。」

ぜえ、ぜえ、と二人は息を切らしながら、

互いに全力を出し切っても、決着のつかなかった相手に脅威を抱き、しかし、それでも勝つのは自分だという意思を萎えさせることなく、自身のガンプラを手取る。

「……元同志よ。お前に返しておくものがある。」

「……?あ……。」

そういつて、チヨマーが男に近寄って渡したものは、

かつてチヨマーが男から受け取った予備パーツである。

第一次ピリオド参加する前に、ゲルググの修理に使用した備品である。

「その借りも含めて、今回の件は全部ちやらだ。」

……次会ったら敵だからな!!もう、連合には入れてやらんからな!!

あ、でもご飯食べに行くくらいならいつでもOKだからな!!」

「馬鹿やろー!!」

「この裏切り者がー!!」

「とつとと押し倒しちまえよー!!」

「女をあんま待たせんなよー!!」

チョマーと、その連合の男たちが口々にエピオンのファイターに

わざとらしく叫び、宣言する。

まさか、許してもらえとは思わなかった男は、はは・・・と笑い、

そしてチョマーに右手を差し出し、握手する。

「おう!!次は俺が勝つからな!!!」

・・・あ、でも彼女のことはもうちよい待って・・・」

「お、おう・・・」

前半ははきはきと答えていたのに、後半はぶるぶると身を震わせながら、

死んだ目つきでヘタレ発言をかます男に、チョマーは内心ちよつと引きつつも

握手に答える。

「あー。腹減ったなあ・・・」

「じゃあ、なんか飯でも食い行くか？」

「そうだな。」

二人の決闘も終わり、ギャラリーも面白いものが見れて満足と行った感じで各々が解散する空気の中。

チヨマーと、男の心臓を止めるような冷徹な声が室内に響いた。

「——何を、ちよつと待つてほしいのかしら？」

「」

「レイジ!!僕またお腹空いたから、あそこの売店で焼きそば食べたいな!!行こう!!早く行こう!!ね!!ラルさんも早く!!」

「う、うむ……。行くとしようか……。」

「は?なんでそんな……。おいおいおいおいおい!!」

二人とも早えよ!!ちよつと待てよ!!」

あれが……。噂の同棲脅迫女……。!!

なんてレベルが高い・・・!!

男たちは口々に黒髪の美少女の登場にテンションをあげつつも、その人物から解き放たれるプレッシャーにおののく。

話題の人物の登場に、観戦していた男たちは、我先にと部屋から出ようと出口に詰めかける。

さながら、ジャブローから脱出するために輸送便に行列を成した、テイターズ、連邦の兵士のようなのである。

「…………電話してきたのは貴方よね？」

「」

「…………あら？もう死んでる…………」

（プレッシャーを）強化しすぎたかしら。」

ターン・エー・ウラノスによって自身のガンプラを破壊されたトラウマを持つ
チョマーは、少女と面会するや否や、

防衛本能に従うままにその意識を手放した。

そり、と少女がチョマーを突っついてしている隙に、

忍び足でこの場から逃げようとした男は、

チョマーの元同志たちによって行く手をふさがれた。

「姐さん!!!こいつが逃げようとしてまっせ!!」

「なんてひどいやつなんだ!!」

「手のひらを返すなんて!!それが男のやることかよお!!」

「馬鹿つ!!いいから早く逃げるんだよ!!じゃないと・・・」

「こうなるって?」

がっちりと首根っこを男は少女につかまれ

引きずられていく。

首をつかまれた時点で男は抵抗することを諦め、

”南無妙法蓮華経” としきりに唱え始める。

「ふふふふふ。・・・大丈夫よ。この小説はR18じゃないからエッチシーンはない

わ。・・・でも、”裏側”では何したっていいわよね?」

「————う、うわああああ!!セイクン!!レイジくん!!ラルさん!!マオくん!!チヨマー!!同志たち!!この際フェリーニでもいいから誰か助けえええええ!!!」

ああああ・・・と男は叫びながら引きずられていき、

ホテルの自室まで連行されていった。

□ □ □ □ □ □

後に残ったのは、プレツシヤーに当てられて気絶した、元同志のチョマー達の死体だけであった。